
銀魂 摂夷篇

青華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 摘夷篇

【Zコード】

N41011

【作者名】

青華

【あらすじ】

銀時の過去、桂の想い、高杉の真実、坂本の願い。

様々な想いと事実が交差する中、「計画」は実行され、再び4人の武神は再会し、全ての真実が明らかになる。遂に銀魂最終篇、『攘夷篇』が幕を開ける！

4人の侍は出会い

4人の侍は誓い

4人の侍は別れ

そして、今、

再び「時間」は訪れた。

攘夷の武神と呼ばれた4人を中心に、物語は始まり、全てを巻き込み……そして、終わる。

銀時の過去。

桂の想い。

高杉の真実。

坂本の願い。

今、銀魂最終篇

『攘夷篇』

が幕を開ける。

第零訓 始まりの始まり（後書き）

第一話は明日にでも投稿いたします。
これからどうぞよろしくお願いします m(_ _) m

第一訓 人の話はちやんと聞く

「…ふああ…」

「銀ちゃん、腹減ったアル。…醜昆布貰つてくれヨ。」

「自分で買つてヨーい、もしくは探つてヨーい。」

「銀ちゃん、スクーター貸してくれヨ。盗つてくるネ。」

「神楽ア、子ビもはスクーターなんて危ないもん乗つちやいけねえんだよ?」

「…すみません、なんか今ツッ込むのもめんどくさい気分なんですねど。」

万事屋銀ちゃん。

「…」は名前の通り、依頼があればなんでもする店。

…しかし、今日は全く客足が無く、3人とも暇そうにしていた。

^ピーンポーン… ^

「お……」

♪ピーンポーン…♪

2回目のチャイム。

「お姫さんアル！」

それを聞いた銀時は急ぐこともなく、ダラダラと玄関へ向って行く。

何度もチャイムは鳴り響いた。

「あんだよ……うつせーな……」

銀時はだるそうに鍵を開ける。

「！？」

銀時が扉を開けるより先に、扉が開いた。

「銀時……！」

「な……」

……なんとそこにはいたのは、傷だらけになつた桂だった。

「……」これから真選組が来る……」

「……は……？」

「とにかく俺を中に入れてくれ……！」

桂は銀時の腕を掴んだ。

「……。」

銀時はその桂の言葉と様子を見て、すぐに状況を察知した。

(やうじゅうとか)

「……。」

銀時は扉を閉め、鍵をかける。

「……。」

銀時は無言で後ろを振り返った。

後ろには新八と神楽があり、2人を手招きする。

「桂さん……！」

「ヅ……ヅラ……」

「……静かにしる。こいつを奥へ運んで手当してやつてくれ。」

銀時は桂を抱え、新八と神楽に任せた。

2人は頷き、桂を奥へ運ぶ。

「……。」

（なかなか早いお出ましだな…）

銀時は再び扉を開けた。

「はーい、万事屋銀ちゃんでーす。」

「…………。」

「あひ？ 沖田くんと… 誰だてめえただの多串君なのかそいつなのか」

そこにいたのは案の定、真選組副長土方十四郎と真選組一番隊隊長
沖田総悟とその部下達だった。

隊服はこつもと違ひ薄汚れており、破れている者を幾こる。

「どうも、田那。」

「…………。」

沖田は淡白な無表情で軽くお辞儀した。
しかし土方は黙つて何も言わない。

「何だよノリ悪いな…。つかあんたらがウチに何の用？」

「…田那ア。…あんた今ウチに誰かいるかい？」

「誰かア……？」

「誰がいるか教えるつづてんだよ」
土方は少しイラついているように見えた。

「ああ？…今新ハと神楽と俺の幼なじみがいるけど」

「幼なじみ？」

「寺子屋の時からの。」

「…………その言葉…信じますぜ？曰那。」

沖田はジッと銀時の目を見つめている。

「おい総悟！」

すると土方が突然沖田に怒鳴った。

「……。」

「……万事屋…単刀直入に言う。

……俺達はさつきまで、ある攘夷志士を追っていた。

しかしこの辺りでその攘夷志士が突然いなくなつたんだ。

……不自然なくらいいきなり、な。

……隊士ン中にいんだよ…その攘夷志士がてめえの家に入った所を見た奴が…」

土方は目を光らせた。

「はあ……？知るかよ、んなの…。

つづーか俺まだイチゴパフェ食べる途中なんだけどー

「土方さん…」

「…………。」

「もういいじゃないですかイ…。」

(…確かに旦那が攘夷に関係がないって証拠はねえが…)
真選組と万事屋はお互い助け合った事だつてあつたのだ。

「…………悪かったな、万事屋…。行くぞ総悟。」

「へい。」

土方と沖田、そして真選組の隊士達はそろそろ万事屋を去つてい
つた。

「…………。」

銀時は静かに扉を閉めた。

(あー…氣分悪い…1個嘘ついちました)

「奴らに…嘘ついちました…」

(イチゴパフェ買えるような金なんてねーつんだけよ)

銀時はゆっくり部屋に戻つた。

「銀ちゃん…」

「桂さん、だいぶ落ち着きましたよ。」

桂はソファーに横たわっていた。

「…俺としたことが…あらぬ醜態をさらしてしまったものだな…」

桂は天井を見上げたまま、力無く笑った。

「…お前がそこまでやられるたあ…どうこう事だ…?」

「…少々…油断した…」

「…まあ土方も沖田もバカ強えからな…。」

銀時は小さくため息をつく。

「…それにしても銀時お前…真選組の輩と親交があるのだな…」

真選組、とはいわば攘夷志士の敵であるのだ。

「…。」

「…ジラ、別に真選組なんてただの腐れ縁アル。…でもジラは銀ちゃんの幼なじみネ、…親友ネ。」

「…。」

(「うつ氣分を複雑…と言つのだな）

「……攘夷志士を排除する」とは眞選組の仕事だ。致し方あるまい……。
……しかし、驚いたな……。あの銀時がまさか眞選組の輩と親交を持つ
つているとは……」

(あの……銀時、ね)

「……世の事をいちいちほじくつ返すんじゃねえよ、ヅラ。

「ヅラじゃない桂だ」

「……。」

それ以上は何も言わなかつた。

「……俺にとつては世の事ではないんだ……。悪かつたな……。」

桂は皿を細める。

「とにかく……落ち着いたらとつとと帰りやがれ」

銀時はフンッと鼻をならした。

「ああ……言われなくとも出て行くわ。……ただ……一つ言つておかなければならんことがある」

「？」

「……最近高杉の動向がおかしい。……気を付けてよ。」

（高杉……）

聞き覚えのある、決して良い響きではないその名前に、新八と神楽は少し涙んでしまう。

「……あいつ……また京に戻ったんじゃなかつたのかよ」

「いや……戻つたのは戻つたんだが……それからの動きが不審極まりないのだ。」

桂が大きめにため息を吐く。

「？」

「高杉が京に入つてからいきなり高杉の動向に関する情報が耳に入らなくなつた。」

「つまり……高杉が全く動かないか、以前より隠密に行動しているかのどちらか……または両方か。」

「まあどちらにせよ不自然なのに変わりはない。」

「……ふーん。」

まあ忠告はありがてえが……俺にひとつちやそんなの無意味だぜ。
てめーも言つたろ？

あこつと次会つ時はあこつをたたつ斬るときだ。」

「……あ。…それならいいんだ。」

桂は少し間を空けた後、呴くように言った。

「……。」

＊＊＊

桂は万事屋を出て、隠れ家への家路についたところだった。

（銀時… 今回ばかりはお前の力を以てしても…）

不吉な暗雲が、立ちこめていた。

To be continued . . .

第一訓 人の話はちゃんと聞いて（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございました。

また次話でお会いしましょう！

第一訓 漫画は伏線があるから」と面白い

江戸では雨が降りそうな黒い雲が出ているといつのに、京は結構な快晴であった。

そんな京の茶屋の座敷に、男女2人が並んで座っている。

…しかし、どう見ても恋人同士には見えない。

「…その後首尾は？」

「…うむ…上々…といったところだ」
「…」

「了解…晋助様に伝えておくシス。」

いつもとは違い、その男、万斎は地味な着物と羽織りに身を包み、隣に座るまた子もまたいつも派手な桃色ではなく、淡い桃色の普遍的な着物に身を包んでいた。

2人は笠を深く被つており、顔は余り見えない。

「…それにしても…良くやるツスね…。こんなつまらない仕事を…
また子はお茶を少し啜つた。

「拙者には交渉が一番向いている仕事だと自負しているでござる。」
万斎は少しだけ笑う。

「……それでも、今回ばかりはよくわからないッスよ。」

「？」

「……晋助様が何を考へてるのか…。
確かに同志が多いに越したことはないッス。
しかし……ここまでに同志を集めめる必要が本当にあるッスか?
……次は……確か大坂まで行くらしいし…。」

また子は納得のいかない様子だ。

「……まだまだ……足りないでござるよ。」

『計画』を実行し、成功させるには膨大な人員が必要……。」

「……何でツスか……何で、『計画』について詳しい事は晋助様と
アンタしか知っちゃいけないんスか?」

「……やがてまた子殿も知ることにならう。
それだけ大きすぎる計画なんでござるよ。」

「……。」

また子は田を伏せ、またお茶をズズズッと啜る。

「…しかし、やはり同志を集めるとなると邪魔になるのは桂でござる。」

「…桂？」

「あの求心力は厄介なものでな。
狂乱の貴公子・桂小太郎に心酔しているものも少なくない。
万斎は小さめにため息を吐いた。」

「なるほど…。… わすが晋助様と昔一緒に戦つていただけあるッス。」

「

「いや。…桂と晋助との関わりはそんなに小さなものではない

「え…」

「いや、桂だけではない。坂田銀時……あの男も雪助と深い繋がりがあるでござる。」

万斎は笠を更に深く被る。

「どういって意味ツスか？」

「また子殿は攘夷戦争を共に戦つっていたところまでしか知らないのでござるな？」

「そ、それ以上……何があるんスか……？」

「ああ……雪助と桂と白夜叉は……小ちこじみから幼なじみでござる。」

「え…ー?」

「それは仲が良かつたそりやな…。」

「…幼なじみ…」

途端、また子の表情が一気に曇る。

「攘夷戦争が終わった際に3人とも離れ離れになり、そのまままだ時が経ち、今のような状態になつたらしい。」

「幼なじみ同士で…いがみ合つてゐるんスか…」

(……また子殿の境遇を考えれば……まあ正しこ反応ではあるのか……)

「IJの計画に私情は禁物。

……では、拙者はこれにて。」

「……。」

(拙者もなかなか性格が悪くなってしまったものでIJやれぬな……。)

(私は……何も知らなかつたツスか……)

「保波ほなみ...」

また子は一気にお茶を飲み干し、店を出た。

To be continued . . .

第一訓 漫画は伏線があるから「」が面白い（後書き）

最後の「保波」というのは、人名です。
ちなみに前の小説と名前を変更しました。

また子ちゃんとその保波という人物にどのよつたな関係があるのかは
いづれまた分かってきます（^_^）

では、最後までお読み頂きありがとうございました！

第三訓 自分の勘は侮らない方がいい

「土方さん、無駄ですって。

んな血眼になつて探しても更に瞳孔開くだけですぜイー」

「開くかバカ！」

真選組屯所、資料保管室。

保管室、といつても、書類は棚に入りきらず山積みになつてゐる。

その中で沖田は行儀悪く足を机に投げ出して椅子に座つていた。

一方土方は何やら大量の書類が整理された本棚を調べてゐるらしい。

2人は先程屯所に帰つてきたところだった。

ガチャ…

「……あ、近藤さん」

扉が開き、入つて来たのは真選組局長・近藤勲だつた。

「ね、トシ、総括。

…トシはまだ昔の記録をあわしてんのか？」

「…可能性がある限りは探す」

「んなの他の隊士にやらせればいいもんをお前は…」
近藤はまつたくなあ、と小さく呟く。

「大の仲良しの田那の事ですからね。必死なんですか。」

「誰が仲良しだこの馬鹿！仲良しはてめーだろーが…！
俺は他の隊士に任せて見落としがあつたらいけねえから自分でやつ
てんだよー。」

土方は怒鳴りながら手は止めない。

「…もう少し人を信頼しやしょひぜ、あともう少し素直になら
べきでさア。」

沖田は、はあーと大袈裟にため息を吐き、椅子をぐるっと一回転させた。

「お前は一生黙つとけ」

沖田の馬鹿にしたような態度に、反論する気も失せたらしい。

「あ、そうだ、近藤さん、外で山崎を見なかつたか？」

「？…見なかつたぞ。」

「チツ、あいつ何のんびりしてやがる…。呼び出しつからもつー〇分は経つてゐるじゃねーか…」
土方はいつも以上に機嫌が悪いらしい。

「…あ、山崎なら外でミントンやつてましたぜ。」

パツと思いつたように沖田が言つた。

「だああああああつ…！
いつつもいつもアイツは何遊んでんだボケええ…！…！…！
総悟あ…！…今すぐ奴を連れて来い…！…！」

…もう何か爆発しちやつたらしい。

「はあ？…自分で行けよ土方つてか死ね土方」

「黙れ行つて」一〇〇田へりこならやりんでもないつてか死ね沖
田」

「死ね土方」

「死ね沖田」

こんな調子で喧嘩をしながらも、何だかんだ言つて沖田は出て行つた。

「ふー…。やつと3分の2つて所か。」

「悪いな、俺は資料だけ取り寄せて後はお前任せにして…」

近藤は土方が調べた後であろう書類の紙を何となく読み始めた。

「別にいいよ、あんたは高杉の件で忙しいからな。

…桂と万事屋の件は俺の仕事だ。」

「それにしても、まさかあの万事屋が桂と何か関係があるとはなあ…。」

「ああ。少なからず関係はある。

…俺と総悟は結構見てんだよ。桂を見つけた時、近くによく万事屋がいるのをな。」

「しかし、だからと言つて万事屋が攘夷志士だとは決め付けられんだろう？桂とも何かで知り合つただの友人とかかもしれないじゃないか。」

近藤も沖田と同じく、あまり銀時を攘夷と関係付けたくないらしい。

「それはどうだかな…。

近藤さん、少し前に起こつたあの高杉の事件、覚えてるか？」

近藤には、心なしか土方の目が光つてゐるよつに見えた。

「あ……あ……あの紅桜の事件か？」

「そうだ。その時あの鬼兵隊の船に万事屋のあの3人が乗つっていた事は情報からして間違いねえ。そしてその万事屋と一緒にいたのが桂だつたんだよ。」

「……。……それは間違いない情報なのか？」

「ああ。まず間違いねえ。山崎を中心としたウチの監察からの情報だ。」

「そうか……。」

「それに……万事屋がもし攘夷に関係あるのなら、かなりの確率で後期攘夷戦争に参加してるはずだ。」

だから俺はあんたに攘夷戦争に参加したと確認されている志士の名簿の中でも幹部のものを頼んだ。

万事屋の剣の腕なら少なからず幹部ではあるはずだからな。」

「……しかし……まだ万事屋の名前は見つけてないんだろう？」

「……いや、万事屋の名前自体は無かつたが……万事屋らしき人物の名はもう既に見つけた。」

「万事屋……ひしき？」

「ああ……。」

土方はニヤリと笑う。

「ビハニツ意味だよトシ……」

「まあ詳しい話は山崎が来てからだ。
とにかく……万事屋が桂に関係がある……仮に友人だとしたら、それは
万事屋が攘夷軍の幹部だったという可能性がグンと上がつてくる。
それは事実だ。」

「まあな……。桂も高杉も相当な剣豪だと聞く。
納得はできるが……」

ガチャ…

「一。」

「山崎連れて来ましたぜーイ」

「……ほほっしわけつありませ……ん……」

扉から入つて来たのは先ほど出て行つた沖田と、なんか山崎？
ぽいものだつた。

「ほいものってなんだよほいものって！－山崎だよ！正真正銘山崎
選です－」

「てめー…なにしてやがったんだ?あ?
呼び出してから15分以上経つてんだよ」「リ山崎」
土方の背後から黒いオーラが出ているように見えるのは気のせいだ
らうか。

「すみませんすみませんすみませんん！…
もう十分殴られたんですね…ボッ ハボ「なんですか…」
山崎は半泣きになつてゐる。

「土方さん、すいやせんでした。

…ハントンじゃなくてカバディだったんですね。」

「んなのどうでもいいわボケええええ！」

「まあまあいいじゃないか。とにかくザキが来たんだから…」

「チツ…まあいい山崎そこ座れ。」

「…はい…」

山崎はもひ尋問を受けるような気分だった。

「…お前も大体分かつてるとと思つが…、任務だ。」

「はあ…。旦那の事…ですか…。」

山崎は少し俯き加減に土方を見つめている。

「もう話は見えてるな?」

「ええ…。…旦那が攘夷や桂、高杉に関係あるか調べればいいんでしょう。」

「ああ…頼んだぞ。できるだけ早めにな。」

「…早めに…ですか…まあ極力頑張りますけど…。」

山崎は少し難しい顔をしている。

「…なんだ?」

「紅桜の時にも俺は調査しましたけど…。…旦那、自分の昔の事は全く他人に喋らないみたいですね。神楽ちゃんや新八くんでさえ分からないつて言つてましたしね。」

「つまり…田那の昔からの友人しか田那の過去は知らないってことかい？」

「そういう事です。」

「それは…いくら山崎でも難しいんじゃないのか?…トシ。」

3人は一斉に土方の方を見る。

「…いや…それがそうでもねえ。」

「…?」

「これを…見てくれ。」

そう言って土方が持り出してきたのは、深緑の色をした本。

「なんですかイ?…」りや」

「攘夷志士・行方不明者名簿…?」

「これは…中間管理職以上の名簿ですね。」

山崎は一番最初のページを捲り、確認した。

「…ああ。 その次の次のページを捲つてみる。」

「はい」

山崎は言われるままページを捲つた。

「このページが何か?」

「そこ」の右から3番目だ。」

3人はページを覗き込む。

「白夜叉…?」

3人共、どこかで聞いたことのある響きだと思った。

「お前らも聞いたことあるだろ。」

「まあ…何となくなり」

「…そいつだけ年齢も出身地も何もかも書かれてねえ。ただ書いてあるのは『白夜叉』という一つの名のみ。」

土方は『白夜叉』と書かれている所を指差した。

「…確かに、変だな…。」

「…俺はこの白夜叉が万事屋だと踏んでる。」「…土方が田が急にギラギラしてくる。

「？」

「どういう意味ですか？」

「お前ら、『武神四侍』つてのは聞いたことあるか？」

「ぶしんじじ……？」

「知らねえな」

「これは3人共知らなかつたらしい。」

「白夜叉つてのを調べた時に出て来たんだよ。何でも後期攘夷戦争における伝説の4人らしい。」

土方は机の上にできた書類の山から一枚紙を抜いた。

「伝説……ですかイ。そりやまた大層なこつて……」

沖田は態度こそ悪かつたが、話は真剣に聞いているようだ。

「強すぎる4人。……そう言われていたそうだ。」

そこで……こつからが問題なんだが、その4人の中の2人は……桂小太郎と高杉晋助なんだよ。」

「……か、桂と……高杉……？」
3人とも目を見開いている。

「ああ。 そしてもう一人が坂本辰馬って男だ。」

「坂本辰馬……？」

「貿易企業・快援隊の社長だ。」

「……快援隊……。」

「これにもかなり驚いたらしい。」

「あ……ちょっと待つて下さい！
まさか最後のあと一人つて……」

山崎がいきなり大きな声を上げる。

「ああ、そうだ。」

「……最後の一人が、その白夜叉。」

「……」

「白夜叉は死んだとも言われているが、そんなのは言ひ伝えに過ぎねえ。

生きてる可能性だって十分にあるんだ。

……些か出来すぎた話だと思わねえか？」

「……土方さんと俺は旦那と桂が一緒にいる所をよく旦撃してくる…
そして、あの旦那の剣の腕を考えりや攘夷軍の幹部になるべつて一
ヶねえだらうし……。」

「あの高杉の紅桜の事件、旦那の過去を知つてゐる人がほとんどいな
い……。」

「全部結べば白夜叉といつて男に行き着く。
……そうこういつとか。」

「その通りだ。」

「なあ…しかし…」

近藤がに声を上げた。

「なんだ?」

「白夜叉が万事屋つてのはまあ間違いなさそつだが、それはトシの推測と言つてしまえば終わりじやないか?」

「確かに、これは俺の推測でしかねえ。それにまだわからねえ事もたくさんあるし、具体的な事はまだ何も分かつちゃいねえよ。

……そこで、お前が出て来る訳だ。」

土方は山崎の方を見た。

「なるほど…俺が詳しく調べりやいいんですね。」

山崎は少し笑つた。

「これだけ情報があれば大丈夫だろつ。お前は白夜叉=万事屋つてのを決定付けてくれたらそれでいい。
まあ余裕がありや白夜叉と桂、高杉、坂本の関係性まで調べといてくれ。」

「了解。」

「…あ、ちょっと待って下せヒ土方さん。」

「なんだ?」

「…もし田那が白夜叉だつて判明したら田那はどうなるんディ?」

「…………。」

少しの間。そして、

「ショッピくのは間違いねえ。
現に奴は桂を囮りやがつた。」

「もちろん必要があれば斬るさ。」

「桂や高杉の情報をたっぷり聞き出してからな。」

「これが土方が『鬼の副長』と云われる所以だ。」

「ナニですかイ」

「…………。」

「山崎、お前は今日からでも調査を開始しろ。
もひ出てこいござ。」

「了解です。まあ出来るだけ急いでみます。
では。」

山崎は出て行った。

（俺達に出来るのか……？万事屋を斬るなんぞ……）
近藤としては、信じたくなかった。

(……。)

それからまた土方は資料を調べ始め、近藤と沖田も部屋から出て行った。

今回の一波乱は……でかすぎの氣がしてならないねえ……

……この胸のやわらきは氣のせいだと信じるしかなかった。

To be continued . . .

第二訓　自分の勘は悔らない方がいい（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございましたー。

第四訓 大事な話を聞きたい時は何気ない会話から入ろう（前書き）

この連載小説は一個一個の話が独立してゐるよつに見えますが、実は全部繋がつてます。

気長に繋がつていくのをお待ちいただければ幸いです。

今日は短いです。

前の小説には無かつたお話ですね。

銀さんと沖田くんのグダグダな会話（笑）。

第四訓 大事な話を聞きたい時は何気ない会話から入るつ

あの真選組の2人が桂を探しに万事屋に来た事件から数日。あの日から天気も回復することなく、雲は未だに黒く、暗いままだ。

（あーあ…疲れた…。やたらと遠いしふらと辰馬にはまち合わせるし…）

銀時は歌舞伎町の東にある川の側のベンチに腰掛けていた。彼は午前中出掛けしており、今はちょうど休憩中なのだ。

ドッゴーン…！

「…？」

いきなりの爆音。

（なにコレ）

アーティスト名

更に爆音は続く。

(え！？え！？マジ何これ、何！？)

!

「ぐおおおおつー！」

激しい足音がこちらに近づいてくる。

「ウソです…」

向こうから猛スピードで走つて来たのは桂だつた。

「あ！銀時！お前まだ家に帰つてないのか！…さつと新八君とリー
ダーがしんぱい…」

桂は全て言い終わる前に銀時の前を通り過ぎてしまった。

「何？」

「待ちやがれ桂ア……あ……」

「…………。」

「…………。」

「…………あれ? 追っかけなくていいの?」

「田那の顔見たらいざる気が萎えちまつました」

「俺は沖田くんの顔見てひ度が上がっちゃったよ、レベルアップだ

「ノヤロー」

桂を追いかけていたであろう沖田だ。

「そりゃ光榮でさア。

つてかもう追っかけんのしんどいこいや。サボっちゃえ~。」

沖田は棒読みでそう言って、銀時の隣に座った。

「残念ながら可變くないからね、子どもじりじとのカケラも無いから

ね

もつ何かグッダグダである。

「旦那、珍しいですねイ、こんな時間に1人で何やつてんですかイ？」

沖田は何の躊躇いもなく話をそらした。

「まあちよつとね。」

「どつかに出かけてたんで？」

「ん。まあそんなトコだね。ちょっと遠かつたから一休みしてるんだよ。」

銀時はふう、とため息を吐く。

「旦那1人でお出かけたアこれまた珍しいや。どこに行つてたんディ？」

何故か今日の沖田は執拗に色々聞いてくる。

「何だよ沖田君今日はやけにがつつくね」

銀時の頭の上にはクエスチョンマークが浮かんでいる。

「いや、何か旦那つて行動パターンがよく読めねえ人だなアと思いまして。」

「はあ？」

「まあ歎かぬに曰那つてよく考へると不思議な人だと思つたんでさア。

「桂ともむか友達みたいですしね。」

「こや……お、お友達つてこうか……」

銀時の額には心なしか汗が浮かんでいる。

「別にしあつぱいなんか思つてねえんだ」安心下せ

「ヤつと向とも氣に障る笑みだつた。

「……。」

（わざわざのせ）

完全に分かつて言つてゐるところがまた彼のドS度を表してゐる。

「……ドSでSに行かれてたんで？」

「師匠さんアだよ」

「師匠？…田那にそんなのがいたんですかイ？意外でぞア。」

「まあね」

「俺も師匠なんざ大層なもんはいねエですけど、密かに尊敬してる人はいますぜ。」

沖田は小さく笑う。

「あれだろ？「ゴリラ」だろ？「んでもさかのマコラー」だろ？」銀時は分かつてますよと言わんばかりに手をひらひら振った。

「んなのは当たり前ですか。」

「これは俺が密かに尊敬する人の話ですからねイ。誰にも話した事はねエんですがね、特別に旦那には教えますぜ。」

（否定しないのね）

「いや別に話さなくてもいい……」

「これかなり昔の話なんですがね……」

（おいしいい！……最後まで人の話聞けやボケエエエエ……！…）

いづして沖田の『昔話』、もとい尊敬する人の話は始まった。

To be continued . . .

第四訓 大事な話を聞きたい時は何気ない会話から入る（後書き）

最後までお読み下さりありがとうございました！

次回、沖田の密かに尊敬する人とは？

【改】第五訓 初めて自転車乗れた時の「こと」でもみんな大抵忘れてる（前書き）

総悟の過去話です。

オリキヤラ…つていう程大層なものではないですが、それらしきものが登場します。

【改】第五訓 初めて自転車乗れた時の「」でもみんな大抵忘れてる

（チツ…死ね土方…死ね土方死ね土方…）

江戸に比べればかなり田舎に分類されるであろう武州。

その中ではまだ栄えている町のちょうど真ん中で、最近10歳になつたばかりの沖田総悟が大股かつ早足でズカズカと歩いていた。

（あいつ俺より遅く入ったクセに近藤さんにベタベタ懐きやがつて…大体近藤さんも近藤さんだ…何であんなんに騙されやがんでイ…）
…じつやう十方と喧嘩した後らしい。

「あーあ…」
(面白くねH)

総悟は小さな団子屋の長椅子にじどサツと座った。

（お腹減った…けどお金持つてねHや）

総悟は土方がいる道場に戻る事もできず、ただボーッと外を眺めていた。

「……。」

（今日はヤケに人が多いじゃねーかイ）

「……ん？……どうした、そこのチビ助。」

「あ？」

いきなり後ろから話しかけてきたのは、団子屋の主人だった。

「金も無いのにんなとこ座つてんのか？」

主人は困ったように笑う。

「わりいか」

総悟はふてくされたようにぽいと顔を背けた。

「そこらの店じやわりいな。だがウチの店は特別だ。ほれ、食いなチビ助。

ただし、最初の一回限りだけだな。」

主人はニカツと氣前の良い笑みを浮かべながらみたらし団子を一本総悟に差し出した。

「…………。」

しかし総悟は顔を背けたまま動かない。

……ただ、目線だけは団子の方に向いているのに主人は気が付いた。

「いらぬーのか？俺が食つちまうぞ。」

そう言つて主人はゆっくりと団子を自分の口へ向かつて引き寄せた。

「食べるー！」

「あつはつはつ！食いな食いな！」

総悟がすごく不機嫌そうに、しかし恥ずかしそうに言つたので、主人も笑い出してしまつたらしい。

「フン！」

総悟はお礼どころか顔も合わせずに団子を受け取り、口いっぱいに頬張つた。

「チビ助、それ食い終わつたらとつとと家に戻んな。」

「？」

総悟は体を真つ直ぐ戻して、主人の顔を見た。

「ほれ、外見渡してみる。」

主人は外を指差した。

「……」

総悟は主人に言われるがまま、外を見渡す。

（武士…？）

辺りには陣羽織や戦用の袴を履いた剣士たちが歩いていたり、また草村に座り込んだりしていた。

しかし武士というほど立派なものではなく、ほとんどが一本差しであつたし、羽織も袴もボロボロで、破れていたり血がついているものだつてあつた。

「ありやあな、攘夷志士つちゅう野蛮な連中よ。

チビ助、今攘夷戦争つてのが各地で起こつてんのは知つてゐな？」

「ああ。近々武州の方にも来るつて姉上が言つてた」

（気を付ける…とも言つてたつけねイ）

「今ちょうび来やがつたんだよ。ここいらは天人が少ねえから戦は起こらねえだろうが…。

奴ら、気性が荒いのが多いらしいからな。気を付けるよ。」

主人は総悟の頭の上にポン、と手を乗せた。

「あんな輩俺が蹴散らしてやらア」

「はつはつはつ！その腰の木刀でか？
口が達者なチビ助だこつてえ。

さあもう団子は食つちまつたんだし、サッサと帰りな。」
主人は総悟の言葉を冗談半分に受け取つて、彼の背中をポンポンと
叩いた。

「フン、俺ア ヘタな大人よりよっぽど強エゼ。」

総悟は主人の対応が少し気に障つたようで、主人を軽く睨みつけた。

「そつか、そりやあすげえや。」

チャキ…

「？」

キラ、と、一瞬の光。

「俺達が…誰か分かるな？」

「一。」

「何ですかい？」二はただの団子屋だがね。」

いきなり主人に向けて刀を突き出してきた男と、その後ろには3人ほど、合わせて4人の同じような格好をした男が狼のような田でこちらを睨み付けてくる。

「俺達は攘夷志士だ。お國の為に奉仕している身。食料を頂いて。彼らは一々刀をちらつかせてくる。」

「いえ、しかしね、二は一般のお客様方に団子をお出しするところなんで……」

「つべこべ言つなか……！……俺達はお前ら愚民を守る為に命懸けで戦つてゐるのだぞ……！」

ものすごい剣幕で怒鳴るものだから、道行く人や団子屋の中にいる人々の視線が一点に集まつた。

「……悪いがね、あんた達にやる食いもんなんざこれっぽつちもねえよ。」

お国守るつゝてそのお國の民から食料巻き上げるよつた輩にやる食いもんなんざねえ……！」

主人も遂にキレてしまつたらしい。

「なつ！！」

攘夷志士達の血管の切れる音が総悟には聞こえた気がした。

「斬れ！斬つちまええ！！」

途端に全員が抜刀、そして既に抜刀していた1人が主人に向かって刀を振りかざした。

ドシユツ……！

「ぐあ……あ……」

ドサツ……

静まり返る店内。

「てめエラ…今すぐその刀（侍の魂）捨てやがれイー…！
丸腰のオヤジ一人に4人で斬りかかるたあ、相当腕に自信がねエと
みえるぜ…」

総悟の右手には、小さめの木刀が握りしめられていた。

「チ…チビ助…」

主人は目を見開いて総悟を見つめている。

床には総悟に打撃され、気を失った男が無惨に倒れていた。

「なつ…なんだこいつ！つづーか4人で斬りかかってねーよー…！」

「んなの知るかボケ！今度は…」

チャキ

「ひつ……」

「本^{マジ}氣で殺してほし^いいのかイ?」

総悟は、床で伸せている男から刀を奪い取った。

「チビ助やめりーーー」

(眼が……)

目が、子どもの目ではなくなっていた。

「…………。」

ジリ、ジリと、近づいていく。

(句でイ……Uの……変な氣分は……)

ただ怒りに任せて真剣を握りしめ、自分は人を斬ろうと…いや、殺そうとしているのか…。

変な高揚感のようなものが体中を駆け巡る。

「ぐつー！」

遂に総悟は剣を振りかざした。

ビュッ…！

ガキイイイイイン…！

「……………！」

（な…）

総悟の真剣は止まつた…というより止められた。

総悟はハツと自分の剣先を見た。
彼の真剣を止めているのは、やはり、真剣。

一点に集まるその視線。

「そんな太刀筋で…人間が殺せると思つたか小僧？」

「阿呆ですかお前は！お前も十分小僧です。」

「……」

（侍…）

侍。

何故そう思ったのかは分からぬ。
でも、侍だった。
2人の、若い侍。

「小僧じゃない大人だ。後一年で成人だぞ。俺が小僧ならお前も小僧だ。」

「何を言つんですか、私はもう成人になつてあるんですよ。」

「先日なつたばかりではないか。俺と一つ違つだけだらう。」

「お…お…」

3人の男の中の1人が、いきなり現れた2人に話しかける。

その2人も4人の男と同じような服装をしていたが、とにかく若い。会話内容からして髪の長く黒い方が19、軽い癖つ毛のクリーム色の方が20らしい。

「お、あまりにも情けなさ過ぎて忘れておりましたな。あなたのこと。」

癖つ毛の方の男は小さく後ろで束ねた髪を小さく揺らし、笑った。

「なに……」

「攘夷志士の……いや、侍……でもないな……人間の、いやもう生物の風上にも置けんな貴様ら。

今すぐその剣を捨て金も謝金として置いていけ。消えろ。」

「黙つてきいてりゃいい氣に……ぐあつ……！」

バタツ！バタ、ドサツ！

全て言い終わる前に3人の男は崩れ去った。

「峰打ちなんで大丈夫です。

私みたいな弱いのに峰打ち仕掛けられるようでおつてはいけません

な。
」

「てめエらも…攘夷志士なのかイ？」

「…」

2人の男が振り向いた先には、刀を構え直した総悟がいた。

「…………。」

主人を含め、彼らの取り巻き達はこの場のいきさつを黙つて見ているしかなかつた。

「てめエらが攘夷志士なら、斬るぜ！」

「待て…俺達は確かに攘夷志士…」

「…！」

瞬間、肉眼では見えないくらいの速さで総悟は髪の長い男に斬りかかる。

ガキイイイイイン！！！！！

「な……！」

（確かに今入ったはず…！）

総悟の刀は、髪の長い男の刀によつて受け止められた。

な。 跡跡が、今夜は一晩、うごめかへ聞かせにいた。

三才木丁
千之詔を量得
關才ノシ
國才
才才重才

「あんた…私より強いですな。…神童くん。」
辯つ毛の「女顔」汗を滲ませてーる。

癩二毛の方は額に汗を滲ませている

「あたりめえだ。

もちろんそのうえで長髪の方より強いゼイ」

「いや… それは無理では…」

ガキイン!!ガキツ!!ガキツ!!ガキツ!!ガキツ!!

!

田にでも畠まいぬ速さで撃ち込まれる剣戟。

しかし、総悟の剣はその長髪の男にかすりもしない。

（はやい……完全に太刀筋が読まれて……）

ドゴッ

「ガハアッ！」

総悟は簡単にふつ飛ばされた。

「だつ大丈夫ですかつ！？」

「ヅラ！お前子ども相手に大人気ないでしょうが！
とこづかいつも自分の強さを自覚しろと言つておるでしょ！」

「ヅラじゃない桂だ！
峰で軽く打つただけだ。

「これくらいでくたばるほどお前も柔じやなかろう、小僧。」

長髪の男はそう言つて刀を鞘にしました。

「ぐ……」

総悟は悔しそうに長髪の男を睨む。

「お前は確かに強い。
いや……その歳でその強さは異常だと云つてもいい。」

「……。」

総悟もそれは自負していた。
道場でも3番目に強かつた。

「だがな……だからといつて人の命を軽く見るな。

見たところ……お前には『才』がある。

ただの剣術の才ではないぞ。

お前の目を見ればわかる。

その才をどう生かすかはお前次第。

そしてそれを殺すかどうかもお前次第。

「

「……才って……なんでイ……」

「……自らの心を自由に殺せる才……だな。」

「心……?」

「後は自分で考える。
とにかく、お前に真剣はまだ早すぎる。」

長髪の男は総悟に近づき、総悟の持っていた剣を返すよう促し、総悟もそれに従つた。

「…………。」

「さてと、玄雅、お前も手伝え。」「ん？」

長髪の男は床に伸せている男4人の懐を探り出した。
癖つ毛の男もああなるほど、といつのようにそれに習つて探し出す。

二人は男達の懐から財布らしきものを取り出し、はい、と団子屋の主人に手渡した。

「い、いいよ兄ちゃん達…こんな…」

「いや、こいつらは俺達と同じ攘夷志士。こいつらの代わりに謝罪する。」

偉く迷惑を掛けてしまつて、本当に申し訳なかつた。

二人は礼儀正しくお辞儀した。

「まあまあ…しつかりした兄ちゃんなんだこいつてえ

「ヅーラー、へわか～ど！」なるんじやあーもつ飯の時間じやぞ
」

「お、もう行かねばなりませんな。」

「ああ。…では失礼する。」

そう言つて2人は外に出て行く。

「あ、そうだ、小僧。」

長髪の男が不意に立ち止まつた。

「……。」

「また、会えるといいな。

…まあ俺が生きていればの話だが。」

にっこりとその男は笑つた。

「生きとけよ。次はその「わらひえ髪」と斬つてやる。」

総悟が威勢良く叫ぶと、男はきょとんとした後、再び笑った。

そして2人は角を曲がり、遂に見えなくなつた。

「おに辰馬アアアー！…ジラじやない桂だと畜つていろだらうがアアアー！」

「辰馬アアー！…くわか～、じやないです！…くわか、だと何度言えばわかるのですか！…発音も違うんですよ！…！…何が臭いみたいではないですか！」

ギヤー、ギヤー騒いでいる声もやがては消えて、静かになつた。

（何でイありや…）

総悟は何か納得いかなかつたが、やつぱりもつ道場に戻らつと思つた。

(そんでも、稽古でもするか)

＊＊＊

(何でかねエ)

あの時の、あの男の言葉と笑顔だけは忘れられない。

(ナビ今ならゼッヒー奴には負けねえゼイ)

(曰那話の途中で寝てたが、ありやあ最後まで聞いてたな、うん。)

総悟は腰に差した剣をチャカチャカいわせながら、屯所に戻った。

To be continued . . .

【改】第五訓 初めて自転車乗れた時の「」でもみんな大抵忘れてる（後書き）

最後までお読みくださりありがとうございました。

オリキャラの元ネタはみなさんもうおわかりですよね

次回、山崎捜査網。（笑）

天才監察方・山崎退が色々調べて、舞い戻ってきます。

【改】第六訓 転校生ってなんか書きが良いけど、実際そんな良いもんじゃない

山崎が真選組に舞い戻つてきます。

私の書くザキと近藤さんはなんか原作と別人だ…
ごめんなさい、これが私の精一杯です…

つていうか攘夷中心小説なのにあんまりJÖY4の皆さんつてか高杉&坂本書いてない！（今更）

まで頑張つて連載します（笑）（^__^）

すみません、長くなりました……
それではどうぞ！

【改】第六訓 転校生ってなんか響きが良いけど、実際そんな良いもんじゃない

「『白べ姫高き夜叉』白夜叉。

『狂い舞つ華』狂乱の貴公子・桂小太郎。

『黒き獸』修羅・高杉晋助。

『伯仲の一神』龍虎・坂本辰馬。

……これが、彼ら、武神四侍の謳い文句です。」

「……で？」

（……で？……つて言われましてもね……）

「お前、中間報告でもしに来たのか？」

「まあそれはついでです。

… 一番は調べて欲しい事があつたんですよ。

電話でも良かつたんですが、結構報告も連件も長いんで…。」

山崎は先ほど、細心の注意を払い屯所まで戻つて来たといひだつた。

（良一なあ、副長室は広くて…。）

その広い副長室には土方と、沖田もいる。

「つかなんで土方がいんの？お前いらなくねー？もつなんか俺いるだけで良くなー？」

沖田は半田を開き、あぐらをかいて座つている。

「てめえが副長室にいる事がまづおかしいんだよー出てけー。」

「ほんとに仕事が楽しいのは始めてだよ。

… 何しろ旦那が白夜叉？

めちゃめちゃおもしれー や

表情が一転、真剣な面持ちで、声色まで変わる。

「まあ要するに、沖田なりの、山崎の話を聞きたいといつ思いの表現なのだろう。

「チツ、もういい、山崎、とりあえず分かつたことを教える。」

土方も別に沖田がいて困る事はない。
とにかく本題に入らせた。

（全くしうがない人達だよな…）

山崎は少し間を置いて、話し始めた。

「…へい。まず白夜叉って男の話ですが、若い攘夷志士の中では完全に伝説化されています。

死んだと思っている奴がほとんどでした。中には宗教みたいに崇拜してゐる奴までいましたよ。」

山崎は手元のメモをちらちら見ながら、まるでアナウンサーみたいにスラスラ喋る。

「しかし、攘夷戦争に参加した事があり、攘夷軍でも結構上の役職にいた年配者は白夜叉の生死はわからないうて言つた人がほとんどでしたから、生存してゐる可能性は十分にあると思います。」

「ほう…。」

「で、その白夜叉つて二つの事なんですが、どうやら攘夷戦争時、
その白夜叉は本名を名乗らなかつたらしいです。」

「本名を…名乗らなかつた?」

「ええ。彼が活躍するようになつて『白夜叉』と呼ばれるようにな
つてからは、本名を捨て、自らも『白夜叉』と名乗つたそうですよ。」

「

「捨てた…ねイ」

「それが何故かはわからねえのか」

「そこまでは流石に無理でしたが…、本名を知つてゐるであつて
人はわからました。」

山崎は似合わない不敵さで笑う。

「……。」

「本當か」

土方は少し驚く素振りを見せた。
一方の沖田は無表情を崩さない。

「まずは他の武神四侍である、桂小太郎、高杉晋助、坂本辰馬の三名。」

そして、後の二人は、久坂玄雅、入江八一。」

「久坂……入江……？」

土方は目を細めた。

武神四侍の他の3人が白夜叉の本名を知っているというのも意外だつたが、更に意外だつたのは、久坂玄雅、入江八一という新たなる人の男の存在。

「そうです。……その2人が問題なんですよ。」

「何故この二名が白夜叉の本名を知っていると思つた？」

「……ええ。実はその2人、桂と高杉と同じ私塾に行つていたらしいんですよ。」

「私塾……？」

「個人で経営してる、いわば学習塾みたいなもんだろイ？」

「ええ。でもそこは私塾つていうより寺子屋に近かつたみたいで、主に子どもがそこで学習してたみたいですよ。」

「つづーか…桂と高杉と…つてことは…」

「白夜叉と桂と高杉は幼少の頃からの幼なじみだそうです。」

۱۰۰

ここで始めて、沖田が驚く素振りを見せた。

「それは初耳だな……」

「ええ。つまり、その久坂と入江という男は白夜叉や桂や高杉の幼なじみだということです。」

山崎は目を光らせる。

「で、調べて欲しい」とつてのがそれか……。」

「ええ。久坂と入江といつ男が現在生存している可能性があるのか。
…お願いします。」

「いいだらう。すぐに調べやせる。

恐らく小一時間くらいはかかるが……」「するへん捜査に出るか、結果を待つか、だ。

「待ちます。その内に話しておきたい」ともあるんで。」

「そうか…。わかった。

「ちょっと待つて。今から空いてる6番隊に行つてくる」

やつて、土方は出て行つた。

（また長こ話しなきやならないな…。）

山崎は監察の大変さを噛み締めながら、副長が出て行つて少し緩ん

だ体を引き締めた。

To be continued . . .

【改】第六訓 転校生ってなんか響きが良いけど、実際そんな良いもんじゃない

最後までお読み頂き、ありがとうございました！

あと一話、真選組4人にお付き合い願います（^-^）

真選組のお話が終われば、もつもつそろ坂本さんが出てきます（笑）

第七訓 周りの人間関係はよく分かつとけ（前書き）

さて、前回に続き、真選組4人です。

因みに前回名前だけですが初めて登場した入江八一という人物は、元ネタ入江九一さんです。

久坂玄瑞さんと同じように、松下村塾で吉田松陰に教えをこいていた人。

そのまんま使わせていただきました（笑）

あと今回の小説に出て来る攘夷4人の年齢は私の捏造ですので、「ご注意ください」；

ではお楽しみ下さい！

第七訓 周りの人間関係はよく分かつとナ

土方が副長を出したその後、沖田と山崎はそれとなくへりひこでいた。

「ふー…。」口中が出てつくれて空氣がキレイになつたぜイ
沖田は大袈裟にため息を吐く。

「あははは…」

（ヒドい言いようだな…）

「あ、そうだ山崎、俺そのくさか玄雅つて知つてるぜイ多分」

「え…ええええ…！…？…、どうこう…とですか…！…あと、く
さかじやなくて久坂です！」

「なんか聞いたことあんだよなア…。
なんだつたつけ」

「つて覚えてないんですかアンタ！」

「でも絶対知つてるのは確かなんで！」

「でも沖田さんとの久坂つて男にとても接点があるとは思えませんがねえ…」

「お前ら何、ギャア、ギャア騒いでやがる。うるせーぞ。」

「よひ、総悟、ザキ。」

「…」

襖が開き、入つて来たのは土方と近藤だった。

「え… ハラハラ早かつたですね…。つていつか同僚までびいひしたんですか」

「俺が早かつたのはこつから出たらすぐそこに6番隊の隊士がいたからだ。

近藤さんはついでに連れてきた。

「土方はいつ吸い始めたのか、まだ長めのタバコをくわえながら言つた。

「俺もお前の話、一応聞いた方が良いだろ」と思つてな。お前の報告の内容も軽くトシから聞いたぞ。」

近藤は微笑した。

「そうですか。」

「じゃ、本題に入るか。」

土方と近藤が座布団の上に座つた。

「はい。

「で、その話しどきたい事つて言つのが、桂や高杉、坂本の3人の事についてです。」

「武神四侍の他の3人か……。
何か分かつたのか？」

「ええまあある程度は、ですけど。

この3人と白夜叉は至極仲が良かつたそうです。いつも一緒にいたらしく、周りは結構避けたりしていたみたいですよ。」

「避けた?...どう意味だ?」

「まあ単純に仲が良すぎるっていうのもありますけど、強すぎたんですね...まず全員が...。そして、特に白夜叉はその風貌から、味方からも夜叉そのもののように恐れられていたそうです。」

「味方から...ねイ」

「もしかしたら...それが理由じゃねえのか?」
近藤が手で顎をさすりながら言った。

「「「?」」」

「ザキ、お前言つてよな、白夜叉は名を捨てていたと。」

「ええ。」

「奴は周囲から避けられ恐れられたんだる。

だから武神四侍の他の3人以外には白夜叉と名乗つて心を開いたんじやないか?

...というか、閉ざすしかなかつたんじやないか?
まあこの理由だけかはわからんが...。」

「寂しい男でさ！」

何故かここで、沖田の頭の中には銀時が浮かんだ。

「まあ奴にはその桂や高杉、坂本がいたんだ。ただその3人に理解されていれば良かつたんじやねーか」

土方はタバコの煙を吐き出した。

「で、恐れられる原因の一つにもなったその風貌のことなんですが、もつ全身が真っ白だつたそうですよ。まるで、死に装束のようだつたらしいです。」

「死に装束…ねイ」

「まあその話に万事屋の風貌を当てはめたら確かに異様な感じはするな…」

土方はフツと笑った。

「確かに、あの白銀の頭に赤い目だ…。奴が死に装束みたいな真っ白い服装してたら白夜叉と呼びたくなるのも頷ける。」

近藤はなるほど、と小さく呟く。

「白夜叉の情報はこれ位ですね。

あと桂と高杉についてですが、最近怪しいのは高杉です。」

「高杉の件は二つでも調べてるだ。

…どうやら今は京にいるらしいな。」

近藤は高杉の事を担当しているため、高杉の事に関しては結構詳しがつた。

「しかし…動きがなきすぎて逆に怪しいんだよな…」

「ええ。桂一派の中でも専らの噂でしたよ。

高杉の様子がおかしい…と。

ただ、すごい情報を入手したんですが、何やら高杉は人を集めているみたいです。」

「人集め…？」

「しかし鬼兵隊と毒薬を合図させればかなりの数がいるはずじゃあ…」

「

「はい、それがよくわからないんですよね…。
でも人集めをしている訳ですから、またどこかに移動する可能性も
高いとは思います。」

「なるほど…。」

近藤は静かにため息を吐いた。

「それに…高杉はどうも桂が邪魔みたいですね。」

「？」

「あの桂の求心力と、攘夷党の規模のでかさには高杉も手を妬いてるみたいですよ。」

高杉は人集めをしてる訳ですから。」

「ほう。

幼なじみ同士で対立してるとか…」

土方はまたタバコの煙を吐いた。

「さあ後は坂本辰馬っていう人物なんですが…貿易企業の社長ってのは知つてますよね。」

「ああ。だが…そいつだけはどうも異質だな…」

「ええ。社長、ですからね……。」

確かに、武神四侍と貿易企業の社長、どちらにも結びつけられないと。

「大物だつてのは分かるが……。」

近藤ももやもやした感じが離れないうらしかった。

「つてか桂も高杉も26、7だろイ？」

坂本つてのはそんな若さで貿易企業の社長なんてやつてんのかイ？」

「坂本は28歳です。会社を立ち上げたのは21の時だつたそですよ。」

「ほー。お偉い実業家だつてH」

沖田はそこまで興味もなさうに答えた。

「あ、あと歳まで言つとくと桂は27、高杉26です。」
(田那27だから歳までぴったりなんだよな……)

「トシとおんなじ年頃か」

近藤が変なところに親近感を覚えたのか、土方を見て少し笑つた。

「フン……」

「…んでまあその坂本なんですが、攘夷戦争を戦い抜いてないんですよ。」

「何…？」

「戦い抜いてないって言つても、攘夷戦争が終わる結構、ギリギリまで戦つてたみたいですがね…。」

途中で坂本だけ戦争をやめて、それからすぐに貿易企業を立ち上げています。

その企業である快援隊もかなり調べたんですが、全く攘夷とは関係ない企業でした。」

「桂や高杉とはエラい違ひだな。」

今の坂本に攘夷の思想はねえつてことか…。」

それとも表立つてはそういうことになつてているか、だな。」

「…坂本に関してはそういう可能性は低いと思ひますよ。少しでも裏で何かやつてると結構アラが出るもんですし。」

「まあな。」

「まあ武神四侍に関してはそんなところですかね。」

「…まだ、久坂と入江のことは調べられてないですか…？」
土方に向かつて、恐る恐る聞いた。

「ああ…。まだ少しかかるかもしけねえな。
どうする? それくらいの結果報告なら電話ででもできるが」

「じゃ、電話でお願いします。

僕はもう行きます。あんまり長居も良くないんで。」

「そうか、わかった。

人が少なくなったのを見計りつてすぐ「」に行け。
近藤さん、総悟、俺達は解散して各自の仕事につく。
誰か何か言つ?」とは?」

「…………。」

「ねえな。

じゃあ解散だ。」

「ふー、やつとこのタバコ臭工部屋から解放されるぜ!」

「てめえは一生くんなボケ」

日々仕事に戻つて行き、山崎は再び外へ出掛けてしまった。

（最近ホント天氣悪いよな…）

ボツリボツリと降り出した雨に、足を早めた。

To be continued . . .

第七訓　周りの人間関係はよく分かってけ（後書き）

最後までお読み頂き、ありがとうございました！

次回は万事屋に戻ります。

待望の坂本さんはその次ぐりにて登場する予定です（笑）

第八訓 見ゆる所せむる所せむる、これ基本（前書き）

この異様な更新率の高さは、私が新型インフルエンザにかかったのですごく暇だからです（笑）

今回はフラッシュバックしてしまった桂わん。

それではどうぞお楽しみトセー。

第八訓 見ゆる所がわざる所がある、」これ基本

真選組でまさか銀時の事が問題になつてゐるとはござらず、万事屋銀ちゃんでは新ハと神楽が何やらワイワイ騒いでいた。

「ネ～新ハい～！暇ヨう！暇アルヨう～！」

神楽はソファに仰け反りかえり、腕と足を大きく開いている。

「もー…、神楽ちゃん、女の子がそんな格好しちゃダメだろ？」
まるでどこかのお母さんみたいに新ハが注意した。

「何で銀ちゃん帰つて来ないネ！
…あれか！朝帰りの不良息子アルか！
お母さんそんなの許しません！」

銀時が今朝買い物に行つてから、昼になつても帰つて来ないのだ。

「…お母さん？何でお母さん？
しかも朝帰りじゃないだろ普通に今朝買い物に出て行つて昼になつても帰つて来ないだけ…って普通ではないか」
何か色々ツッ込み、それから「ーん、と考えてみる。

「買い物に行つてもう3時間は経つてるアルー。小一時間どいじやないネ。」

「確かにおかしいよね…」

「もうあんな不良息子ほつとく三。

新八、定春あそぼ。」

「銀さんの心配してんじやなかつたの？ただ単に遊び相手の心配してたの？」

「あ、やつぱりいいや。私棚の奥に酢昆布隠してあつたの忘れてたネ！そつちのがいいアル」

酢昆布がヘソクリ状態の神楽である。

「え…何、僕と定春酢昆布以下なの？ねえそんのー？」

定春はクウーンと鳴いて、顔を搔いている。

「ほいじや取つてくるねー！」

神楽は素知らぬ顔でスキップしながら棚の方へ消えていった。

「全くしようがないなあ、銀さんも神楽ちゃんも…」
新八はハア、と溜め息を吐き、机に散乱したジャンプを纏めて床に
置いた。

「換気でもするか」

新ハは窓を順々に開けていく

「ふんばり……ちよど来るねー。」
やがて、櫻のむらの神樂の囃がこな。

すると、奥の方から神楽の声がした。

新八はゆつくりと神楽のいる棚の方へ歩く。

「どうしたの？・酢昆布取れた？」

新八が神楽の元へ行くと、
神楽が半泣きになりながらピヨンピヨン
とジャンプしていた。

「新ハイ 酢昆布があつ」

「おお

(背が届かないのか)

「うつ……うつ……絶対新ハよりデカくなつてやるネ……牛乳めっちゃ飲

んでやるアル。」「

新八はまたしおうがないなあ、と呟いて、棚の最上段を見上げる。

「い……いやちよつと待てよ……

そういえば神楽ちゃん……どうせひとつこんな高いうちにひりに酔昆布隠したの?」

「投げたアル。」「

「もう!後の事考えなよ!」

まつたぐ……」

「もうつづけ言わずに早く取るネ」

「はいはー」

新八はよつ、と背伸びをし、手を伸ばした。

「…………奥まで届かないんだけど……」

予想外に棚の奥は深かつたらしい。

「何いー?マジでか……」

神楽はカクンと首を垂れて、うなだれている。

「……いや！届くかも！指先に何か当たった！
ただ隣の大きい箱が邪魔だな……。
もう一緒に出しちゃおうか。
神楽ちゃん手伝って。」

「おうネ！」

神楽はさつきとは一転、新ハが出してきた大きな木箱を出した。

「……お、……取れた！取れたよほら」

「おう！私の酢昆布ネ！ありがとな新ハ！」
神楽はピヨンピヨン跳ねて喜んでいる。

「……よし、この箱直そうか。」

「……ん？……なあ新ハい、何か変な臭いしないアルか？」
突然神楽は顔をしかめた。

「変な臭い……？」

「ん……ああ……確かにするかも……」

「……これ、じゃないアルか？」

神楽が指差したのは、先ほど出した木箱だった。

「……これ、だね。」

確かににおいの発生源は「これらしい。

「ま、まさか！？」

「…？」

「！」の中に銀ちりやんがああああーー！」

「わあっ！ーーい、いきなり驚かすなよーー！」

つていうかどこの殺人事件だよーー！」

神楽がいきなり大きな声を出したので、驚いてしまつたらしー。

「よし、早速開けてみるネー！」

「ええ！？ダメだよ勝手に開けちやあ…」

それに異臭を放っている箱だ。

正直言つて絶対に開けたくない。

……だが、もう新八が言つた時には遅かつた。

「……な、何アルかこれ……」

その木箱に入つていたのは……

「布……？……いや……羽織かなあ？」

白っぽい羽織で、破けているところもある。
かなりボロボロで年季が入つているように見えた。

「趣味悪い羽織アルな……。白地に茶色い模様ネ……」

「……いや……まさかこれ……。

か、神楽ちゃん！ちょっと貸してそれ！」
何故だか新八の顔は青ざめていた。

彼は箱から羽織を取り出し、広げる。

真っ白い布に、無数の茶色い染み。

「…………模様じゃないアル……」

神楽の顔もみるみる内に青ざめていった。

「……血……」

「……！」の変なにおい。血だつたアルか……」

「血つて……時間が経つても臭うんだ……。」

その羽織に付いた血は、もう赤かつた面影もなく、黒々としておりおぞましく発色している。

「あ……新ハ、袴みたいなのもあるネ。」

羽織りの下には、着物や袴や籠手こて、胸甲きょうこうなどが綺麗にたたまれ、整理されて入っていた。

「……全部血が付いてるア……」

「しかも真つ白だ……。」

（まるで……死に装束みたいな……）

見てはいけないものを見てしまった気がして、2人の心の中に何か罪悪感のような嫌な感情が生まれていた。

「せつとこれ全部戦用の着物だよ。」

「こぐれ…」

「そんな暗い顔してどうしたのだ…？」

リーダー、新ハくん

すると桂が心配そうに2人の肩に手をそつと乗せた。

「…いや…この棚にあつた箱の中から着物が見つかって。
「血が…いっぱい付いてるね…。」

って、
え？

「うわああああああああああ——！」

「なななな何アルかあああ！！！誰アルかあ！！！長髪の亡靈つ！！！悪靈退散つ！！！悪靈退散アルううう！！！！！」

「ハツハツハツ、そんなに驚いてどうしたんだリーダー、新八くん。

L

「どうしたのはテメエの頭だヅラあ！！
ナレーションまで騙してんじゃねえ！！
つていうかシリアスな雰囲気ぶち壊してんじゃねえぞボケえええつ

11

神楽のキックとパンチが桂に炸裂した。

「ぶつ…ぐおほっ！…」

桂は見事に吹っ飛ぶ。

「どうから入つて来たんですかアンタ…！」
もう2人とも心臓バクバクである。

「窓が俺を迎えていたのでな！」

「迎えてねーよ！いや確かに今窓全開だけど…」
新八は換気なんかするんじゃなかつた、と激しく後悔した。

「本当に迎えてくれて助かつたぞ！真選組に追われていたのだ。」

（ナニコレ）とか…

桂が真選組に追われて、ここに逃げ込んで来たのは初めての事ではなかつた。

「で、何をしているのだ？」

「あ…いや…」

はっきり言つて、説明のしようがない。

「ん…？…それは…」

桂は新八の持っていた着物や、箱に気付いたらしき。

「…………」

桂はゾシッとその白い羽織を見つめている。

「桂ちゃん……？」

「…………せこやか…………」

「え」

「あ、いや……。……！ それをビームで見つけたんだ？」

「！」の棚の最上段ですけど……」

「そうか…。」

そう言って、彼は少し笑った。

「…ヅラ、何か知ってるアルか…？」

「ヅラじゃない、桂だ。

まだ、銀時は帰っていないよな、もちろん」

「え？」

何故そんなことを桂が知っているのか。

「…2人共氣付いているだろうが、それは銀時のだ。」

「！」

「…銀ちゃん、こんなの着てたアルか…？」

「…。」

新八も、薄々気付いていた。

「……攘夷戦争の時に着ていたものだ。」

「やつぱり……」

銀時が攘夷戦争に参加していた事は、何となく知っていた。

……だが、

「実感が、湧かなくて」

「？」

「銀さんが攘夷戦争に出てたって……一応分かつてたけど、あの銀さんが……そんな……想像できないじゃないですか。

白夜叉とか云われても……そんなのよく分からないし
新八は少し俯いていた。

「……銀時は確かに、戦に出ていた。……だが、別に銀時は天人を殺す為に戦に出たのではないぞ。

……護りたいものがあつたから、戦つたんだ。」

（……一番強かつた想いは……あるいは違つたのかもしれんが……）

「なあジラ、銀ちゃんつて……昔どんな事してたアルか？

……銀ちゃん私達の過去知ってるね。暗いどこも明るいどこも知ってる兀。

……でも私達銀ちゃんの昔の事何にも知らないアル。」

「……。」

神楽も新八も、ジツと桂を見つめている。

2人共想いは同じだつた。

「……まだ、早い」

「え……」

「まだ……君たちが知るには時期が早い。」

「ど、どういう意味ですか！」

新八が問うても、

「しかし、もうすぐ……その時が来てしまつやもしれん。」
桂は、答えない。

「……？」

(来て……しまう?)

「……じやあまたいつか、僕らは知つてもいいんですか?」
「……いやあまたいつか、僕らは知つてもいいんですか?」
「……いやあまたいつか、僕らは知つてもいいんですか?」

「ああ。きつとな。」

「……。」

神楽も新ハもいつもの元気さは微塵も見せないで、俯いている。

「まあそつ氣を落とすな。

」銀時は、ああ見えて色々考へてゐるんだ。

」アイツは……優しい男だ。

新ハくんもリーダーも知つてゐるだろう?

「…奴を信じてやつてくれ。」

桂の声色はいつもより優しい感じがした。

「…言われなくても、銀ちゃんは銀ちゃんね。私天人だけど銀ちゃんのこと大好きヨ。」

神楽は膨れつ面をしている。

「そうこうことです。」

新八はそう言って、優しく笑った。

桂は少しキヨトンとしてから、

「…そうか」

とだけ言つた。

「もつすぐ銀時が帰つてくるだらうし、もつねりそり俺は行くとしよう。」

そう言つなり、桂は玄関に向かつて歩き出した。

「桂さん、…何か…今日はありがとうございました。」

新八は玄関で草履を履く桂に、何気なく礼を言つ。

「ん? 何のことだ?」

やつぱり天然な人だなあ、と新八は思った。

「いや…まあ、ね。」

大ざつぱにはぐらかし、ハハハ、と笑う。

「ヅラあ、もう侵入すんじゃねえゾ。

そんで次来る時は酢昆布買つてくるネ。」

「ああ、分かった。…また来させてもらおう。
今日は来てみて良かつた。

…銀時がいないのを2人共心配しているんじやないかと思つていた
のだ。」

「え…」

「では失礼するが。銀時によろしくな。」

「おうネー。」

そうして桂は出て行つた。

(“ 来てみて良かつた” … ?
… “ 銀時がいないのを ” … ?)

「うーん…

「どうしたアルか、新八?」

「いや… 何でも…」

何かすゞくモヤモヤしたが、あれこれ思つていても仕方ないと直し、新八はリビングに向かつた。

* * *

（お前は幸せ者だな……。あんなにお前を思ってくれる家族がいて……。）

わざわざも会つた幼なじみを羨みながら、桂は歩いていった。

To be continued . . .

第八訓 見ゆる所せむる所かぞる、これ基本（後書き）

最後までお読み頂き、ありがとうございました！

また次回会いましょう* + (^ ^ m ^)

第九訓 噂されてたらくしゃみが出るとか現実にはありえないよね（前書き）

坂本＆陸奥ついに登場です！

初登場でこのドシリアスはなんだつて感じなんですが、そこは曇坂仕様です（笑）

ちなみに私の短編小説、『至純にして散る』と、かなりリンクさせています。

『至純にして散る』を読んでいなくても全然話はわかりますが、読んでからの方が面白いかもしれません。

ではどうぞ！

第九訓 噛されてたらくしゃみが出るとか現実にはありえないよね

風が、吹いている。

（生温い…気持ちの良い風ではないの？…）

救援隊の船は、物の買い取りに向かうため、地球を出ようと空を飛んでいた。

その船の端に、陸奥は立っている。
そこはただ風の音しかしなかった。

「陸奥、いじげなところで何しちょる」

突然、後ろから聞こえた聞き慣れた声。
無論、坂本辰馬である。

「風に当たつとるんじや」

「いじげな風に当たつても気持ち良くもなかろう？」

「まあ。生温くへ、氣持の良こ風ではない。」

「…？」

「向となくな、じつに風に吹かれたいと想ひ氣分の時もあるんじ
や。」

「…あ…あ…なるや、あん時に似とるか…！」

「？」

「わしらが再会したあの口じゅや。やつ

（あ…。やうこいつとか…）

「そんな世のひと見えとらんわ。わ

」

「アッハッハ！

わしはせつかり覚えとるや。

この空色もやつくりや。

思つ出してしまつわのー。

今では懐かしご想に出てじやな。」

（懐かしい思い出…か。

…フン、丸々嘘じやな。）

陸奥は、はあ、とため息を吐き、頭を伏せた。

「…とこうど頭はさつあざこへ行つとつたんじや？

いつもみたいに風俗店に行つた様子でもなかつたき。」

いつものように彼がキャバクラに行つていれば、夜になるまで帰つてこないし、泥酔して帰つて来るはずだ。

「風俗店でのつておつよつやんのとこじや。

まあ確かに今日は違つがの。アッハッハ！」

「で、結婚式へ行つとつたんじや？」

「おんじこも一度話したことがあつたかのー？」

吉田松陽つちゅうう偉い先生のとこに行つとつたんじや。詳しく述べば… その松陽先生のお墓じやな。今日が命日じやね。」

「吉田松陽…ひめつのは確か…」

「おひ。金時とジワと高杉のお葬式をさせよ。」

「あの先生に頭はお世話をなつたんか？」

「わざわざお墓参りをする位だ。」

生前、何かお世話になつたんだろうと想つたのだ。

「いんぢや。お世話じいのか顔すら知らん。」

「え…。じやあ何故…」

予想外の答えに、いつも無表情な陸奥が少し驚くよつた表情をする。

「陸奥、おんし、攘夷戦争が終わつた時のこと覚えちよるか?」
びつしてか坂本の声色が妙に大人っぽく聞こえた。

「…ああ、覚えちよるが…」

「あの晩にな、その松陽先生がわしの夢に出てきたんぢや。」

「あ…懶…」

「ああ。夢ぜよ。

わしゃあ一度見た夢なんてこつもすぐ忘れてしまつたんぢやが、何
故かその夢だけははつきり覚えとる。」

坂本は空を見上げた。

「どな夢じや?」

「こきなり自ら吉田松陽つちゅつと乗る男の声がしての、わしに銀
時と小太郎と晋助をお願いします一つちゅつて消えおつたんぢや。
まつこと面白い男じやろ?アッハッハ!」

「ほり。」

その理由だけで墓参りする坂本の方がよっぽど面白が、と喜こやつになつたが、寸前のところで呑み込んだ。

「高杉にはその話はしとらんが、わつと金時とジリジリ話したら笑われてしもうたわ。

酷いとは思わんねー?」

出てきたのは松陽先生のほりじやとこいり…」

坂本は頭をポリポリと搔いた。

「当たり前じや。

そげな話すれば誰でも笑つ。」

「笑わんのはおまんくらこじやな。」

「わしは元々笑うのが苦手な性格じやせ。」

「アッハッハー! そうじやつたな。

ほんにおまんはまつこと昔から変わらんのい。」

「おまんに言われたくないわ。

頭が武神四侍と恐れられていたなど全く想像もつかんき。」

陸奥は珍しく少し笑つたが、またすぐにいつもの無表情に変わつてしまつ。

「アッハッハ! 最近剣を握つとらんからの。きっと腕が鈍つとるわ。」

何となくずれている坂本の返事に、陸奥は少し遠い田をした。

（やはり変わってしまったかの…。）

…しかしあは、今の頭の方が好きじゃや…」そのまま頭は変わらん
でええ。

あの事も…忘れるべきなんじや…。）

「…わしはそろそろ指令室に戻る。頭はどうする?..」

「わしも今この風に吹かれたい気分になつたき、もう少しここに
ゐるぜよ。」

「…そうか、なら伝えておく。」

陸奥は船内に消えていった。

（ああやつて風に吹かれて…今でもあの人達の事を想つとるんじや
るうな…。）

…しかし、今となつてはもう遅い…。）

坂本と陸奥の、『あの日』。

この2人の心に深く刻み付いた時間が知れることになるのは、また
先の話。

To
be
con-
tin-
ued
.

第十訓 札を偶然拾うような奴に悪い奴はいない神様がそう決めてんだよ

（久坂玄雅、入江八一共に行方不明者リスト…。

でも所属部隊や状況を考えると、生存率的には入江の方がかなり高いかな。

久坂の方は所属部隊から考えて絶望的だらう…。）

頭の中であつたときの電話の内容を整理し、いつものように頭の中に刻み付けて記憶した。

紙に書いては万が一落としてしまうといけないため、念には念を、絶対に紙に書かないようにしているのだ。

「まあははやつぱり、入江八一さん探しだな。
もちろん生存率の高い方からだ。」

（さて…どうするべきだ…？）

今一番知りたいことと言えば、入江八一が生きているのか、そうでないのか。

一番情報が手に入りそうなのは桂のいる攘夷党か、もしくは高杉のいる鬼兵隊、後は年配者が多い穩健派攘夷集団・蔓紳党だらう。

（八一は消去法で蔓神党だな。情報は…或いは攘夷党や鬼兵隊の方が多いかもしけないけど…）

最近高杉の様子がおかしい為桂一派は警戒を強めているし、何より鬼兵隊は分からないことも多く、移動手段も船で潜入しにくく、か

なりの過激派であるので危険だ。

「蔓神党の拠点調べなきやな…」

攘夷集団の拠点を調べるのはなかなか至難の業だ。

「ふえっくしつ…！」

（「う…。絶対風邪引いちまつたよ…」）

さつきの通り雨に打たれ、着物はしつとしと濡れてい。田が出て
いる訳でもなく、北風まで吹き始めている為、かなり寒い。

山崎は鼻をズーズーいわせながら、情報を集めるべく歩き出した。

それから数時間後。

日もかなり傾いて、もう薄暗くなつてきていた。

（もう大体拠点の位置は掴んだ。後は具体的な場所を調べなきゃな
……。）

また他の攘夷志士を当たつてみよう。

まあでも拠点が掴めても潜入は明日だな。
もう日も落ちるしちゃ）

「ぶえっくしつ……ぶえっくしつ……！」

（ヤバい……。本格的だよこの風邪……）

日が傾いてきたせいもあってか、寒気がせつせつよりも少し強くなつた気がした。

「とにかく情報集まつたし歌舞伎町を出よつ……。」

山崎は少し足を早めた。

ぐわん

（え）

「う…」

(や…ヤバい)

視界が、一瞬頭痛と共に歪んだ。

(熱あるかも…)

「ホ…ホテルに泊まらう…」

山崎は辺りを見回した。

…しかし、都合良くてすぐそこにホテルなんて有るわけがないのだ。
…というか…いつも時は逆に悪いことが更に起こつたりするものである。

…山崎の場合も、例外ではなかつた。

(え…つてええええええええ…!…)

「うーうー…曰那の家じやん！」

彼は情報を集める内に、いつの間にか万事屋の前まで来ていたらしい。

（駄目だあああああー！…ここで倒れたら絶対駄目だ…監察として最低じゃん！…）仕事中にターゲットに会ってしまうなど言語道断である。

（とにかく蔓神党の方に向かおう…。）から離れよう！…）

山崎は重い体を奮い立たせ、走り出した。

「うふ……はあ……はあ……ちよ……これ……はあ、はあ……マジで……ヤバくね
？……はあ……はあ……はあ……」

歌舞伎町からかなり離れた。
もつ戸の端まで来ている。

山崎は顔を真っ赤にして歩いていた。

（歌舞伎町辺りに比べたら結構田舎だな……）
まずホテルが無い。
宿屋もあるかどうか疑問だ。

「もつ……病院に行ひつ……」

もつ限界だった。

（つてこうか……病院……？……）

「……やつぱ……もつ……無理……」

バタツ

それから彼が起きてくる事はなかつたといつ。

To be continued . . .

いやいやいやいや！！

なにが『To be continued . . .』だよ！！

俺死んでないからね！？

確かに倒れたけど死んでないから！！

戻つてくるから！

じゃ、のが本物ですから！

To be continued . . .

第十訓 札を偶然拾つような奴に悪い奴はいない神様がそう決めてんだよ（後書き）

オールシリアルスじゃあ銀魂じゃないですよね（笑）
私ギャグがなかなか書けない体質なので、一回攘夷4人でギャグ話を書いてみたいな（^ ^）
すぐくたのしそうですよね

ではまた次回お会いしましょう* +

第十一訓 漫画とかでやたらとキャラが出て来る多ひつなったらそれはせつと

最初にすみません、

かなり短いです。

そして短いのに一部構成です。

今回はなんと、まさかの新たに4人キャラが登場です！

キャラ多すぎてごめんなさい；；

もうそろそろ話が大きく動き始めると感じます。

「なーんでお前と鉢合せするかねえ…。

鉢合せするんならもつと良い女が良かつたぜ。」

「ありがとうあなたに悪い女って言われるのは最上の褒め言葉よブスツ娘クラブの常連さん。でも褒め言葉なんてなんの刺激もないわ。増してやあなたに言われてもなんとも嬉しくないんだけど?」

歌舞伎町にある、ある茶屋。

「はいはいそりや悪かつたね…。

…つていうか…お前もやつぱり任務か?」

「も…つてことはあなたも任務なのね。」

外の座椅子には服部全蔵と猿飛あやめが座つていた。

「最近忍が極端に動いてるな…」

「しかも雇い先は攘夷志士からばっかりだし…。
任務先は幕府ばかり…」

「「何がが…起じる…」」

「「あ」」

「なあに私とハモってんの！？」

私とハモつていいのは銀さんだけよ！…！」

「それはこいつちのセリフだボケえ」

「何ですって！あなたにそんな趣味があるとは知らなかつたわ！…！」
銀さんは渡さないんだからああ…！！…！」

「違うだろ！意味履き違えるにも程があるだろ…！」
忍にあるまじき大声である。

「ハア…ハア…ハア…、フン、もういいわ。
とにかく何が起ころうと銀さんは私が守るもの。
私達の愛は永遠だわ！」

「何でもいいが、好きにしや。
俺は雇われなきゃ何もしねーけど。」

「別にあなたの事なんか知らないわ。
もう私は任務に行かなきゃならないの。」

まあ精々くたばらなこよつに頑張ることじね。」

「フン、良く言ひせ」。

そりやお互い様だら一がよ

「「やとうひなう」「ひ」

…ふと気が付くとその茶屋に2人の姿はなかつた。

ただ、置いてあつたのはこの店のお茶代分の小銭だけ。

「団長へ。やつを吉原に連絡しといたぜ。」

「ふーん。ありがと阿伏兎。

これでまあいいかな。」

（百華には天人何人かいるみたいだし…
日輪も月詠も無茶しちゃいそまだからなあ。
一度高杉としてみたいしね、殺し合い）

春雨の船。

さつちやんと全藏が茶屋にいる頃、神威と阿伏兎はその船の第七師
団長室にいた。

「しつかし元老は高杉の言いなりだねえ。
高杉はどう思つてんだか」

「高杉もわかつてゐるでしょ。
…ある程度はね」

「やつややつだらうが…

団長はどうするんだ？…計画が始まつたら。」

「弱い奴に用はない。

…ただ、強い奴を殺すだけや。」

そう言つて、いつもの優しい笑みを浮かべる。

（妹をどうすんのかが見どころかね）
阿伏兎はわしゃわしゃと頭を搔いた。

「阿伏兎は？」

「ん？」

「阿伏兎はどうすんの？」

「…俺は…」

（やつや）

「団長に従つだけぞ」

「…………も、好きにすれば良いにさびね」

「ははっ…それを言わると困つまつ。ま、いけ」

（俺のやうじとま、観戦かねえ…）

銀色の侍と、最強種族・夜鬼に生まれるべくして生まれたこの男。

近い未来、彼らがその剣と傘を交える口は来るのだろうか。

To be continued . . .

第十一訓 漫画とかでやたらとキャラが出て来る多ひつなつたらそれほせつと

最後までお読みいただきありがとうございました！
評価や感想などいただけすると嬉しいです。

次回はまたまた山崎です（笑）
大きく物語が動き出します！

第十一訓 ベタな展開は面白こからベタになつたんでありますか? これがもたま

倒れた山崎はどうなつたんでしょう? ...?

第十一訓 ベタな展開は面白にからべたになつたんであります。」

「う……」

頭が、痛い。

「むし……」

(……?)

「……もし、お若い御子。」

「……。」

山崎はゆつくりと目を開けた。

意識が、徐々にはつきりしてくる。

「お…、田を覚ましたよつですか。」

(ベリーダーリー) つてか…誰…?)

「あ…あのー…」

「ああ、まだ安静にしておつた方がいいですよ。熱があるよつですか。」

男は優しい声色で言つた。

見た目からすると、20代後半くらいだらうか。

「はい、水ですよ。自分で飲めますか?」

男は側のテーブルに置いてあつた一杯の水を山崎に差し出した。

「あ、はい…。すみません…。」

「あなた、道で倒れておつたそつですね。
ここにこらで住んでおられる方が運んで来て下せつたのですよ。」
その男は一ソリと笑つ。

「すみません本当に…。

……」「は病院ですか…？」

「ええ。ただの小さな町病院ですがね。私は医院長です。今日は休診日ですから、ゆっくりしておつて下わこね。」

「あつがどひーじゃこます…。
あの…俺は出崎退とーーます。」

「どひー。

……なり、あなたは真選組の監察さんで?..」

一瞬の思考停止。

「は…?」

（何で知つて…）

「これ、一緒に落としておりましたよ。」

その男が手に持つていたのは、山崎の携帯だった。

「え」

「さつき着信がありました。

ご家族の方かなと思い、発信先だけ見せて頂いたんですよ。

それが土方と表示されておつたんですね。」

男はまた二コリと笑つた。

「よく分かりましたね…。それだけで。」

（なんだこの人…？）

「いやいや、昔は私も攘夷志士だったのですから。」

「はあ……」

（よく真選組の隊士の前でそんなことが言えるな……）
ただ、変わった人だなと思った。

「あなた、ここいらに密偵にでも来られたんですか？
蔓神党が近くにありますからな。」

「…」

「いや、本当に私は今はただの町医者ですから…。」

山崎に少し睨まれても、男はその笑顔を崩さず手をひらひらと振つた。

（ただの…町医者?）

「じゃあ何故…俺が監察だつてわかつたんですか？」

山崎は更に鋭い眼光で男を見つめた。

「いえ……今は全く関わりが有りませんが、私には友人にたくさん攘夷軍の幹部がおりまして。」

「……。」

「私も幹部と同じような扱いを受けておったので、攘夷戦争が終わつてから一年位はそういう幕府側の情報が入つて來たんですよ。だから隊長・監察クラスの名前くらいは分かります。」

男はやはり笑顔を崩すことはない。

「… そ う な ん で す か。」

（まあ記憶力の良い…）

「 蔓神党に密偵といつことばはきつと昔の情報を集めておるんでしょ
う？」

「ええ…まあ。」

（絶対頭良いよな…）の人。）

「じゃあやはり攘夷戦争のこととか?
理由は知りませんが…」

男はお構いなしに山崎に話しかける。

「……まあ……そうですね……」

（つていうか……）

（この人攘夷軍の幹部と友達なんだよな……？）

何か、重要な情報が聞き出せるかもしれない。

（……でも……この人には俺が真選組の監察つて事がバレてる……。）
聞き出せる情報が重要だとしても、聞き出すこと自体のリスクが大きい。

（しかし……ここでのこのこ帰る訳には絶対いかない……！）

（ここはとりあえず有名な武神四侍の名を出すのは避けよう。）

山崎は決心して、小さく溜め息を吐いた。

「あの、もし俺があなたから情報を聞き出そうとしたら……あなたは話してくれますか？」

「……」

「お察しの通り今俺は攘夷戦争時代のことについて情報を集めています。

だから、幹部の友人であつたあなたから情報がほしいんです。」

山崎はまっすぐに男を見つめる。

「それは……その話の内容にもありますな。」
「この時初めて、男が無表情になつた。

「そつですか……。

でも、とりあえず質問はさせてもらつます。」

「ええ。」

「攘夷軍にいた……入江ハ一と久坂玄雅といつ男を」存じですか？」

「…………。」

「……？」

男は答えなかつた。

……といつよりは……答えられない感じだつた。

男はただ口をポカンと開けて山崎を見ている。

「あの……どうしたんですか？」

「…久坂とは…私…ですが…」

「え…？」

「…私の名は、久坂玄雅。
この病院は…久坂医院です…。」
「

「え、え、えええええ！……！」

山崎の絶叫が病院に響き渡つた。

To be continued . . .

【改】第一三訓 第一印象でその人の性格を決め付けるもんじゃない（前書き）

A HAPPY NEW YEAR!

2010年、これからも疊坂陽向と共に、この『銀魂 撮夷篇』をよろしくお願いします！

最近タイトル考えるのが最近めんどくさくなつてきました。でもやつと物語が動き出しつてワクワクします（笑）

【改】第一二訓 第一印象でその人の性格を決め付けるもんじゃない

「…あなたが…久坂玄雅…？」

「…そり…ですが…。何故私なんかを…」

久坂は本当に驚いてじるりしく、目を見開き、口をポカンと開けている。

(些か、偶然が過ぎるな…。

よっぽど田頃の行いが良いのか…それともこれからよっぽど悪いことか起るのか…。)

「…すみません…なんか…いきなりすきてね…」

「…?」

(「これはもう全て正直に話すしかないよな

「もつ…全部話します…俺の、密偵内容についで。」

山崎は久坂の田を真つ直ぐに見た。

「はあ…。」

久坂はやはり戸惑いの表情を浮かべている。彼が困惑するのも無理はないだろう。

そして山崎は話し始めた。

武神四侍のこと、久坂と入江のこと。
白夜叉の存在について。

「その、武神四侍や白夜叉とやらの調査で密偵を？」

久坂は複雑そうな表情で山崎を見た。

「ええ。」

山崎は罰が悪そうに少し俯く。

「なるほど。まあ、何というか、真選組の監察は優秀ですね。私の名を割り出すとは」

久坂はあまり感情の読めない無表情をしていた。

「い、いや…。」

（監察対象に正体バレた時点で監察失格なんんですけどおおお…副
長に殺される…！…）

「私は、何も知りませんよ」

「…は？」

急に久坂が少し鋭い目をして言ったものだから、山崎は驚いた。

「…というか、知つても言ひません」

久坂が言つてゐるのは、きっと白夜叉のことだらう。

「……。」

（最悪だ）

山崎としては、非常にまずい。

一番話を聞きたかった人物に正体がバレた上に、情報提供も拒絶されてしまった（当たり前だが）。

しかし！

何としてでも話を聞き出さねばならない。

目の前に探していた久坂玄雅がいるのだ。バレてしまった今、逆に考えれば情報を大量に聞き出すチャンスなのである。

ここでノコノコと帰ることなど何があつてもできない。

（わて、どうじよつ）

山崎は頭をぐるぐると回転をせる。

（もう、バレちまつたんだから、大胆に行くつきやないよな。搖さぶるしかない）

「久坂さん。あなた、坂田銀時つて…知つてますか…？」

山崎は賭けに出た。

「……ですから、私は何も言ひませんと言つておるでしょ？」

久坂は少し押し黙つた後、困つたようにそう呟いた。

（「Jの可笑しな間は……」Jの人、絶対“坂田銀時”に反応した！）
山崎はその事実に素直に喜べないが、監察としてなかなか上手くい
つているはずだ。

「……。」

久坂は遠くを見つめて、押し黙っている。

（「Jの人は…今何を思つてるんだ…？）

山崎は考えに考え抜いた。

残念ながら久坂の頭の中を一瞬で見透かせるような勘は持ち合わせ
ていないのだ。それならば、考えるしかない。

（J那が白夜叉だと仮定して…、桂と高杉はJ那の幼なじみ。つまりJ那と久坂さんは幼なじみなんだよな。白夜叉＝攘夷志士、真選組は攘夷志士の敵…）

山崎はJく簡単に結論に辿り着く。

（普通に考えれば、J那を庇つてるんだよな…。なら、真選組はJ
那の敵じゃないって事をわかつてもらえば…）

敵、…では決して無いはずだと山崎は自分に言い聞かせた。

「久坂さん。実は、僕ら真選組はJ那と…いや坂田銀時と、何て言
うか、知り合いなんですよ」

山崎は慎重に言葉を選んだ。

「……？」

久坂はやはり、困ったような、焦つているような表情をしてくる。

「坂田銀時は、……」

山崎が喋りだしたその時。

「その……坂田銀時という男が白夜叉の本物のやだと思つておられるのですか？」

「……」

久坂がいきなり話しあつた。

(「の人は……やつぱり）

「……まあ、真選組としてはそういう思つていてますか？」

山崎は“としては”を強調して言つた。

「真選組……としては？」

「ええ。

「坂田銀時は……いや、旦那は……なんていうか、腐れ縁といつかね……。友だちなんていうとかなり照れちゃいますけど……」

「……友だち……？」

あなたが、ですか？」

「いや、俺だけじゃないですよ。

副長の土方さんなんかいつも旦那と子どもみたいに喧嘩してゐるような仲だし、沖田さんだって相当旦那のこと慕つてゐるし、局長の近藤さんも旦那のことかなり高くかつてますし。

他のみんなも、俺みたいに『旦那』って呼んで慕つてます。」

「……なのに、その彼を白夜叉だと疑つておるのですか？」

白夜叉は真選組にとつては完全に敵でしょう？」

久坂は先ほどから少し眉をしかめている。

「ええ。

だから……みんな口には出さないけど、絶対、旦那が白夜叉であつてほしくないって願つてます。

旦那とは助け合つたこともありましたからね。

それに旦那には血も繋がつてはいないけど……家族がいますし。」

「……では、もしその彼が本当に白夜叉だったとしたらあなた方はどうするおつもりで？」

「……はつきり言って俺も分かりません。
多分、真選組の誰も分かつてないでしよう。

「……ただ、旦那をしょっぴいて高杉の過激な行動や桂の大人数による
攘夷を止めさせることが少しでもできるなら、俺たち真選組は迷わ
ず旦那をしょっぴきますよ。」

（これは……俺たちの本当の気持ちだ……。）

坂田銀時は、自分達にとって紛れもなく大切な存在であるのだ。

「…………う…………」

「え？」

「す……すみま……せん……つ……！」

「いけませんね……やはり私は、いつまでも半人前だ……」

久坂は、泣いていた。

「……。」

山崎は、この時言葉といつ言葉が出てこなかった。ただ驚いた。

「本当は……もっとあなたを疑わなければならぬのに……我慢は、できませんね。私は……銀時が、生きて……おると、銀時が……幸せに……、暮らしておると……聞いただけで……」

久坂は胸がいっぱいなのと嗚咽で途切れ途切れに話す。

「……久坂さん……」

山崎はそんな久坂を見て思わず田頭が熱くなってしまった。

「あなたの田は……本物でした。ですから、私はあなたを信じましょ
う」

そう言つて久坂は涙を拭き、再び山崎に鋭い目を向ける。

「銀時を、悪いようにしないのなら、情報を差し上げても良いでしょう。間違つても幕府に引き渡すような真似はしないと、誓えますか？」

久坂は山崎をまっすぐ見た。

確かに、白夜叉と知れた銀時を幕府へ引き渡せば死罪にもなる可能性は十分にある。

「はい。必ず。必ず旦那を悪いようにはしません。させません」
(土方副長はあんな風に言つけど……の人ほど素直じゃない人はいないんだから。近藤局長も、沖田隊長も、真選組はみんな、旦那を罪人になんてしない)

山崎には確信があつた。何よりも信じられる仲間だから、久坂の頼みにも即答できた。

「……あなたは、随分素直な方でおられますね。……お話ししましょう。あなたが全て話したように、私も全て。

……武神四侍の事も、白夜叉……いや、銀時の事も。」

久坂は穏やかに微笑んだ。

「……ありがとうございます。」

山崎は胸が熱くなるのを感じた。

「もう……彼らが苦しむ姿は見たくないのです。
そして……私自身の過去を清算するために……。
真選組の監察のあなたにこうのようなことを話す事が正しいのかは分
かりません……。

しかし……あなたなら信じられそうな気がします

久坂は目を細め、小さく笑った。

「……本当に……ありがとうございます」

そして、久坂は一度目を閉じ、次に目を開けた時、そこに現在の
彼はいなかつた。

彼が齎す情報。

それは、酷く奥深い、
穏やかな記憶。

To be continued . . .

【改】第一三訓 第一印象でその人の性格を決め付けるもんじゃない（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました☆ +

次回は場面変わつてあの人です(^ m ^)

焦らして焦らしてババーン！と出すのが俺流だぜ！

すみません本物のそれからもう少しお願いしますか……

【改】第十四訓 視聴者の興味を引くような予告を最初に流して結局内容は最後

タイトル今までで最長ですねww

そしてこの異様な更新率はお正月だからです。

でも明日から私のお正月は終わるので、更新いつも通りの亀になる
と思います（泣）

そして予告で言っていた”あの人”。

：実は1人しか出さないつもりだつたんですが、予定変更で、”あ
の人”が2人になりました！

1人は再び登場のあの人、もう1人は…？（^_^）

はどうぞ！

【改】第十四訓 視聴者の興味を引くよしな所を最初に流して結局内容は最後

『最近高杉の動向がおかしいのだ。』

「……。」

先ほど会った旧友に言われた言葉。

坂本は、快援隊の船の中にある自分専用の部屋にいた。彼は、うーん、と唸りながら、足を組んで座っている。

「まさか… そげな状態になつちつたとはのう

吉田松陽の墓に行つた時、銀時や桂から高杉の話を聞いた。祭の時のことや、紅桜のこと。

（… そういえば奴とも久しく会つとらんなあ）

「……。」

坂本は何を思ったのか、立ち上がりて部屋の電話機の横にある、分厚いファイルを手にとった。

彼はそのファイルを開き、指でなぞっている。

「……えーっと……力行の……ビニージャッタかえ……」

「お、有つた有つた」

すると坂本は電話の受話器をとり、ボタンを押した。

力チャ

『はい、どちら様ですか。ご用件をお願いします。』

高めの男の声が応答する。

「ああ、J.Jの総督は今ありますかの？」

わしは友人じや。ちよいと話がありましてな。

辰馬ち言えば分かるさ、代わってくれんか？」

どうやら相手は目当ての人物自身ではなかつたらしい。

『わかりました。少々お待ち下さい。』

（電話に出たのかのう、あいつ…）

『…なんの用だ、辰馬ア？快援隊の社長様がよ…』

すると突然、聞き慣れてはいるが、かなり懐かしい低い声がした。

「…おうおう！久しぶりの高杉！何年振りかのう！」

坂本はあまり期待はしていなかつたので、少し感動してしまつたらしい。

『んなこたア デリでも良い。

……てめえ何故鬼兵隊の連絡先を知ってる?』

声色が昔より数段と冷たくなつてしまつた気がした。

「あつはつは!快援隊の情報部は優秀じやからな。」

坂本は逆に声色が柔らかくなつてゐるかも知れない。

『……。で、なんの用だ?』

高杉は久しぶりに話した旧友に、冷たく、素つ氣ない態度を取り続ける。

(第一段階田、じやな)

「おまん、今日の夜は空いとるね?」

『……。

「おお、空いとるんか。」

無言=(イコール)肯定。坂本は知つていた。

(昔つからバカ正直じやきなあ、晋助は。
嘘が付けん体质じや。)

「なら今夜久々に飲みに行かんか?」

『は?』

高杉が間の抜けた声を出す。

(こいつ何を考えてやがる…?)

…高杉がそう思うのも無理はないだろ?。

「わしも今回の取引はかなり近場じや き、夜にはまた地球に戻れるんじや。」

…さつくとねまんと話がしたいき、じいじや?」

『……行くか阿呆が…。』

「あつははっはー!まあ来たくなかったら来んでもええ。京の居酒屋・
寺田にいのきな。」

『……用件はそれだけか?』

「おひ、こきなり電話して悪かったの。」

では失礼するぜよ。じゃ あなた晋助。」

「……もつかけて来るんじゃ ねえ。」

ハシニッ

「来るかのう、晋助の奴……」
(気紛れな所があるきなあ)

（金口に対するような口振りではなかつたものの、些か不安である。

（……奴らを繋ぐ存在は最早わしづかおらんくなつてしまつたぞ）

今あの3人を結んでいるものがあるとしたら、それはきっと自分と、彼らの心に一生根強く生きるであろう人。

時々、銀時と桂には高杉が必要だと思つ事がある。

大切な者同士は離れてはならない。

それは、自分が一番よく知つてているから。

To be continued . . .

【改】第十四訓 視聴者の興味を引くよしなお話を最初に流して結局内容は最後

最後までお読み頂きありがとうございます！

高杉がやつと書けて嬉しいです。

あと私の書く坂本さんは真面目すぎるですね……

第十五訓 同窓会をする時はメンバーと人数をよく考えろ（前書き）

今回は、前回に引き続き坂本です。

唐突ですが坂本の土佐弁が分かりません…。お詫びをくちゃくちゃ何となくで書いてます

私は関西圏在住なので、今回出て来る女将さんの関西弁は本物です
(笑)

ただ昔の京都弁っぽくしたので若干間違ってるかもしだいですが、
暖かく見守つてやつて下さいね…；

ではどうぞー

第十五訓 同窓会をする時はメンバーと人数をよく考えろ

「ふああーああ…。今日も疲れたぜよ～…」

「坂本はん、最近仕事忙しいみたいやねえ。」

「最近全然お店来はらへんから、寂しかったんですねえ?」

京の、居酒屋・寺田。

いかにも居酒屋、と言つた感じの店である。

店内には客が3、4人と、少ない。

従業員は多くが若い女性であった。

「あつはっはー女将さんみたいな綺麗な人にそげなこと言われると照れるぜよ～」

「もう、[冗談言わん]でええわ。ふふふ…」

「…[冗談じやないき]…」

坂本は女将に軽く流され、首をカクンと垂れている。

坂本は調理台とくつついているカウンターに座っていた。

「今日はお客様が少ないわあ。」

坂本はん、今日誰か取引先の人とか来うへんのですか？お一人で？」

「いや、わしの古い友人が来るはずじゃけんど……まだ来ないみたいじゃな。」

「あら、坂本はん、陸奥さん以外のお友だちははったんですねえ。…どんな人？」

女将はものすごい事を言いながらおしとやかに笑った。

「アツハツハ！…泣いていい？
わしにもいっぱい友だちいるぜよ。」

…銀時とか、桂とかだろうきっと。

「そりなんですか？」

「でも今日来はるお友だちはお一人なんでしょう？」

「おう。しつかし今日来る奴はわしの知つちゅう人間の中で一番厄介な人種じゃな。
しかし昔はあいつも可愛いもんじゃったがのう。」

からかつたら過剰反応してくるき、面白うてしゃあないんじゃ。

しつかし今じゅぎギャグパートにて100%登場できるようにならぬ運な
性格になってしまったせよ。

アッハッハ！

...

...

「ん？」

いきなり、長い沈黙。

「あ……坂本はん……後ろ……」

女将が少し困惑したような表情で、坂本の後ろを指差した。

「シリアルスパートには100%登場できねえ阿呆が俺に何のようだ

「あ…アッハッハ!
おう! 久しぶりじゃー!
おまん遅かったの? おぼほくつーー!」

坂本は高杉に頭を掴まれ、それは物凄い勢いでカウンターに顔を叩きつけられた。

「ひつ……せ、坂本はん！」

「アツハツハ！大丈夫じゃ大丈夫！
やつぱりおまんは陰湿じやのうぼはへつ！…」
…更に叩き付けられる。

「ククッ……頭カラな癖にモジヤモジヤしてんじゃねえぞ、辰馬ア。」

「頭カラでもモジヤモジヤは関係ないぜよ～」

「坂本はん、頭カラは否定しはらへんのですね。ふふふ…」
…女将はやつぱりおしとやかに笑う。

「あ、女将さん、こいつ、わしの旧友の高す…ぶぼつー」

「旧友でもねえ、名前も書つ必要はねえ。」

現在の世の中、高杉晋助、といつ名前を知らない人のほうが恐らく少ないだろ。

……なんせ、超過激派テロリスト……指名手配犯なのである。

「すまんすまん！」

おまんはジラほど阿呆じやないきの～」

高杉にめちゃくちゃされ、辰馬はボロボロだ。

「ジラもてめえにやあ言われたかないだらうぜ……」

（……あの口癖か）

いつからかは覚えていないが、桂のあの口癖は銀時と自分によるものだと自覚している。

「ま、ここに座つたらいいや」

辰馬は自分の隣の席を指差した。

「……。」

高杉は何も言わずに座る。

「坂本はんのお友達言うからどんな人かと思つたけど、やつぱり何ていうか…普通の人と違う感じがするわあ。

坂本はんも面白い御人やからねえ。」

女将は変わらずゆつくりとした口調である。

「わしの友はの、まつこと面白い奴ばっかりじや。のう晋助。」

「…………。」

「アッハッハ！ほら、こういう時に無視なんかしよるような面白い奴ばっかりじや！アッハッハ…」

坂本は打ちのめされ過ぎたのか、若干涙目になつていい。

「…まあ後はお一人でごゆつくりしてくださいねえ。
お密さんのお話聞くのもうちの仕事やけど、聞かんのもうちの仕事
なんですね？…ふふふ…。」

なかなかできた女将であると2人は思った。

「すまんの～。ま、取りあえず晋助の分の酒を頼もつかの。」

「はい、少々お待ちくださいねえ。」

女将は後ろの棚にズラッと並んでいる酒を一本手に取り、準備し始めた。

「の」「晋助」

「何だ」

高杉は田も合わせない。

「おまんようつ来ててくれたのう。もう来んか思つちよつたぜよ。アッハツハ！」

坂本は盛大に笑う。

「……ただの気紛れだア」

「ま、結果オーライじゃ！」

酒でも飲みながら昔話でもするかの～。」

「昔。

この2人にとって、『昔』とは何とも複雑なものであるのだ。

「…昔話は嫌いだ」

高杉はさほど興味も無さそうに、女将が注いだ酒を受け取りながら言った。

「まあまあおつまみ」とじや、たまにはええぜよ、そういうのも。

「

「てめえも昔話は嫌いなはずだ……。

……俺以上にな。」

高杉はニヤリと、破壊的な笑みを浮かべる。

「いや、嫌いではないのう。

なかなか面白かったことも多いきな。」

坂本はただ、いつもの陽気な笑みを浮かべる。

「てめえは嘘を付くのも上手くなつたかア？？」

「嘘なんか付いぢょらん。

ただ、昔話は大ちゅうもんじや。

楽しい事も、辛かつた事も振り返つてみるとこんな面白こいとはな
いぢよ。」

「……。」

高杉は応えず、ただ無表情に酒を飲んだ。

「ま、たまにはええじやろ。

おんじは確か……銀時やジラと幼なじみじやつたのう

「……。」

高杉は、微かに顔をしかめた。

松下村塾の3人の出会いと、その関係。

久坂玄雅と入江八二。

…彼らの時間は、少しづつ、しかし、確実に動き出していった。

To be continued . . .

第十五訓 同窓会をする時はメンバーと人数をよく考えろ（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございます！

次回は松下村塾生達の出会い、そして詳しい関係性が明らかに…？

第十六訓 出会いはいいつつなつても良いもんだー そのー (前書き)

山崎 side & 坂本 side から空想中です。

ヅラを美化しそうな久坂さん (笑)

それにしても久坂喋りまくりですねww

「そのー」 なんで続きます (^ - ^) /

それではじつそ

第十六訓 出会いはいくつになつても良いもんだー その一

私は、今でも彼らと出会えたことを心から嬉しく思つております。

私たちが…特に、銀時、ヅラ、晋助、辰馬のような者たちが出会つたのは、少し運が良かつただけで奇跡などではありません。

全てはそう、あの人。

あの人、存在したからなのです

「…………。」

「……玄雅。」

「……。」

「玄雅。」

「……先生、やつぱり私は……」「これはおれません……」

「帰りたいです……先生……」

「お友だちもこないのこ、……」「これはおれませんつ……」

私はこの時、泣いていたように思います。

「玄雅、そんなこと言わないで。

みんなとちゃんとお話ししなければ、友だちにはなれませんよ。
また、新しい子も入ってきましたしね。」

松陽先生は、とても優しい方でした。

「新しい子？」

「ええ。知らないのですか？」

私は、こくりと頷きました。

「この前の授業の時から、1人新しく入った子がいたでしょ？
今日もいたはずなんですが…」

「わからないです…」

私は幼い頃、それは引っ越し思案な子どもでしたから、あまり周り
を見ていなかつたんでしょう。

『あの、先生。
入つてもいいですか？』

「…」

すると突然、障子の向こうから高い凛とした声が聞こえました。

「おや、どうしましたか？」

『はい、今日の授業の質問があるんです。』

「丁度良いところへ来ましたね。
入りなさい。」

『はい、失礼します。』

そこへ入って来たのは、真っ直ぐな目をした、私とそつ年も変わらない子どもでした。

一瞬女の子かとも思いましたが、服装で男の子だと分かりました。顔立ちが整っていて、立派な着物を着て、黒くて長い髪は綺麗に上方で結つてあります。

多分私と正反対過ぎたんですよ。本当に衝撃的な出会いでした。

…やう、彼が桂小太郎。

7歳の私と、6歳のジラの出会いです。

今思えば少々ジラを美化し過ぎておりますが、まあこいつ素敵な

出会いだつた訳です。

「小太郎、質問の前に、この子に自己紹介してあげなさい。」

「？…はい。

俺は桂小太郎、6歳だ。

桂の家の長男で、一昨日ここへ入塾した。

」

彼は、自分の予想に反してなかなか男らしい口振りでした。

自分より年下であることに、少し負い目を感じたのです。

「6歳…」

「玄雅、あなたも自己紹介しなさい。」

「はっ、はい！

……わ、私は久坂玄雅、7歳です。

久坂の家の長男で、半年前に入塾しました。」

「そりが、よろしくな。玄雅。」

「！」

「玄雅、などと名前を呼び捨てにされたのは初めてで、とても嬉しかったのを覚えております。」

「君たちは家柄も同じで年も近いですか、せつと仲良くなれますよ。」

「……同じ家柄？」

「まさか…久坂とは、御殿医の久坂家か！」

「じゃ、じゃあ桂つてあの桂家の…」

桂家は地元でも有名な、先祖代々長州の御殿医を勤めている名家の名家でした。

私の家も御殿医をやつてしている家ではありましたが、御殿医の中でも新参者で、桂の家とは比べ物になりませんでした。

「そりがです。

あなた達は志も家柄も同じ。

剣の腕も均衡していると思いますが。」

この時はよく分かりませんでしたが、この後またジラと自分の差に負い目を感じることになります。

成長の度合いが彼と私では全く違いましたから。

しかも志の方向は同じでも、強さは全く違いましたし、家柄だって先程言ったように久坂と桂では比べ物にならないんです。

松陽先生はざじゅう話をそれらしく語つのが得意でおつたらしくですな。

「はい、松陽先生！」

入塾したばかりで慣れなかつたんです。

良いお友だちを紹介していただきて、ありがとうございます！」

「いえいえ。

玄雅、小太郎。2人とも仲良くするんですよ。」

「はい！」

「……はい……。」

まさに何でもできる優等生のジラと仲良くしなければいけないと言う事が決まり、私は正直言つて気が滅入つておりました。

「さ、小太郎、質問を聞きましょう。」

「はい。」

私は静かに、失礼します、と囁くように言つて、部屋を出ました。

⋮ それから、数分後。

私はまだ、その『小太郎くん』を待つておりました。
先生に仲良くしろと言われた以上、それを実行しないわけにはいき
ませんでしたから。

「おい、玄雅か？」

「わっ！」

ボーッと黄昏ていたせいか、突然背後から話しかけられ、私は驚いてしました。

「お前は綺麗な髪の色をしているからな。すぐわかつたぞ。」

「はい」

わいわらの真っ黒なストレートのジワに言われても、何も嬉しくありませんでした。

「一緒に帰るか。」

「…………！」

「の田を境に、私とジラは仲良くなりました。

ジラはよく私に話し掛けてくれて、友だちのいなかつた私はジラと出会つてから毎日が楽しく思えました。

最初はただ松陽先生に言われて仲良くしていただけでしたが、やがて私たちの間には友情が生まれました。

先生に言われたとはいえ、それからずつと仲良くなれたといつゝことは、きっと気が合つたんだでしょうね。

やがて私は彼のおかげで自我を表に出す事ができるようになります

た。

今までジラの方がお兄さんだったのが、私の方がお兄さんりしく振る舞えるようになったんです。

彼と共に御殿医になるのだと、この頃はただただ、夢を見ておりました。

…夢は夢で終わってしまったが、ただ、彼と出会えたからこそ今の自分がいると言つても過言ではありません。

ジラとの出会い…。

こんな感じですかね。私の最初の出会い、です。

わあ、次の出会いについてもお話しするところしよう。

…次に『松下村塾』に入塾してきた、彼、について。

To
be
con-
tinued
.

第十六訓 出会いはいへつになつても良いもんだーそのー（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました* +

久坂さん視点でした。

山崎にベラベラと語話します^ ^

しかしジラがしつかりし過ぎですね（笑）；
ボケがます暇がなかつた…（え

松下村塾生の中では、久坂さんが一番古参です。
次に入つて来たのがジラ。
さて、その次は…？

【改】第十七講 出会こはじへつこなつても良いもんだー もの～（前書き）

今回長いです。

次にやつてきた入塾生とは……？

【改】第十七講 出会てはいけないもんだーその2

「おはよう玄雅！」

「あ、おはよう小太郎。」

ヅラが入塾してから約半年程。

私たちは変わらず平和に過ごしていました。

この頃になつてみると私の引っ越し案は無くなつてきており、塾にもとても楽しく通つておりました。

「今日の授業は漢詩に入るな。」

「はいー楽しみですね。」

彼とは家の方向が同じなので、時々一緒に塾へ行く事がありました。

「あ、そうだ、お前に会つておかなければならん事があるのだ。」

「?」

「俺の1つ年下の友だちが今日入塾してくる。
また明日からは3人で登校する事になるかもしけんが、ようしきな。」

「へえ、私より2つ年下ですか。
どのような子なんですか？」

「男の子だが結構な甘えん坊だぞ。
しかし人見知りが激しいから、仲良くなるには少し時間が掛かるかもしけんな。」

この時は軽く聞き流していましたが、ヅラがかなり話を小さくして話していたのだと後々思い知らされることになります。

なんせ『彼』はヅラにべつたり、また後々は松陽先生にもべつたりでしたから。

「その子は何故今日私たちと一緒に行かないんですか？」

「ああ、今日は親と一緒に来るらしいぞ。」

「へえ、そなんですか。」

やがて私たちは村塾に到着しました。

松陽先生はいつも門の所で掃き掃除をしていらっしゃいます。

「おはよう(ハ)」^ハ ます松陽先生！」

「おはよう(ハ)」^ハ ます！」

「おはよう(ハ)。

2人とも元氣ですね。」

こいつやって優しく笑う松陽先生が私たちは大好きでした。

「あ、そうだ、あいつはもう来ていますか？」

「…ええ、来てますよ。

お母様はもう帰られましたが。」

「あ… そうですか。

えっと、玄雅に紹介したいので会いたいんですけど…」

「ええ。おそらくもう教室にいると思いますよ。」

「ありがとうございます。では失礼します！」

「あ、小太郎！ しつ失礼します！」

勢い良く走つて行つたヅラを、私は焦つて追いかけました。

「……いるかなあいつ……」

教室に着いたヅラは、教室の中を見回しておりました。

「……。」

それを私も一緒になつて探しました。

「……あ、いた！」

ヅラが手をブンブン振ると、1人の見覚えのない男の子が笑顔で駆け寄つてきました。

「小太郎！」

小さくて、紫がかつた髪の色をした男の子でした。

とてもかわいい印象を受けましたが、ただ目がとても澄んでいてきれいだと思ったのを覚えております。

「よく來たな。」

「うん……。」

彼は元気良くジラに返事した後、隣にいる私に気が付きました。

「あ、じたにちは。

はじめまして、私は久坂玄雅といいます。

小太郎の友だちです。」

「…………。」

彼はいきなり話し掛けられて驚いてしまったようだ、サッとジラの後ろに隠れました。

「うーーーじゃんとあこせつと血口紹介へりこじる。」

ジラに言われ、彼は少し眉をしかめました。
でも少しの沈黙の後、

「……高杉晋助だ。

誰だお前。」

ぼそりと、やうやきました。

……高杉晋助。

彼との出会いには、ジラの時のように決して良いものではありませんでした。

「阿呆かお前はー。やつを雅が自己紹介しただりうー。」

「つるさいつ！小太郎は黙つてろ！」

「なんだと！お前が黙つてろ晋助！」

「お前が黙つてろ！」

「いやお前が……」

「小太郎、晋助。」

優しく響いた低い声。

「 「 」 」

2人は同時に振り返りました。

「2人とも、授業が始まりますよ。
喧嘩していないで席につきなさい。
それと、2人して玄雅を困らせてはいけませんよ。」

松陽先生は優しく彼らの頭を撫でていて、私は少しうらやましかつたのを覚えております。

「はい…申し訳ありません。」

「……。」

ジラは本当に申し訳なさそうと言つて席につけ、晋助は無言のまま席につきました。

…そして授業後。

「玄雅、帰るぞ。」

「え」

いつもなら私たちは遊んだり復習したりして村塾に入り浸つてている
といつのに、
今日は何故かジラが授業が終わつた途端にそんな事を言つたので、
驚いておりました。

「行くぞ早く！」

「い、いや小太郎！
あの晋助つて子は…」

「今日はいい。」

ね縁に輔助の語もしつけたこしな。

「まあ……。」

私はよく分からぬままジラに連れられて帰路につきました。

…そして、塾から家までの道にある廃業して寂れた元茶屋の長椅子に腰掛け、私たちは話しておつました。

「不快だつたる」

「え？」

「頼助の」とだ。

「ああ……。

不快じやありませぬかと、少し驚きました。

「お前は優しいな、やつぱり。」

「？」

ジラが素つ頗狂なことを言つので、私は返答に困りました。

「あいつは、俺と出会つままでずっと一人だつたんだ。」

「…？」

「あいつの家は立派な武士の家なんだが、奴は高杉家の養子でな。高杉家の夫婦には子どもがいなくて、前の家の末っ子だつた晋助は高杉家に養子に行つたんだ。

…でも、晋助が養子に行つたすぐ後、高杉家の夫婦に子どもが生まれ、またそれが男の子だつたんだ…。」

「そんな…。」

その先の話も、大体の予想はつきました。

「そりやあ高杉家の夫婦だつて自分の子どもを跡継ぎにしたいだろう？」

…だから晋助、今高杉家で酷く扱われてるみたいなんだ。」

当時の私は彼の境遇を思い、子どもながらに胸を痛めておりました。

「それに前の家でも晋助にはお兄さんやお姉さんがたくさんいたのに、母親が歳をとつてから生まれた子だつたから、こんな歳で子どもを産むなんて恥ずかしいと母親に言われたらしいのだ。」

まだ天人が幕府にまで手を出していくないお堅い時代でしたから、何人も子どもを産んでおきながら、年老いてから子どもを産むことは恥ずかしいことだつたんです。

…つまり、晋助はどちらの家でも望まれない子として育てられた訳です。

「アハ…ですか。」

「…だから、この塾を紹介したんだ。」

「え？」

「友だちがいたら毎日が楽しいだらう？

それに松陽先生は俺達を本当の子どもみたいに扱ってくれる。

晋助が毎日楽しく過ごせる場所はここしかない、そう思つたのだ。」

「ええ、私も晋助と頑張つて打ち解けたいと思ひます。」

ただ、彼をもっとよく知りたいと思つたんです。

「本當か!?

「もちろん。」

「あいつ根は良い奴だから、あいつとお前とも仲良くなれるはずだ。
…よろしくな。」

「はい!」

「明日からは3人で帰ります。」

「ああ。」

私達はこうじと笑い合いました。

それから私はヅラを挟んで晋助と喋つてゐる内に、晋助と仲良くなつていきました。

元々はヅラにべつたりでしたが、今まで受けなかつた親の愛情の反

動からか、次第にお優しい松陽先生にべつたりになりました。
晋助とジラはいつも喧嘩ばかりしていたのを覚えてあります。
…とても微笑ましい類のものでしたが。

ただ、今でもわからないのはジラと晋助の出会いです。
彼らがどのようにして出会い、仲良くなつたのかは私も聞きそびれ
てしまいました。

これが、晋助との出会いです。

これの更に1年半ほどして、立て続けに3人の入塾生がやつてきま
す。

では、またお話をいたしますがお疲れになつたでしょう。

少し休憩してからまた再開しよう。

To
be
con-
tin-
ued
.

【改】第十七訓 出会いはいへりになつても良いもんだーそのへ(後書き)

最後までお読みいただきありがとうございました！

高杉が私のイメージすぎてごめんなさい；；

自分のイメージと合わない方に本當に申し訳ないです
そこは脳内補充ということでお願いします(^ _ ^)

出会い編、あと3人です。

1人は名前しか分かつてないあの人、もう1人は銀髪のあの人（おい実はもう1人ちょっとだけ重要人物がいらっしゃいます。キャラ多すぎですみません><；

ではまた次回お会いしましょう！＊+

【改】第十八訓 每日同じ様なもんを食べるな栄養が偏つて体に悪いからね（前）

今回は歌舞伎町に戻ります。

出会い篇は次からまた再開します！

やつぱりギャグシーンはかなり苦手です（^ー^；）
シリアスしか書けない私にとつて銀魂書くのは大変ですね；；
下手なギャグシーンでも温かく見守つてやつて下さりませ（ー）
ー m

ではどうぞー

【改】第十八訓 每日同じ様なもんを食べるな栄養が偏つて体に悪いからね

(静かだな)

気が付いたら夜になつていった。

最近は昼間でも薄暗い日が続いており、感覚が鈍つているのかもしれない。

「毎日毎日暗すぎるんだ」

梅雨でも無いのに、最近ずっと天気がくすぶつっている。

一気にザアッと降ってくれれば次の日に晴れになるだらうに、いつも黒い雲が悶々と泳いでいるだけで、降つてもポツリポツリと降る小雨である。

「こわさか気持ちの悪い天気だな……」

仕事に戻る気も失せ、長い髪を揺らしながら桂は田を伏せた。

彼は松陽先生の墓へ行つた後、疲れて隠れ家のすぐそこにあるブランコをえ無い小さな公園のベンチで酒を飲んでいた。

何故か、今日はそういう気分だったのだ。

「……。」

ただ酒をちびちびと飲みながら、湿っぽい風に吹かれていた。

「そなた、桂小太郎殿とお見受けする。
狂乱の貴公子・桂小太郎じやうづ?」

すると突然、笠を被つた髪の長い者が話しかけてきた。

「……貴様何者だ?」

桂は自らの剣に手を掛けた。

「待て、そう早まるな。

ワシは怪しいもんではないさ。」

「?」

ふと、色々なことに気付く。

よくよく聞くと、声が女であり、しかもいつもあの馬鹿から発せられる土佐弁である。

「……驚かせて悪かったのう
女は笠をパツと取つた。

「……お前は……」

「……。」

「……。」

「……。」

「……誰だつけ？」

「ふぼはつ！！」

ズザザアアアアツ！！！！

何かが切れた音の後、凄まじい鉄拳により、桂はものすごい勢いで吹っ飛んだ。

「阿呆は頭だけで十分じや。」

武神四侍ゆうのは伝説の阿呆が4人集まつた集団やつたがか。

「伝説の阿呆じやない桂だ。本当に誰だ貴様？」

「快援隊の陸奥じや。」

おまん坂本辰馬を知つとるじやう。

「その側近じゃ。

「辰馬の...？」

桂はよく話が読めないらしい。

「話があるせい、来たぜよ。」

「話?」

「ああ、話じや。頭につくてのな。」

陸奥は起き上がる桂を真っ直ぐに見ながら言った。

「…あの馬鹿について何を話せと?」

「馬鹿にも色々あるんじや。」

とにかく立ひげ話もなんじや、おまんの隠れ家にでも入れてたもうせ。」

「

「…な…何を言つている!」

何故身元の知れんような奴を俺の隠れ家に入れなければならん
だ!」

「…だから快援隊の者だと、頭の側近だと言つておひつが。」

「知るかそんなの、お前が辰馬の側近とつ詮拠はお前が辰馬が阿
呆だと知つていたことくらうだ。」

…なんか阿呆とか馬鹿とか言われまくつてる坂本が段々不憫に思え

てへる。

「はあ……。

まあ奴ももつ来るわ、それで畠中してもいいやんじやねん。」

「奴?
「

ガツガツガツ…

公園の土を踏み締める音。

「一.」

「お、やつぱーにいたか、ジラ。」

「ジラじゃない桂だ。…なんだ銀時。」

そこに現れたのは、自分の幼なじみである坂田銀時。

「そう睨むな。や。

…俺もお姫さんの為には全力で戻すべし。お金もひりてんだからな。

」

「嘘…だと?」

「ワシがおまんの居場所を一緒に探してほしこと依頼したんじや。そしたら奴はこの公園にいるかもしれんと教えてもらつたもんでな。」

「ジラア…」こつは本当に氣の弱い下部で、陸奥つてんだ。

「…まあ良こ、銀時がそつこない信頼してやる。隠れ家もどうせせりもつすぐ場所を移そうと思つてこたといひだ。知られてもなんの損もしない。」

「…恩に着る。」

「ひつちだ。来い。」

そうして3人は桂の隠れ家へ移動した。

「…で、なんだ、話とは。」

3人は薄暗い部屋の真ん中に胡座をかけて座っている。

「…单刀直入に言つ。

…おまんら、頭に何を吹き込んだ?」

「「は…?」」

陸奥の突飛な質問に、2人は眉を寄せる。

「おまんら、今田吉田松陽とかいつおまんらの恩師の墓に行つたそ
うじやな。

そん時、おまんらと頭の他にもう一人の武神四侍の話を頭にせんか
つたか？」

「……。」

「武神四侍。」

この2人にとっては懐かしく、何とも複雑な響きの単語である。

「一度潰れた鬼兵隊を立て直し、今や最強の攘夷集団になつた鬼兵
隊の総督、高杉晋助。

確か一つ名は、修羅…言つたかのう」

「…確かに奴に関する話はしたな。」

桂がぼそつと呟くように囁いた。

「内容を、聞かせてはくれんか？」

「…ただ、奴の近況を話した。それだけだ。」

「そつか…。

おまんらと高杉の関係が決して良いもんでは無いことはワシもしつ

ちゅる。

「鬼兵隊に関する事件を調べたんじゃが、一番最近の事件の中に桂一派と鬼兵隊が騒ぎを起こしたつちゅう記事が出てきたぜよ。しかしづしも頭もニュースや新聞の類は余り見んし、その事件は大々的に取り上げられた訳ではなかつたき、当時は知らんかった。」

銀時も桂も、陸奥の聞きたい事が段々と見えてきた。

「俺たちと高杉が袂を別つた事件だな。」

「その事件になら俺も関わつてる。」

2人の表情は心なしか暗く見えた。

「……？」

「ちょっと…待て…。今何と言つたんじゃ？」

袂を…別つた…？」

陸奥にしては珍しく、額から汗を流し眉をひそめていた。

「……？」

「……ああ。」

桂が戸惑うようにして答えた。

「それを頭に話したがか？」

陸奥はまた無表情に戻る。

「……ああ。」

「その他には？」

「最近高杉の動向がおかしい、と……。」

銀時と桂は陸奥の質問攻めに困惑している様子だ。

「もうじゅったか……。

……高杉は何かを企んでるんか？」

「ああ。何かを企んでるのには違いない。
その計画の「テカさも内容も分からぬがな……。
しかし奴らが今までにないくらい慎重なのも事実。
……俺には事が大きすぎる気がしてならん。」

「だから……か……。」

陸奥は小さくため息をつく。

「「？」」

「まさか袂を別つまでになつていたとは思わんかったぜよ。」

陸奥は少しだけ頭を伏せた。

「何だ？ 眞つていることがよく分からんのだが……」

「……今日の夜は地球に帰つてくる口でな、頭もいつものようにひつけに掛けにいたんじやが、頭はこいつもなら地球に帰つてきたら歌舞伎町の風俗店へ行くんじや。」

「しかし、今日は違つた。

「京へ行かおつたぜよ。」

「京……」

桂は、京、という地名に少し胸がざわづくのを感じた。

「不振に思つてな、電話の履歴を調べちゃつたら、一番新しい履歴に『鬼兵隊』ち載つとつたんじや。」

「「鬼兵隊……！」」

銀時も桂も田を見開き、驚いている。

「……高杉と会つてこなとこいつのつか？」

「わうじや。」

「……辰馬が……高杉とねえ」

「ああ。」

「頭はよつ言つとつた。

また4人で酒でも飲みたい、ち

「……そつか」

「……。」

「それを伝えておきたかつたんじや。

それにおまんらや高杉のことも知つておきたかつたしのつ。

頭はほとんど自分の事を言わんき、自分で調べにや分からんぜよ。

陸奥は微かに笑つた。

「しかしあわざ俺たちの所まで来るとは……陸奥殿は心配性だな。

」

「頭に死なれては困るんだな。

鬼兵隊は超過激派攘夷集団と聞く。

そりやあワシが動くしかなかろうて……。

それにおまんりとは前から話をしたいと毎つりよつたわな。

「前から…？」

「ああ。実はまだ話があるんじや。

…本当は今話すつもりなど更々なかつたんじやが、高杉の事を色々聞いて気が変わつた。」

いつもキリッとしている田が、更に眼光を放つ。

「？」

「おまんり、頭の家族の話は知つとるか？」

「辰馬の家族？」

銀時は首を傾げる。

「たしか…両親と姉が一人いたか？」

「ああ。母親は頭が10歳の時に、父親は20歳の時に死んだがな。

」

「あああの時か…。」

やつと銀時が思い出したらしい。

「攘夷戦争中だつたからな、奴の父親が亡くなつたのは、あの時のことによく覚えてこりよ。」

「…些か衝撃が強かつたのでな。」

桂は少しだけ笑つた。

「その、頭の家族の話を聞いてほしいんじや。」

「「？」」

「あんまりお節介だとは思わんでくれ。これでも幼なじみじや。」

「少しくらい心配しても驅は^ばきたらんや。」

「「え」」

「…非常に衝撃的な事実を知つてしまつた気がした。」

「ウ、ウソお…」

「陸奥殿つてお節介だつたのか！」

人はやはり見かけと中身はちがぶほつ…」

桂の頭に銀時の拳骨が炸裂した。

「お前やつぱシリアルスマード駄目だわ！！
お前は紅桜篇で燃え尽きた！
お願ひだから消えてくれ！」

「銀時冗談やめてくれ高杉がギャグパートに登場するよりは全然イケるよ俺、高杉よりは絶対上手くやれるよオールマイティーなキャラにもなれる！」

「つづぜえーー！」

オールマイティーは俺じやボケえ！

それに奴だつて多分空氣はくらいは読める……あ、やつぱ無理かな

「……おじおまんら、今頭が頑張つてシリアルスマードかましとるんじや、奴の境遇を考えれば何のこつちやないじやうつ。」

すると2人はカツと目を見開いた。

「そ……そうだ……！ そだぞ銀時！」

あの馬鹿が！ あの馬鹿がシリアルスマードをやつしているんだーー！」

「……そ、そつだな、あの馬鹿がシリアルスマードをやつしているんだーー！」

高杉のギャグの一いつや二いつ全然チヨロいじゃねーか…あれ、ていうか話それまくりじゃね

「やうだぞ銀時、陸奥殿がお節介だぶぼつ…」

銀時が、それは華麗に回し蹴りを決めた。

「…おめーらがまさか幼なじみだつたとはな…。初耳だ。」

「知らんかったがか。」

「…ヒ、といふか何故家族の話を聞かなければいかんのだ?」
すると伸せていた桂がゆつくつと起き上がりってきた。

「今の奴の境遇を知つてほしいんじゃ。

まあ一番言いたい事は話を聞いてもらえればそれで分かると思つさ。

」

「…?」

「まあいい、話せよ。夜は長えんだ。」
「ああ。聞かせてもらおう。」

「すまんな。」

（あの日、）

やつ、2人の心に深く刻み付いた、あの日。

（奴らには話しておくれなんじや……。）

「覚えたか?」

頭の父親が亡くなつた時の事を……」

「ああ……。よく、覚えてる」

「……。」

（昔話は嫌いだ…。
だけど、）

どれくらい『過去』というものが大切なのか、彼らは身にしみて知
つているから。

To be continued . . .

【改】第十八訓 每日同じ様なもんを食べるな栄養が偏つて体に悪いからね（後

最後までお読み頂きありがとうございましたー！

桂ボコボコですね　ｗｗ

それにもやはり土佐弁分かりません（。o。）

次はまた出会い篇に戻ります。

よろしければ、感想などお待ちしておりますー！

第十九訓 出会いはいくつになつても良いもんだー その3（前書き）

出会い系に舞い戻つてきました！

なんか最近自分の文章力の無さに泣けてきます。

銀魂を書いてると尙更私の文章力と想像力の無さが際立ちますね（泣）

…次はギャグシーンを書ける…かもしれない運転。

第十九訓 出会いはいくつになつても良いもんだーその3

さあ、休憩はもうそろそろ終わりにして、次の出会いについてお話しましょ。」

晋助が入塾して、早一年以上の月日が流れておりました。

私も彼と仲良くなり、よく3人で遊んでいたものです。

そんなある日、また新たに入塾者が1人やってきます。

「おい、あの子…新しく入つて来た子じゃねえか？」

「本當だ、初めて見た顔だな。」

「話し掛けでみましょうか？」

授業が終わった後、私達は柱の陰に隠れて教室を覗いておりました。

教室の真ん中には、1人の男の子が座っています。

その子はジラよりも真っ黒な髪の毛で瞳も黒々としており、田の下には濃い隈があり、がたいが良く、服装は少し質素に見えました。更によく見ると、右手には包帯のようなものがぐるぐると巻いてあります。

「すみません、あなたは今日から入塾して来た人ですか？」

私は一人駆け寄つて、彼に話し掛けました。

「あ……うん。」

そうその子が言つた途端、ジラと晋助も駆け寄つて来ました。

「やつぱりそういうなんですか、よひじくお願ひします。」

「俺もよひじく。」

「俺もよひじく。」

「…うん…俺もよろしく…」

その子は話しかけられたのがよほど嬉しかったのか、白い歯を見せ、「口上」と笑いました。

彼は髪が少し長く、前髪を全部上げて、髪は結わずに下ろしてありました。

「おや、皆さん早速彼を見つけましたか。」

すると突然、後ろから私達の大好きな声が聞こえました。

「あ、松陽先生…」

やはり晋助が一番に満面の笑みで振り向きます。

「お互いに自己紹介はしたんですか？」

そう松陽先生が晋助の頭を撫でながら言いました。

「あ、まだです。」

「そうですか、ならあなた達が先に自己紹介してあげなさい。」

「はい！」

「俺は高杉晋助、6歳だ。」

「私は久坂玄雅といいます。
8歳です。」

「俺は桂小太郎だ。
7歳になる。」

「俺は入江八一、8歳だ。
よろしくな。」

そう、彼が入江八一。

彼は人懐っこく、とても氣つ風の良い人柄です。

「彼は最近すゞく遠い所からこの萩に引っ越して来た子なんです。
ここいらの事もよく分からぬですから、案内してあげて下さいね。」

「「「はい！」」」

そうして、早速私達は萩の町へ繰り出しました。

「なあ、ハ一はそんなに遠くから越して來たのか？」

「ああ、飛行機に乗ってきたんだ。」

「マジでか！ すげーな！」

飛行機つて天人が持つてきたあの機械だら？」

「うん、俺も初めて乗ったからすげえビックリしたぜ。」

「じゃあハ一、その田の下の黒いのは何なんだ？ あんまり寝てないのか？」

先ほども言った通り、ハ一にはとても濃い隈がありました。それはまるで化粧のようにも見えます。

「これは生まれつきだ。」

でも前に俺が住んでた所には隈これがある人いっぱいいたぜ。」

「へえ。じゃあ遺伝か。」

最近は少ないですが、昔は親戚が地元に集まつて住む事が結構多かつたんです。

「じゃあ私の右手の包帯は？」

「え？ と」ねは…」

「のようだ」ハ二は私達からどうどん来る質問を一つ一つ丁寧に答えてきました。

ハ二は本当に人なつこく、まるで昔からの知己の如きで、楽しかったのを覚えておつます。

その後、ハ二は私達と氣が合つて、彼もよく一緒に遊ぶよつになりました。

特に私とは本当に氣が合つて、いつも一緒にいる感じでした。剣の腕も私とハ二では均衡していましたしね。

「じゃあみんな、また明日ー。」

そして私達は一通り萩の町を散策した後、各自の家に帰りました。

これが、入江八一との出会いです。

一見普通の出会いに見えますが、私はこの20年程も後になってこの出会いの中に彼の運命がどれほど重いものであったのかを示すヒントがたくさんあつたことや、この出会い 자체がどれほど運命的なものだったのかを知ることになります。

…そして、今思えば何故か晋助も知っていたようです。

入江八一の、その残酷とも言える運命を…。

しかし、八一は強かつた。

…そう、強かつたんです。

…彼、入江八一のお話は「れで終わるにしましょ」。

それでは、遂にあの男の話をする時がきましたね…。

そう、攘夷戦争の後期から末期にかけて、最も恐れられ、最も活躍し、今や伝説となっている男です。

…ではお話ししましょう。

桂や高杉と、“彼”の出会いを。

To be continued . . .

第十九訓 出会いはいへつになつても良いもんだーその3（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございましたー

次は遂に…です* + (^ ^)

【改】第一十訓 出会てはいけないのもんだーその4

「くおおおらー！！！晋助え！ハーい！

隠れてないで出てこい！

だから貴様らは頭バーなんだ！！

「晋助！ハー！

昨日授業が終わったら復習すると言つておったのはどうのどうにつけで
すかーー！」

ハーが入つて来て、もうすぐ2ヶ月が経とつとしていました。

私とジラが何故いつも呼びまくつてこるかとつと

「クソー！あいつひどいこじきやあがつたんだ…。

出できたら絶対シメでやる…」

「小太郎、キヤラ違くない？」

「そつちこな」

晋助とハーが授業後に授業の復習をすると私達に約束していたにも
関わらず、どこかに隠れておるのである。

「全く、奴らには困ったものだな…。

隠れている暇があれば勉強をしろ勉強を…」

ジラは村塾の生徒の中でも、一番頭の良い生徒でした。

…一応私も御殿医を目指しておりましたから、晋助やハーハーよりは勉強ができましたがね。

「私達がこれだけ探しても見つからないこの能力…勉強の方に生かして欲しいですね。」

「全くだ」

そうして私達はキヨロキヨロと塾中を探し回つておりました。

「一周回ったな…。」

「もう放つておいて帰りましょつか…。」

私達は最初に探し始めた松陽先生の部屋の前まで来ておりました。

……つ

「……？誰だ！」

「……ど、どうしたんですか小太郎……？」

「いや、今誰か…」

「…？」

急にヅラが振り向いたので、私もそれに従い振り返りました。

そして、そこには小さく、ひょろりとした少年がいたのです。

「……。」

「……。」

彼を目にした瞬間、私は息を呑みました。

「……。」

私達と年の変わらないくらいの男の子でした。
ただ、その風貌は全く子どものそれではなかつたんです。

白っぽいボロボロの着物に、刀。

しかし一番私達の目を引いたのは、その白銀の髪、赤い目、その小
さい体から発せられる雰囲気、オーラ。

「……おい、その刀は松陽先生のものではないか」
さすがジラ、と云つた所でしうか。彼は声を振り絞りました。

「……。」

しかし、彼は少し眉間にシワを寄せただけで、ピクリとも動きませ
ん。

「貴様何者だ？」

ヅラは負けじと彼に話し掛けます。

「…………知らない」

その子は困惑したような表情を浮かべ、彼は彼で声を振り絞つているように思えました。

「知らないって…」

ヅラも何も言えなくなってしましました。

「…………」

「…………？」

彼は何も言わず、スウッと刀を鞘から抜きました。
余りに綺麗に刀を抜くので見入ってしまいましたが、
直後、それは恐怖に変わります。

「…………ふた、り」

彼は刃先で私達の後ろの柱を指しておいました。

「…え」

(まさか)

「…チツ、何でわからんだよ

「……。」

その柱の陰には晋助とハ一が隠れていたんです。

きっと、私達が晋助たちを探し回っている時も後ろから私達をつけ
ていたんでしょう。

「誰だよお前…。

「氣持ち悪い髪の色と田の色じゃがって」

子どもの晋助がそういうのも無理はなかつたのかもしません。

なんせ彼は、白銀色の髪の毛に赤い瞳。
人間とは思えないような風貌でしたから。

やつ言われた小さな子は、目を少し見開き、
「やつぱりお前も」
と呟くよつて言つました。

すると彼は刀を構えました。

ぞくつ、と背筋に悪寒が走ります。

初めて味わつ、この究極に張り詰めた空氣。

…私は今にも泣き出しそうになつておつました。

「待ちなさい…」

「…」

じつじつと、体の芯にまで響く、その声。

「松陽先生」

今までこんな松陽先生の声は聞いたことがありませんでした。いつもの丸く包み込むよつた優しい声ではなく、鋭く厳しい声。

「私があげたその刀、何の為に使えと言いましたか？」

松陽先生の声色が少し戻りました。

「…………。」

しかし、彼は黙つたままです。

「その刀で自らだけを護り、他人を攻撃することは許しません。
それが出来ないなら刀は**それ**何の意味も成さない。」

「…………。」

それでもやはり、彼はだんまりでした。

「そうですね……やはりお前には仲間というものが必要なようですね。」

「小太郎、晋助、玄雅、八一。」

驚かせてすみませんでした。

彼は、坂田銀時くんといいます。

「小太郎と同じ年です。」

(銀…)

坂田銀時。

この恐ろしき出会いは、強烈な印象があつたためか本当にはつきりと覚えております。

「なんだなかまつて」

「仲間、です銀時。

仲間とは、心から護りたいと思える存在です

松陽先生はにっこりと優しく微笑みました。

「心から護りたい…？」

「その内わかりますよ。

それより銀時、彼らによろしく、とお願いの言葉を言こなさい。」

「…みんなへ…」

「…」

私たちは、返事をする」ことがどうしてもできませんでした。

恐怖と、驚きです。

ろくに私たちに口をきかなかったのに、松陽先生とは言葉数が少ないながらも普通に話していたこと、そして何より、先ほどの恐ろし

「…4人共、あなた達もよろしく、とお願いしなさい。」

「…」

松陽先生に言われて何とか言葉を発しました。

「銀時、その刀は私が預かつておきます。

今のあなたには必要なものではありませんからね。」

松陽先生は銀時に手を差し出し、銀時はそれに従つて刀を松陽先生に手渡しました。

「ではみなさん、早くお友達になるんですよ。」

「「「「は」」」

松陽先生は微笑を浮かべ、去つていきました。

「おい、お前

不意に、晋助が銀時に話しかけました。

「…………。」

銀時は、やはり何も言こません。

「てめー、強いか?」

晋助もこの状況で銀時に話しかけることができるのはやがとしか
言こようがありませんね。

「…………知らない……！」

銀時は眉をしかめ、少し後ずさつしました。

「……怖いのか?俺たちが

ヅラが不思議そうに銀時を見つめます。

確かに、そう見えました。何かに怯えてこらみつた。困惑している
ような。

そんな銀時を見て、段々恐怖心は薄れていきました。

「怖くない」

銀時は途端に無表情になり、感情が読めません。

「なあ銀時。もしお前が強いなら、俺と手合わせしろ」「晋助はズカズカと銀時に近寄り、そう言い寄りました。

「！！」

銀時は非常に驚いたらしく、ビクッと肩を震わせます。

「晋助！全くお前という奴は！強いか知らんと銀時は言つているだ
る！「。それに急に近寄つて驚かせるんじゃない！」

ジラの順応性には凄まじいものがありました。既に銀時の性質を見
抜いておつたのです。

「うつせーよ小太郎！」

晋助はふくつとむくれています。

「……銀時？」

私は銀時に話し掛けました。

銀時は本当に驚いているらしく、目を見開き、口をポカンと開けて
いたのです。

「ぎん、とき」

銀時はそう、ポツリと呟きました

「お前の名前なんだろ?」

ヅラが不思議そうに銀時に聞きます。

「名、前」

「あ、そうだ銀時。俺の名を言つていなかつたな!俺は桂小太郎だ」
ヅラはにっこりと銀時に笑いかけました。

「ヅラ小太郎…」

「　　」…………。」「　」

少しの沈黙の後、

「ぶつ！」

「さやははは！」

「ジラだつて！ジラ小太郎だつて！」

「さやははは！」

晋助とハ一の大爆笑によつて、その場の雰囲気が一気に変わりました。

「…………貴様、いらっしゃつ……」

「」の和やかな空気をぶち壊しおつて……
「」のひつてくれるんだ阿呆どもが……！」

もひかりジラは顔を真つ赤にして怒りでおつます。

「ジラ……？」ジラ。ジラ。」

銀時の表情が段々と柔らかくなつていいくのを感じました。

「銀時貴様あ～つ……！」

「ジラじやない桂だ……！」

ジラは銀時に詰め寄ります。

「何？ジラ」

しかし銀時はもう肩を震わせる「とせあつませんでした。

「ジラじやない桂だつ……！」

「」の今では「定番ともいえるジラの口癖は、」のひょんな」とから生まれたんですね。

グ〜
...

「...」

突然銀時のお腹から、切ない音がはつきりと聞こえました。

「...フン、腹が減ったのか?」

ジラが口を尖らせて聞きます。

「……減った」

銀時もまた口を尖らせていました。

「これでも食べ。」

ジラが懐から出したのは、甘い飴でした。

「ただし、絶対にジラとは一度と呼ぶなよ。」

フンッと鼻をならし、銀時に飴を押し付けるように手渡しました。

「なんだ、これ」

銀時はきょとんとして聞きます。

「……お前、飴も知らないのか？」

「あめ……？」

「 とにかく、口の中でも營むる食べ物だ。」

「。」

銀時はそれほど興味も無からず、飴を口の中に放り込みました。

「」

「 へ、ビリした銀時」

銀時がすぐこの形相でうつむいているものだから、私たちは少し心配しました。

「」

「え？」

「なんだこれ…」

銀時は目をただ見開いていました。

「美味しくなかつたのか？」
そつ、ジラが心配そうに聞きます。

「甘い…」

銀時の口はキラキラと輝いておりました。

「…よつぼり甘い物が好きなのだな。」

そう、このジラがあげた飴から銀時の甘い物好きは始まつたんですね。

「あ…またぐれ、ジラ。」

銀時は少し頬を赤らめて言いました。

「だからジラじやない桂だ！」

貴様がジラと呼ぶのをやめたらやれい！」

「わかつた、ジラ」

「だからジラじやない桂だつ！――」

「銀時、だつたよな。

俺の名は高杉晋助だ。

今度の剣術の授業の時、必ず手合わせしてくれ

晋助もまた銀時に近づき、まつすぐな顔をして言いました。

「あわせ？」

銀時はまた不思議そうな表情をしていました。

「竹刀つていう竹の刀で戦うんだよ」

「それが手合わせ、といいます

私とハ――も銀時に近寄ります。

「……うん……わかつた

銀時はよくわかつていなじよつでしたが、ふつやうひめひんつ簽べました。

「それと、」
「それと、」

晋助は、懐からジラのものとは裝飾や色が少し違つ飴を取り出しました。

「一。」

「こちー」ミルク味だ。

友だちの証に、やる。絶対ジラのよつづめー。…あ。」

ジラ、とこうあだ名はそれほど呼びやすかつた、とこちーですね。

「晋助～～！～お前までつ～～！

しかもなんだいちーミルク味つ～～！」

「だつてジラの方が呼びやすいし。

いちーミルク味は俺の弟から奪つてきた。」

「またお前の母上にしかられるだ。」

「知るかあんな女」

「つたへ…」

母に愛情を注がれなかつた晋助は、度々このようないことがありました。

「晋、助のヅラのよじつめバ

（（食べるの早つ））

私とハ二は心の中でシシ「」をこれでおりました。

「ジラじやない桂だ！…何だと銀時つ…
そつを食つたのを今すぐ出せ…」

「まあまあヅ…こついや小太郎！…

私は久坂玄雅と云います。

私も友だちの印の、飴。じうぞ銀時。

「あ、みんな先駆けすんじやねえよ…
俺は入江ハ二！俺の飴もやるよ。」

私とハ二も銀時に飴を差し出しました。

「お、…」

銀時は田をキラキラさせて、私たちに向か言いたげにじらりを見ております。

「銀時、いつの時は、『ありがと』と並んだぞ。」ジラが銀時的心を読んだように、銀時に話しあげました。

「ああ……、ありがと…」

銀時は、この時ほんの少しだけ笑います。

この笑顔が、銀時の初めて私たちに見せた笑顔でした。

これが、銀時との出会いです。

子どもとは順応性が高いのか、怖いもので、恐怖心など忘れてすぐに友だちになり、仲良くなりました。

銀時も松陽先生の元、社会の常識や、私たちと接することで、仲間といふものを知ります。

そして、銀時の真の才能が芽生えるのもそう遅くはありませんでし

た。

こつして、武神四侍のうち3人が出会ったのです。

彼らの剣の実力は均衡しており、村塾の中でもずば抜けておりました。

私とハ二など、全く刃がたたない程にね。

では次は、いや、おまけのような話なんですが…
少しだけ、面白い出会いの話をして、村塾の出会いの話は終わりに
しましょう。

それは松陽先生の唯一の、兄妹のお話です。

To
be
con-
tinue
.
..

第一十一訓 めおけとかまつといへ、結構重要だつたりする（前編）

タイトル通りです（笑）

第一十一訓 カタカナ語として、結構重要なたりする

さて、やつと最後の村塾での出会いですね。

…まあ、少々私的なことになりますが、聞いていただけると幸いです。

「あーあー…、授業疲れたあ～」

「銀時、あんた寝ていただけでしょウ…」

銀時が入塾して、早1年が経とうとしていた頃。

「今日勉強ばつかでほんとつまんねえや。剣術の授業無い日はだりいなあ…」

ハ一も銀時同様、勉強が苦手でした。

この日の授業がすべて終わり、私たちは門に向かつておりました。

「あ、あれ、松陽先生じゃねえか？」

松陽先生大好きな晋助が、パツと笑顔になります。

「うむ…。しかし、一緒にいる、あの人は一体誰だ？」

ヅラの言つた通り、松陽先生と女の子が一緒にいます。今思えば女の子ですが、当時はお姉さんに見えました。

女の子は松陽先生と同じ髪の色をしており、髪をポニー テールに結つておりました。

私たちは自然に足を止め、
2人をジッと見つめていました。

しかし2人は私たちの存在に気が付いておらんようです。

「お前も、ここで学びなさい。

そうしなければ私はお前の面倒を見きれません。」

松陽先生の声は、いつもより少し低かったのを覚えてあります。

「私は1人で生きて行ける。

兄上に迷惑はおかげしません！

母上が亡くなつた今、生活費は私のものだけでよくなつたんだ。」

「文！いい加減にしなさい。

お前にはこの村塾の後継者としてここで学び、運営を手伝つてほし
いんです。

いいや、後継者になりたくないならいいんです。

ここで学び、夢を見つけるだけでもいい。」

「

「でも兄上……」。

「大丈夫、みんな良い子ばかりですよ。
しかもお前より剣術の腕がたつ子も数人いますしね。」

「嘘です！」

私より腕のたつ子なんて…」

「」「」「」「」「」「」

「！」

「あ…あなた達…
聞いていたのです

「聞いていたのですか……」
松陽先生は、大層驚いた様子でした。

そう、声を発したのは、銀時、ヅラ、畠助でした。

「も…申し訳ありません！」

盗み聞きするつもりはなかつたんです、先生…」

「もつ申し訳ありません！」

「私とハ二は必死に謝ります。

「…いや、一度良い。」

「「え？」

ポツリ、と言つた松陽先生の言葉に、ただポカンとするしかありませんでした。

「紹介しましょう。

「この子は、私の年の離れた妹です。
明日からこの村塾で共に学びます。

あなた達よりも少しお姉さんですが、

仲良くしてあげて下さいね。」

松陽先生はにつこつ笑いました。

「あ…兄上…！」

勝手に決めつけるのは…」

「文。」

松陽先生はジッと、その、『文』を見つめます。

「つ…」

「ただ一人の兄に、気など遣わなくていい。
頼りなさい。」

文は俯いたまま、唇を噛んでおりました。

「まあ文。この子たちに挨拶しなさい。」

「…………。」

「…名は吉田文。
年は一四だ…。」

松陽先生と一回り以上年が離れていたことにも驚きました。
文が名を言った後、松陽先生が私たちにも挨拶をするように目線を
向けています。

「あ…、えつと、坂田銀時
年は9。」

「桂小太郎だ。年は同じく9歳。
よひじくな。」

「…高杉晋助、8歳。」

「久坂玄雅です。年は10歳になります。
仲良くしましょうね。」

「俺は入江ハ一、10歳だ。
よろしくな！」

そこから私たちは仲良くなつていき、
彼女が相当な男勝りな女の子だと知ることになります。
剣術に長けており、私やハ一と十分にやり合えるほどでした。
それから色々お話したいのは山々なんですが……

これ以上話してしまうと、のろけになつてしまいそうなので。

「は？」

黙つて話を聞いていた山崎は、間の抜けた声を出した。

「そうですね…

あなたにも紹介しましょう。

文！こつちに来なさい！」

玄雅がいきなり大声を出した。

『はーい！ちょっと待つてねー』

すると奥の方から、女性の声が聞こえる。

「どうしたの？玄雅さん。」

すると扉がパツと開き、中から、背の高い灰色の長い髪をした女性が出てきた。

大層顔立ちが整っている。

「文、この方にご挨拶を。」

「？…は、はあ…。

私は久坂文。玄雅の妻です。」

文は、にっこりと笑つた。

…さつき話に聞いた仮頂面とは全く話が違つ。

「妻の……文さん？」

山崎は頭がこんがらがつて、なんだかよくわからない。

「まあそういうことです。

…ところで、少し疲れたでしょ。」

頭を整理する時間と、体力回復の時間を作りませんか？文に今までのことと、

これから話すことについての

説明の時間をいただきたいんですよ。」

「…はは。」山崎はよくわからなこまま返事をする。

「少し外に出て来ます。

山崎さん、少しうつくり休んでいてください。

…文、出ましょ。」

「え…ちゅ、玄雅さん！？」

玄雅は文の腕を掴み、強引に外に連れ出した。

…それから數十分後。

「山崎さん。」

「…お話は終わりましたか？」

玄雅と、先ほどとは一変して、神妙な面持ちの文が院内に戻つて來た。

「真選組の、山崎さん……だつたね。
文が山崎の前に座つた。

「は……はい……。」

「事情は全てわかつた。
次からは私が話そう。」

「え……」

「文の方が詳しいんです。
……あの時の事についてはね。」

「あの時……？」

そり。

兄上が、お亡くなりになられた時のお話だよ。

…全てが変わってしまった、あの日。

文の眼光の鋭さに、ただ息を呑むしかない山崎だつた。

To
be
con-
ti-
nu-
e
.
.

第一十一訓 親のありがたみがわかるのは大抵がちゃんとした大人になつてから

当時、幕府は攘夷を掲げる思想家を抑制するのに躍起になりました。

天人が襲來した初頭、

幕府は強気な姿勢を見せておりましたが、それからそう時間も経たないうちに幕府は開国を余儀無くされたんです。

…それだけ天人の力は強大だった。

そんな天人が地球上に増え、やがて江戸にターミナルを作る計画が上げられます。

それに伴つて、思想家や攘夷志士たちの動きが急激に激しくなつていつたんですよ。

そして攘夷戦争が始まり、戦乱の世が始まつてしまつたんです。

…そしてやはり、

松陽先生も、その思想家の一人だつた。

よく私たちに、

「江戸の美しい街と、この自然と、
武士の魂は絶対に失つてはいけない」
と言つておられたものです。

先生は若く、頭もよく、強かつた。

他の思想家や攘夷志士が教えを乞いにくることも少なくはなかつた
んですよ。

松陽先生はどんな人でも受け入れた。

…そんな先生は、

幕府に目を付けられてしまつたんです。

先生がお亡くなりになる少し前から、

私たちは子供ながらに感じ取つてありました。

…先生が攘夷に関わり、

その身が危険に晒されてあることを。

攘夷戦争が激しくなつてきたこともあり、
ずっと緊張感が漂つていて、

なんともそわそわした状態が続いておつたのです。

…やして、ついにその日が来てしまったんですね。

彼らには…
いや、私たちには兄上が、松陽先生が全てだったのさ。
兄上がお亡くなりになつたあの日…

あれほど悲しみと怒りに
満ち溢れていた日は
それまでにも、

わつとこれがひめ満こだらつよ。

*
*
*

私たちが出会つてから、
約4年が経つていた。

14歳だった私は18歳になつて、
銀時は12歳になつていた。

…そして、あの日の夜。
あの日は、
いつも増して静かな夜だつたな…。

「銀時……まだ起きてたの？」

「お前」

「兄上にやられたるよ」

「……お前」

私は銀時に冷たく返事をされて、
少しイラついた。
……まあいつものことだったけど。

「あんたねえ、

子どものクセに夜更かししてんじやないよ。」

「……ああわかったわかった

私たちは教室の廊下にある縁側にいた。
縁側は丁度兄上の部屋の前だったんだ。

何故かその夜は眠れなくて、
私も銀時もすでに眠る時間だというのに
まだ少しも眠くはなかつた。

「胸がざわつくんだ…。

眠れねえんだよ、どうしても。」

「…ああ。

私も…眠れない。」

銀時はどうも、年下に見えなかつた。
6歳も離れているくせに、
すごく大人びていたと思う。

「…」

私たち2人とも、ずっと何も喋らなかつた。

……しかし。

「おい文…」

「なんだ?」

「人の気配が…たくさん…」

「え…」

「文…銀時…」

兄上が突然部屋から飛び出してきた。

「先生！」
「兄上！」

この時は胸がざわついて、
不安で不安で仕方がなかつたな……。

「……大変なことになりそうです。
……まさかここまで早く現れるとは……」

私でさえ兄上のここまで追い詰められた顔を見たのは初めてだつた。

「どうしたつてんだ先生……」

「銀時、これはあなたの教本です。
そしてこれは文の教本。
そして……この手紙……
これは文……あなたに任せよう……。

「これがあなたに託す時が来てしまつたようですが。」

兄上は私に『手紙』を押し付けた。

「そ……そんな兄上……」

「なんだよ……どうしたってんだ！」

「静かにしなさい。

銀時、お前なら気配を感じ取つていいでしょ？

……裏口へ、行きなさい。」

この時は、私にでもわかつた。

異様な空氣感。

……人間的な感覚がほとんど感じられない。

「先生…あなた…」

死ぬつもりか？

「死ぬつもりなんてありませんよ。
私は最後まで戦います。」

兄上は銀時の心を読んだかのように言った。

「最後までつて…」

この時、はつきり言ってあまり状況把握ができていなかった。しかし、何故か危険だということだけは理解できた。

「文…、あなたには、言いましたね。

先日伝えた私の言葉…覚えてますか？」

「覚えてるよ…でも…兄上…」

「文。」

「…」

「あなたに任せました。」

「…」

「……ちよつと嫌だ兄……」

「銀時。」

兄上は、私の言葉を遮るように銀時に話しかけた。

「……なんだ」

あの銀時が、冷や汗をだらだらとかいている。

「これからも、小太郎や晋助たちと仲良くなれる」と。
毎日ちやんと食べる」と。

そして、何としても生める」と。

「……せんせ……」

「この剣の使い道を決めるのは、銀時、君です。
これはあなたのものですからね。」

兄上は自分の部屋から刀を取り出し、
銀時に渡した。

「これは、殺める」とも傷つけることも、護ることもできる。

……銀時。何が何でも、生きるのですよ。」

「せんせい……」

「早く！行きなさい……！」

気配は私にでもわかるくらいに近づいていた。

「せ……先生も一緒に行くんだ！」
「……やうだよ兄上……！」

「私は絶対に君たちとは行けないんです。
絶対に……」。

早く……早く行きなさい……

「それなら俺も戦う!」

「あなた達の叶ひやうな相手ではありません!…
言つことを聞きたさい!…」

兄上は、これまでにないほどの剣幕で叫んでた。

そして焦燥感と絶望感、哀愁感……
いろんなものがじりや混ぜになつて、
涙がこみ上げてくる。
私も銀時も、だ。

「また…会えるだろ…？」

…兄上はただ、にっこりと微笑んだ。

「…つ

その笑みを私たちは肯定だと無理やり受け止め、兄上を見つめながら、裏口へ向かった。

そしてそれが、

吉田松陽の最後の姿だったのです。

「うあ……ぜ……銀時……」

「泣くな文つ……」

お前ほんとに18歳かよ……！」

泣きたいのはこひつだ、と言わんばかりに12歳の銀時に攻め立てられる。

「「めん…」

「……………じつすれぱい…」

「銀時…」

「…先生を…先生を死なせる説にはいかねえ」

「ジラと晉助を呼ぼう!」

2人なら強いじゃないか!

あ…玄雅とハ二の家も通るから2人も呼べば…

「6人いりやあ何とかなるか…?」

「行くぞ文…!」

そう言つて私たちは走り出した。

ただ、無言で走った。

私も銀時も自分の無力さに悔しくて仕方がなかった。

…もっと、強かつたら。

あそこに残つて、

松陽先生と共に戦い、護ることができたかもしない。

とにかくその時は必死で走った。

… その時村塾がどうなっているのかも知らずにな。

To
be
c
o
n
t
i
n
u
e
·
·
·

第一十二訓 卒業式にて眞を撮るなら普段から撮つとナ（前書き）

ジリと高杉はエスパーか！！

… とこひしき リリは受け付けません（え

）感想ありがといひやひこますへへ

第一一二三訓 卒業式にて眞を撮るなら普段から撮つとナ

運命の夜。

何も知らない桂小太郎は、
広い自室にいた。

「……。」

（先生…）

最近、ずっと緊張状態が続いていることはもちろん、その原因が何によるものか、彼にはよくわかつっていた。

…恐らく、松下村塾内で一番認知していただろう。

緊張状態になり始めてから、嫌な妄想ばかりが頭をよぎり、そのた
びに必死にかき消した。

（それは…みんなも一緒だわ）

銀時も、高杉も、たまにそんな素振りを見せていた。
桂はそれを見逃しはしなかつた。

しかし、そんな妄想がよぎつても、心のどこかしらでは『そんなことは有り得ない』と思つてゐるのも事実。

何故なら、あの偉大な男に限つて。

あの先生が、そんなことになるはずがないといつ確信が確かにある。

…桂は、彼にもらつた教本を眺めた。

（…先生に教えてもらつたことがすべてこれにある）

教本には使い込まれた跡がある。

少なくとも銀時や高杉よりは年季が入つてゐるはずだ。

（俺がこれをもらつたのは、確か…6年も前だつたか）

（考えてみると、俺は人生の半分をあそこで過ごしたんだな…。
まあ…まだまだ短い人生だが）

そんな年相応ではないことを考えつつ、桂は村塾での6年間のことを思い返していた。

あそこは、俺の居場所だ。

松陽先生がみんなの居場所なんだ……。

だから、だから…

どうか俺たちから松陽先生を取らないでくれ……

何故か、そんな風に思った。

(眠れねえ)

やはり、高杉少年も起きていた。
目が冴えて眠れない。

「先生…」

高杉は最近しばしば眠れないことがあった。
やはり、心配事があるせいだらうか。

「そんなこと、あるはず無いの！」

(先生、先生がいなくなつたら俺はまたひとりぼっちだ)

小さい頃から、養母父から高杉への扱いは未だ変わらない。
養父母はただただ、自分たちの実子を可愛がるばかりである。
自分がそんな状況になつても、実家は『戻つてこい』なんて言葉を
掛けてくれるはずも無く、寧ろ何の反応も見せず、見て見ぬ振りを
するばかりだ。

でも、村塾があつたから毎日が楽しかった。

親の愛情が無くとも、先生と仲間がいれば平氣だった。
いつしか、家の事も忘れられるほどにまでなった。

みんなの優しさが、身にしみて嬉しかった。

そんな境遇の高杉だからこそ、そこまで幸せに思えたのだ。

「先生は、負けないだろ？」

俺の居場所を、取らないでくれ……

そんな2人に残酷な宣告がなされるのは、そのすぐ後の話である。

to be continue . .

第一十四訓 親のありがたみがわかるのは大抵がちゃんとした大人になつてから

なんか整理しきれなかつた感と無理矢理感があります…（＜—＞）
まだまだ修行が足りないですね…

これからも頑張りますつ

第一十四訓 親のありがたみがわかるのは大抵がちゃんとした大人になつてから

「ヅラー！…ヅラー！…」

私と銀時は桂邸の前にいた。

さすが桂家、と言わんばかりの門構えだ。

なんせ、由緒正しい御殿医の家系だからな。

その大きな扉をガンガンと2人で必死に叩く。
この広いお屋敷に声が行き渡るとは到底思えなかつたが、
その時の私たちはそんなことを考える余裕さえなかつた。

「ヅラー！桂ー早く出てきてよー！…
兄上があ…つ…」

：私たちは必死でヅラを呼んだ。

『ギイイイイ…』

そんな必死の思いが届いたのか、
その重厚な扉はゆっくりと開いた。

「なんだお前たちは！？
こんな夜遅くに何の用だ！！」
どうやら使用人の男らしい。

「[口]の息子の桂小太郎の友だちだ！
奴に会わせろ！…」

「何？

お前みたいなのが御子息の友人だと！？」
使用人の男は全く信用していない。

「バカ、お前じや駄目だ銀時。

…申し訳ありません。弟が無礼を働きまして。しかし、私共は本当に小太郎君の友人なのです。

私は松下村塾の吉田松陽の妹、文と申します。今緊急事態なのです。どうか、小太郎君にお会いできないでしょうか…？」

「あの吉田先生の！
わかつた、すぐに連れてこよう。」

男は納得し、屋敷の中へ消えていった。

「…あんな堅つ苦つゝ言葉どひで覚えたんだ」

「黙りな。」

今はそんなことを行つてゐる場合ぢやなかつた。

やがて、ヅラが屋敷から駆け足で出てきた。

「ジラ...」

「ジラじゃない桂だ！」

ジラは起きてすぐなのか、髪をおろしていた。

「松陽先生が...危ないんだ...！」

「は...?」

私たちはずつくりと状況を説明した。

「きっと、幕府の連中だ...！」

松陽先生は...何も悪いことなんぞしてねえの...!...!

「銀時...ジラ...泣いてる暇なんか無いんだ...早く行くぞ...!...」

「さつあまでベー、ベー泣いてたお前が言つた...」

「行...」

私たちは晋助、玄雅、ハ二の家にも押しかけ、
すぐに村塾へ走った。

「先生……」

「松陽先生……！」

一番焦っていたのは晋助だった。

「泣くな…」

「うつせえーー！」

「…ーー！」

突然玄雅が、ビクリと体を振るわせた。

「どうした玄雅！？」

私が叫ぶように聞くと…

「火の…」

火の匂いが…します！」

「……」

全員の頭に悪い想像だけがよぎつた。

「あつち…光つてゐる…」

ハ一が息切れ切れになりながら声を上げる。

見ると、村塾の方向が妙に明るかつた。

「……つ」

「あつ…銀時…」

銀時が、有り得ないくらいの速さで駆け出した。

銀時は私たしかりひどく遅れかつてござ。

「はあ……ああ……ああ……」

「はや書類も出なさい。

それはまるで怒り狂う獣のようだった。

「先生」

まるで空に吸い込まれているかのよう立てる。

炎は轟々と、音を立てて、

備達の場所か家か

「…………。」

私たちがそこに着いても、誰も何も言わなかつた。
といふか、言えなかつた。

子どもだった私たちには衝撃が強すぎたんだ。

……ただ、地面にへたつて涙を流すだけ。

村塾が燃え尽きるまで、まるで時間が止まつたみたいに何も起こらない、喋らない。

絶望感に、せつなまれるだけだった。

*
*
*

「…………。」

山崎は、言葉が出なかつた。

「そのちよつと後で先生は幕府の連中に殺されたことを知りました。火を放つたのも同じ連中だ。どうも書物と自分たちの痕跡を残したくなかつたようですね。」

「その後、私は玄雅さんの家に20歳になるまで居候させてもらつたの。

ただ銀時は……一人きりで生活していた。桂家から誘いはあつたんだけど、あいつ断つたのさ。

ジラはジラで昔っから真面目で勤勉だったけど、それからは人が狂つたように剣術の修行をし始めた。

晋助もジラとそう大差なかつたね。みんな、目の色が変わつたんだ。

それは恐ろしかつた……。」

文は無表情で言つが、その瞳の奥は悲しみに満ち溢れていた。

「それから6年が経つたある日、攘夷戦争での攘夷軍が萩を通って、
萩で休んでおつたことがあるんです。
そこで私たちはある男に出会った。」

「……まさかそれが貿易会社の社長の……」
山崎はすぐに察した。

「ええ、そう。
彼と出会った」と私たちは攘夷戦争に参加することになったんですよ。」

(伯仲の一神…龍虎…)

坂本との出会い。

それは山崎の想像を遥かに超えるほど、運命的なものだったのである。

To be continue . . .

第一十四訓 親のありがたみがわかるのは大抵がちゃんとした大人になつてから

次はまた場面変わります。

話が停滞気味で申し訳ありません（：「—：）
これからどんどん進んでいけると思います。

第一十五訓 性格を見た田で判断するな（前書き）

放置しきれて本当に

申し訳ありません（：—：）

事情があり、

更新が難しい状況ですが、

できる限り続けていくつもりです。

たくさんのお気に入り登録、
本当にありがとうございます！

これからも精進致しますので、
どうぞよろしくお願いします。

では本編へまいりやー。

第一十五訓 性格を見た田で判断するな

一方、京では :

「それからわしとおまんが出会ったのは……確かにおまんが17、わしが19の時やつたが。」

「…忘れたな」

未だに坂本と高杉、といつ何とも異様な組み合せが酒を飲み交わしていた。

「いや確かにそうじや。あの時はまつこと驚いたき、よう覚えとる。おまんらの田と、闘争心にわしゃ大層興味を持ったんじや。」

坂本は少し火照った顔でにこりと笑う。

「……。」

一方高杉は顔色すら崩さない。

「まだまだ若かったが、目だけは違ったわ。一言で言えば恐ろしかった……といったところかのう。」

「……あの時の俺たちはとにかく復讐^{むくしゆ}する」としか頭になかったのさ」
高杉は微かに笑う。

無表情とも取れるほどに微かな笑みだ。

「あの時の出会いは
まつここと衝撃だったのー。」

（まるで、恐ろしい獣のような、あの田…）

わずか、16、7歳の子どもの田には見えなかつたことをよく覚えていた。

坂本と彼らの出会い。

(今から、10年も前になるんか)

「おー、ヅラあ」

「ヅラじゃない桂だ

松陽先生が亡くなつて、はや6年が経とつしていた。

暑さが厳しい夏。

蝉がうるさいくらいに鳴いている。

銀時と桂は腰に木刀を差し、

松下村塾の門に腰掛けていた。

無論、松下村塾は片付けられることもなく、灰と炭の山である。

「おめえ、知つてゐるか？今日、来るらしいぜ」

「…？」

「攘夷軍、だろ」

「…」

声のした方を振り向くと、高杉がいた。

「お前もその話を聞いたのかよ、低杉」

「殺されてえのか天パ」

この会話は銀時と高杉お決まりの挨拶のようになつてきていた。

「虚しい挨拶だ。」

「二人ともやめる、背が低いのも天パも個性だ！」

「背が低くないでめーに何がわかる」

「天パじやないでめーに何がわかる」

ほぼ同時だった。

「空氣読めやジラア
てめーの骨削つてやるつかあ、あん！？」

「そのサラサラヘアー、ヘアアイロンでくるくるにしてやるつかあ
、あん！？」

何だかんだ息ぴつたりな2人である。

「フフ、武士たるもの、僻んでどうする。貴様らもまだまだ半人前
だな、ばっかじやねーの（笑）」

何かが切れたような音が2つ。

「心」が「心」で「心」で「心」で「心」

ぶつ飛ばされた。

「ちょっとシリアルに始まつたじやんかつ」——「じやんつて思つた矢先がこれだよ死ねよ」

「話戻すぞ銀時」

「待てお願いだから俺も仲間に入れてくれ
そのくらい俺だって知ってる」

桂は何事もなかつたかのように立ち上がつた。

「今もう近くまで来てるみてーだな

「聞くとこによると、一日萩で休暇を取つてからまた戦地に出向
くらしい」

「あの〜、すみません!」

「〜〜〜」

いきなり聞こえた声。

3人は同時に振り向いた。

(全く気配がしなかつたぞ…)

「おまんざりあ、じいじいらに住んどるもんかえ?」

その男は、コテコテの土佐訛りであった。深めに傘を被つた、大柄
な男だ。

歳は相当若く見えた。成人しているかしていないか、といったところか。

長刀を一本帯刀している所を見ると、正規の侍ではないらしい。

「そうだが……」

桂が怪訝な顔をして答える。

「ちいと道に迷つてしまつたんじゃ、萩ゆう村はどうにあるがか?」

「……」

3人は突拍子もない質問に一瞬ポカンとしてしまつた。

「ん?この辺じゅう?萩ゆう村は。おまんら知らんのか?」
そう言って屈託のない笑顔を見せた。

「知つてるもなにも……ちいは萩だぜ」
高杉が呆れたように囁いた。

「え?今じいが萩?」

「そうだ。」

「…なんじゃーそうゆう」とやつたがか！アッハツハツハ！先に着いてしもつた！アッハツハ

なんだよこいつ。

：と3人が同時に思った。

「すまないが、お前はいつたい誰だ？」

3人共がずつと思っていたことを、桂がやつと質問した。

「風貌見てわからんがか？わしや攘夷志士じや。前の戦場いくさばで軍隊と
はぐれてしまつてのー、一人で萩まで来たんじや。」

（（（攘夷志士…！）））

3人は憧れさえ抱いていたその響きに、ゴクリと息を呑む。

「ちいと暴れすぎて周りが見えんかったみたいじゃな。アッハツハ
！」

「あなた名は？」

男の愉快な笑い声とは裏腹に、高杉が冷たく彼を睨んだ。

「ん？…坂本辰馬…つちゅうもんじやが。」

「口コ、と笑い返す坂本。

「攘夷志士つづたな」

「ああ。」

「歳は？」

「18。…おまんらはこくひじや？」

「俺は16。後ろの1つ等は17だ。」

「ほー。わしと変わらんじやないか。おまんら、わしも駄乗つたんじや、名を教えてくれんかのー」

「高杉晋助。」

「桂小太郎だ。」

「坂田銀時。」

3人は順々に答えた。

「そうか！良い名じや！よろしく！」
「…何をよろしくするのか分からないうが、3人の彼に対する警戒心が
少し弱まる。

「ところで…攘夷志士ってさ、強いんだろ？」
すると高杉が自分の腰にさしていた木刀に手をかける。

「！」

坂本はただただきょとんとしている。

「お前と勝負がしたい。」

「…ん？」

唐突な高杉からの挑戦に、坂本は戸惑いを隠せない。

「おいヅラ、それを奴に貸せ。」

高杉は桂の腰にささつている木刀を指差した。

「ヅラじゃない桂だ。…お前喧嘩をする気が？お前の悪い所は喧嘩
つ早いところだぞ！」

桂はあるでお母さんみたいに小言を垂つた。

「うつせえ！わつと貸しやがれ！それに喧嘩じやねえよ、お前ら
だつて攘夷志士がどんなもんか知りてえだらうが」

「攘夷志士にだつて色んな人がいるんだ。…」の男がどうであつ
がわからん。しかも出会つていきなり手合わせを願うなど無礼…」

「いんや。」

「…」

桂の小言を遮つたのは、言わんでもなく坂本だつた。

「晋助、言つたのう。…こいぜよ。一本勝負じや！」

坂本は相変わらず一ノ一ノと笑つてゐる。

「やう」なくつちやな…」

高杉は桂から木刀を奪い取り、坂本に渡した。

「まつたく……」

桂は呆れた様子でハア、とため息を吐く。

「……。」

一方銀時は先ほどから押し黙つたままだ。ジッと様子を伺つてゐる。

「早速始めようぢやねえか。」

高杉と坂本は互いに木刀を向けた。

緊迫した空気が張り詰める。

そして……

ザツ――！

先手を打つたのは高杉だった。

バチイイツ――！

木が激しくぶつかり合う鈍い音。

お互いに思つた。

((た だ 着 じ ゃ な い))

ガキッ！

八
升

ハチイイツ！！

田にも止まらぬスピードで繰り出される剣戟。

(…マジで…強えー!)

がたいの良さからして強そうだとは思ったが、実際は高杉の予想を遙かに越えていた。

(田中異常じやつたが… こいつあ劍の腕も異常じやな)

坂本も同様に予想以上だつたらしい。

(そろそろ決着をつけんと)

(バテてきやがるな)

(（）の一撃で…決める…）

ガキイイインッ！－！－！

2人の渾身の一撃は、お互いの木刀を宙に回せた。：バキッという
嫌な音と共に。

「あああああ！－！何をしてくれるんだ貴様らああ！－！俺の木刀！－！
桂が2人を怒鳴りつける。

「あーあ、折っちゃつたー。」
銀時が冷やかすように呟いた。

隣の草むらには、無惨に折れてしまった木刀が2つ。

「おー…、すまんの一、ヅラ。」

「ヅラじゃない桂だ！てか貴様初対面でヅラとか言つ？（泣）」

「わりー、お前金持ちだからすぐ買えんだろ」

高杉は全く悪気もなく言った。

「貴様に言われたくないわ！」

「ぶふつ……アツハツハツハ！アツハツハツハツハツハツハ！」

「！？」

いきなり爆笑しだした坂本に3人は驚いた。

「おまん、まつこと強いの一。まるで獣のよつせよ。
「お前も正直予想以上だったぜ」

(面白いの一、この3人)

坂本は今まで何処の誰が見ても自分の剣戟を驚かない者はなかつた。性格上、自尊心などというものはさほど持ち合わせてはいながら、ある程度の自信はあつたし、自らの強さも自負していた。

しかし、この3人は自分の剣戟を見て、顔色一つ変えやしない。

坂本が推測するには、それだけ彼らが強いということ。実際高杉の強さは体感したわけであるから、あとの2人の強さも想像に難くなかった。

「そこ」の2人はどうなんじや？強いんか？

坂本はあえて銀時と桂に問うた。

「俺が3人の中で一番強い
すかさず銀時が言つ。

「はあ！？俺だろ馬鹿」

そしてすかさず高杉が反論する。

「何を言つてゐる。剣の強さの程度など、余程大きな差が無い限りは一概に言えるものではないだろつ。口に口に調子や氣分で変わるものであつて……」

「ジラあ、お前の魂胆は見え見えなんだよ！大人ぶりやがつて、そうやつて一番強い大人なキヤラになるとでも思つてんですかコノヤロー！」

銀時が桂の言葉を遮つた。

「そうだ！一番強いのは俺だから！」

高杉も必死である。

「アツハツハツハツハ！やはりおまんらあ、おもろいのー！」

「「「！」」」

もう3人は坂本の存在も忘れてしまつほどに必死で、急に喋り出した坂本に少し驚いているらしい。

「恐ろしい目になつたち思つちよつたら、いきなり子どものような

「田に立なる」

「」の言葉に3人とも、やまとんと目を丸くする。

「おまんらの事は忘れんき、おまんらもわしの事、覚えとつてくれ。
そろそろ仲間が萩に到着する頃合じや。またいつか会えるといいの
一。」

坂本は軽く3人に手を降り、歩き出した。

坂本は、どんどん遠ざかっていく。

（（（……。）））

しかし、坂本が遠ざかれば遠ざかるほど、3人の胸はざわざわとし
た焦燥感のようなものに支配されていく。

何故だか、何となくはわかつた。

今が、自らの待ち焦がれていた時なのだと。

「待て坂本！」

：最初に叫んだのは銀時だった。

「俺たちも一緒に行く！！」

「共に戦わってくれ！」

その瞬間、彼らの胸にあった焦燥感のようなものは、スッと消えていった。

「……何じやと？」

坂本はただ驚いている。

「だから…俺たちも一緒に行く…」

高杉が目一杯に叫んだ。

「お前のような奴がいる攘夷軍なら…俺たちも共に戦いたい…」
桂も同様に叫んだ。

「おまんら、やはり面白いの一。しかし…」

そつにかけた坂本の表情が急に無機質になつた。

「攘夷戦争は、軽い気持ちで入れるような戦争じゃなこり、相当な
覚悟じやないと無理ぜよ。しかも攘夷軍側に付くんならなおむりじ
や。…おまんら、今の青春全部潰す覚悟はできとるんか？」

「青春なんぞ、とつぐの昔に捨てちまつたぜ。…俺たちは…戦わな
やならないねえ。」

銀時の目が、ギラリと光る。

「まだ子どもだと云うことも分かっている。たが俺たちには戦わねばならん理由がある。」

桂も銀時とさして変わらない様子だ。

「先生の…先生のために…」
もちろん高杉も同様である。

坂本から見た3人の目は、一端の大人…いや、そんな簡単な物ではなく…

（何かを秘めた…）

この時の坂本には何かはわからなかつたが。

（……。）

おかしな気分になった。
しかし、その気分に決意させられる。

…連れて行くべきだと想ってしまったのだ。

「わかった。…おまんら、わしひついて来い

運命の、瞬間だった。

To be continue . . .

第一十六訓 言い訳だつて一応理由（前書き）

だらだらと話が続いてしまい、申し訳ないです……
次話からまた新たに物語が動き出します！

第一十六訓 言い訳だつて一応理由

「そして私とハ一は、銀時とヅラと晋助に誘われ、攘夷戦争に参加することになりました」

久坂は少し遠くを見据えているような面持ちだった。

「坂本辰馬がきつかけだつたんですね…」

山崎はかなり体力も回復したようで、ベッドに腰掛けている。

「私は反対したんだよ。私には復讐のためにあいつらが戦争に行くような気がしてならなかつたのさ…。でも、あいつら…一步も引かなかつた」

文はただ悲しそうに笑う。

「やはり私もハ一も、松陽先生を殺した幕府を恨んでおりました…。そして、なおさらあの3人はその気持ちが強かつたように思います。山崎の田には、久坂が激しく後悔しているようにも見えた。

「…結局は…復讐行為だったと？」

山崎は先ほどより心が重くなつた。

「今思えば、そうでしょくな。私たちはたつた一人のかけがえのない師を殺され、何も出来ない自らにもどかしさを覚える日々を送つておりましたから」

「私から見れば玄雅さんも、ハ一も、銀時たち3人について行つた風だった。私はあいつらに何故戦争に行くのか聞いたしましたよ。攘夷戦争に攘夷軍側で参加するなんて命を捨てるようなもんだからね」

久坂も文も、ただつらつらと昔を語る。しかしそこに見え隠れする哀愁漂う表情から、その過去の重さを思わずにはいられなくなるのだ。

「銀時の奴…私にね、志を…仲間を…護るためだつて言つたんだ

「戦争に行くのに…ですか？」

「そうひ。戦争に行くつてことは、殺すことだ。でも、銀時はきっと、本当に誰も死なせたくないなかつたんだと思う。それでもやつぱり殺すことに変わりはないのに…私も若かつたんだ。5人を止めることができなかつた」

「言い訳するつもりはありません。ただ私たちは…武士を…侍を、殺したくなかったんです。先生の教えでした…。侍の魂を失つてはいけない。護らなくてはならない。あの頃の私たちは、それを殺し合いでよつて体現する」としかできなかつたのです」

「…そうですか…」

山崎には何も言えなかつた。

「まあ、あまり暗い話ばかりでは疲れますし。すみませんね、辛氣くさい話ばかりして」

先ほどとは一転して久坂は、ははつと笑つて白い歯を見せる。

「あいつら、面白いんだよ。個性的、つていうか文も二三つと微笑む。

「まあそれは…俺も重々承知しますけど」

（あれは面白いとか個性的なんて言葉で片付けられるもんじゃないと思うけどなあ）

山崎は苦笑した。

「あいつらと一緒にいると、本当に楽しかった。みんなすぐ仲が

良かつたんだよ。…懐かしいなあ」

「なんですか」

(本当に乐しかったんだな…。文さん、顔が輝いてる)

「戦争中、彼らは余りの強さに周りから避けられておりましたが…
実際は良い奴ばかりなんですよ。それは私とハーベーが一番よくわかつ
ております」

「くえ…」

この夫婦の、武神四侍としてではなく、純粹な知己として彼らを想
う気持ちが身に滲みて伝わってくる。

「… ですか」

「……」

「彼らを悪によいにはせんでもやつてトセ。山崎さん」
少し鋭く、また哀愁を帯びたよつた久坂の視線。

「… されば、局長と副長が決める」とすから
山崎も同じよつて見つめ返した。

「セリですか」

「いつの同僚も副長も、まあ、多少…いや異常にクセがありまわな
ど、良い人です、基本的には、
山崎の、本音である。

「セリですか」

先ほどとは違ひ、瓶のトーンであるよつて思えた。

「じゃあ、なんなりお黙れせてもいいこあります。体調もすっかりよくな
りました」
セリ直ちに山崎は立ち上がった。

「ええ。わづらも止んだよつてです。道中気をつかってくださいね」
久坂は一回つと笑う。

「本部に…本部にあつがといひました。あの、田那にまつのい
と…」

「ええ、言わなくとも結構です。それに、銀時のいる場所も教えて
頂かなくて結構ですよ。」

久坂は、やはり鋭い男だった。

「久坂さん…」

山崎は申し訳なさそうな表情だ。

（長い間お互に生死も分からなかつた友人が生きていることがわかつて、自分が生きている事を知らせて欲しくないはずがないのに…）

「監察の仕事ですかね。」

監察とは本来、味方であろうと欺き、秘密裏に諜報を行うものである。

今、この場合は仕方がないのかもしれないが、山崎はあらうことか正体をばらし、諜報内容まで明かしてしまつた。

それを、銀時本人に聞かれる事は、何があつてもならない。

別に久坂や文を信じていないのではないか、念には念を、監察として、銀時の居場所を教える訳にはいかなかつた。

そして、玄関先。

「では、ありがとうございました」

山崎は深々と頭を下げる。

「ええ、また、会えるといいですね、山崎さん」

「安心しなよ、情報とか、漏らすような事はしないからさ」

久坂と文は微笑んで、山崎を見送った。

「はい。失礼します」

山崎は血の判断で、屯所に戻ることに決めた。

(ここまで情報が手に入れば、十分すぎるくらいだ)

「あつ」

山崎は、ポケットに手を突っ込む。

「録音したままだつたよ…」

録音機をオフにして、もつたいなかつたなあ、と独り言ちた。

(ああ…土方副長にじつひびくじやされるだらうなあ)

諜報内容に正体がバレるなど、監察としての失態も甚だしいのだ。
仕方ないとは言え、ボツ「ボコ」にされる。

そんな恐怖に怯えつつ、病み上がりなせいが、土方のせいからは分からぬいが、重い足取りで真選組屯所へと歩を進めた。

to be continue . .

第一一十七訓 むすびに頼つむすびに手を差し伸べるのが本当の友だちと誰かさへ

「のう、高杉」

京の、居酒屋。

坂本辰馬と高杉晋助は飽きる事なく酒を飲み続けた。
延々と坂本が喋り、高杉が軽く頷く。

……そんなやり取りが続いていた。

2人とも丁度酒が回ってきたところであり、気分がすこぶる良かつた。

「ああ」

やはり高杉は無愛想な男である。

「銀時はあん頃……」

“あん頃”とは、坂本と3人が出会い、攘夷戦争へ参加しだした頃である。

「……。」

「あん頃、ほんに戦争をしたかったんやううか」

坂本の口は、サングラスでよく見えない。

「……。」

高杉の表情が微かに動いた気がした。

「銀時はほんまは、ほんまのほんまに、仲間を守る為だけに戦争に参加したんやないんかと、今になつて思つんは、ワシだけか？」少し、笑つた。

「……お前は、何も考えていないよう見えて、えらく鋭い」高杉が、つらつらと喋り出した。

「……褒めても何も出ないぜよーーアッハッハ」坂本はいつもの調子で笑つ。

「褒めてねえよバカ本」

この時なんと高杉の表情が、ビニカ緩んでいたのが見えた。

「褒めてるぜよ。高杉がからかおうとする時は普段より更に素直じゃない時ぶほええつ……！」

ガツシャーン！といふ音と共に、坂本の額が高杉によつてカウンターに打ちつけられる。

「……そういう奴が、俺は嫌いだ」

あの高杉が、よく喋つた。

「高杉？」

若干涙目になりながら、坂本は訝しそうに高杉を見た。

「お前らはみんな、そつだつた」

高杉は酒を飲み干した。

「お前ら、言つんは……」

「俺は曲げねえ。いや、曲げられねえ」

坂本の言葉を、遮った。

「……。」

「特に銀時……あれは理解できねえ。ただ、俺の目的に反しているのは分かる。そして奴は俺にとつて恥まわしい過去でしかねえ。だから消す」

酒が回つているからだろ？

（昔のよう）、よつ喋るのう。内容はともかく

「おまんは、真つ直ぐ過ぎるぜよ。しかも一人で突っ走る癖があるきいな。ま、わしも人のこと言つてられんが……。目的は時に人を盲目にするつちゅうもんじや」

一瞬、坂本の表情が曇つたのを、高杉は見逃さなかった。

「……ひょっと待て辰馬」

「ん？」

「お前まさか、まだ探してやがんのかあ……？」

稀に見る、高杉の切迫感のある表情である。

「……まあ、諦められる訳はないぜよ」

(二)
(二)
(二)

「こんなに悲しそうに笑うことができる男だつたらうか。

「ククッ……思えば……お前も俺と同じ人種だったなあ」

「ま、同じ人種同士もつと酒を飲む……うん、これに限るぜよ。」

「意味のわからねえことをほざくな馬鹿」

2人とも、それからは特に込み入った話をするでもなく、また酒を飲み続けた。

(いじてことあるとまた来たよつて思ふやうのや)

まだ探しているのか、と、
やつ高杉は言った。

(自分を騙し、探し続けるわしと、自分を重ねるとはずいぶん滑稽
とこつもんぜよ)

2人は明け方まで飲んだくれ、高杉は、じゃあな、と寝こけている
坂本に一言残して足早に去つて行つたといつ。

To
be
con-
tinued
.

第一十八訓 遅いんじゃない、マイペースです（前書き）

更新が遅くて申し訳ありません…
それにも関わらず、

こんなに多くのお気に入り登録
本当にありがとうございます！
もっと文章力・構成力を
上げられるように努力します（^_^）

話は陸奥・銀時・桂 *side* に戻ります。
桂と坂本のお話です。

第一十八訓 遅いんじゃない、マイペースです

時間は少しだけ遅り、坂本と高杉が話し込んでいた頃。

陸奥と銀時と桂は桂の隠れ家にいた。

「頭の父親が亡くなつたんは、頭が二十歳の頃じやつたな」
そう呟くよつに言つて、陸奥は静かに目を閉じた。

「俺たちが19の時か
銀時は無表情だつた。

「ああ

その時、さう短く返事をした桂の瞳が微かに揺れたのを銀時は見逃さなかつた。

「…………」

(辰馬の親父が死んだ時……辰馬は普段と何一つ変わらねえ素振りだつたが。あの時ヅラと辰馬が一緒にいることが多かつたように思うのは氣のせいじゃねえはずだ)

当時はやせబ氣にしていなかつた事を、銀時は思つた。

「それから一年後、頭は土佐に戻つてきたわけじゃが

陸奥は静かに目を開く。

「そん時、わしらが住んどつた町は消えておつた」

「「「...」」

途端、銀時は眉間にシワを寄せ、少しだけ目を見開いた。

一方、桂は

「...あの時土佐で起つていた戦か...?」

歯をぎりしつゝと歯み締め、額に汗を滲ませてゐる。

「おまん、知つちよるんか
あくまでも陸奥は冷静である。

「まさか本郷……長馬の故郷で……」

「……？」

銀時は声を荒げる桂を訝しむように見た。

「せうじや。桂は少し知つてゐるよ、うじやな

「今更俺たちにそれを話してどうする

「セーじやが

陸奥は少し眉をしかめた。

「おまんら、桂に姉がいるのを知つちよるか

「そりやあ、知ってるけどよ…。それが何だってんだ」
銀時はただ困惑している風である。

「率直に云つと、今、頭の姉は行方不明せよ」

「まさかその戦で…!」

桂の顔が更に歪んだ。

「ああ」

陸奥はただ遠い田をするのみである。

「ちょっと待て、俺が分かるように説明しろ俺だけハブにしないで」

至極真面目な表情をした銀時が桂と陸奥の間に割り込んだ。

「お前も土佐で戦があったのを知つていただろ。覚えておらんのか」

桂がはあ、とため息を吐いて、

「あの田…。あれは大きな戦を翌日に控えていた時だ…」

「…そんな日、いくらでもあつただろが」

銀時はまだ思い出せないらしい。

桂はあの時の事を思い出す。
何故だか鮮明に覚えている、あの夜のことを。

「…星が、綺麗な夜だった

ふらふらっと、陣営になつてゐる寺から抜け出した。

明るい夜だった。

(少し酒を飲み過ぎた…。俺としたことが)

明日は天人軍との戦になる可能性が非常に高かつた。
見込み通りなら、明日の昼頃には味方の攘夷軍の3倍の兵にもなる
天人軍との戦になるだろつ。

皆、最後の晩餐とでも云つようにて宴会で馬鹿騒ぎしている。

(俺は奴らが生きている限り…死ねない。絶対に、死なん)

彼らの“師”が既にいなくなつていたこの時、そう桂が思ったのは、
道理なのかもしれない。

「お、ヅラか?」

突然、背後から聞き慣れた声がした。

「ジラじやない桂だ、辰馬」

振り返るまでもなく、誰なのか分かつた。

「お前は宴会に出でおかなくていいのか？」

「えいや、ちよことなあ……ちうこつ販分じやなこつちゅつか」

坂本は珍しへ、販売員の顔によじらでこる。

「どうした？ 宴会大好きなお前が」

「よしー・ジラ、驚かんで聞こちよくれ。おまんこにひい」と決めた

坂本は眉じりを垂れて笑う。

「？」

桂は何のことかと、眉をしかめた。

「わいわい、父上が亡くなつた姉上から手紙が来よつたぜよ」

「……」

事も無げに告げる坂本を、驚きと困惑の混じつた表情で桂は見つめ

た。

「父上は近頃病で弱つちよつたからな…。覚悟はしつたが、なか
なか辛いもんじや」

パツと、坂本が背を向けて空を仰いだから、桂にその表情は見えな
かつた。

「今すぐ、帰れ…！」

「帰れるワケが無いぜよ。分かつとるじやろ、ヅラも
坂本の声色が、今まで聞いたことがないほどに寂しさを帶びてている
気がした。

「いや帰れー今すぐ土佐に帰れー……い、いや、ちよつと待て…土
佐…は今、」

「ああ戦場になつとるらじいな」

坂本がそう言つて振り向いた時、彼は弱く笑つていた。

「…！そんな顔をするな！親が死んでそんな顔をする奴は嫌いだ
！お前は馬鹿か！？」

桂はいつもの冷静さを失い、ものすごい剣幕で坂本をまくし立てた。

(ああ…やつじゅつた)

ふと、桂も母と姉を若くして亡くしていた事を思い出す。

「わしは、勘当されたも同然でこんなところまで来たんじや。それに、情報によればわしの故郷の町とは外れたところに戦が起きていると聞く。心配はいらん。それに文には帰つて来るなち、書いてあつたぜよ」

桂に諫められ、笑顔は引っ込んだ。

声音は全く変わらなかつたが。

「そんな情報あてになるわけがなかつ…。勘当されたやら向やらは知らんが、親だらう…? 貴様の姉上も土佐におられるのだらう…? 桂は、母や姉が亡くなつたあの悲しみを思い出していた。

…心が締め付けられるよつに痛かつた。

「乙姉はそう簡単には死なん…なんせ、あの『一ひとつい姉様じや…死なん! わしは一生父上にも、乙姉にも余わんつもつで戦に出でいた。』『ん国を変えたいなんぞと偉そうな事を言つて來た…。』

乙姉とは、坂本の姉、乙子の事である。

「やつゆつ事やき、なんぢやあない
そしてやはり微かに笑う。

「辰馬…しかし」

桂は、ギリ、と奥歯を噛み締めた。

「それに…」

坂本は不意に大声を上げる。

「おまんらを残して1人土佐に帰ることなど、ゼーつたにできん！…」

そう言って、いつものように笑つてみせる彼は、弱くも、また強くも見えた。

「……。」

ただ黙つて、坂本を見つめた。

「わしがおまんにこんな事を話したんは、こうやって誰かに宣言したかったからじゃ。誰かには知つていて欲しかったからじゃ。まあ不幸にもおまんが選ばれてしまふたワケじやが」

やはり、冗談みたいに軽く言つてのける。

「いや…光榮だ。俺に話してくれて、ありがとう」

「こう言ってくれるこの心地よさが、坂本が桂に打ち明けた理由かも知れない。」

「わしも、おまんうが生きている限り、死ぬつもりはないぜよ」

1

この飄^{ひょう}軽^{うき}な男^はは、読心術でも習得しているのかと思つた。

「わしは、おまんらとは幼なじみでも何でもない、やつと知り合つて2年くらいの友人にはすぎん…しかし」

桂は、この町にはいくつもの笑い顔があるのだらうかと不思議になつた。

彼は、優しい、優しい笑いを浮かべていた。

「何故じやうつなあ、わしもまるでおまんじと幼なじみやつたかの
ような気がしてならんぜよ。いや、幼なじみつちゅうか、兄弟みた
いなもんかにやあ」

そして一ヶと白い歯を見せた。

「…辰馬」

桂は困ったように笑う。

「それは俺たちとて同じだ。やつ想つてこるのは別にお前だけじゃない。勘違いするなよ」

「あつはつはーーおまんはー、まつこと優しいのーー！」

「ーー」

そう言つた坂本を見て桂はギョッとした。

何故つて…

坂本が爆笑しながら、ボロボロと涙をこぼしてゐるのだ。

坂本は桂の背中を思いつきりバンバン叩いた。

「あつはつはつはーーおまんは優しいーーおまんも無理はするなー銀時も暗助もなんぢやあないーもうこつぱしの任せよ

「い、つ痛い！痛いぞ辰馬ああーー！」

そう桂が叫ぶと、坂本はもう2、3回バシバシと叩いてから、やつと手を止めた。

「おまんはそのう、松陽先生じゃがないさ。おまんは桂小太郎じゃ！」

坂本は涙を拭いながら、また空を見上げる。

「桂じやないヅラだ！…あ、間違えた、桂小太郎だ！」
桂は腕を組んで、辰馬と同じように空を見上げる。

「あつはつはー…そうそう。桂小太郎じゃさ、無理はするな

「？」

坂本は依然として「一二一二」と笑うが、桂にはよくわからなかつた。

「松陽先生つちゅう御仁がどないな人やつたかがは知らん。しかし、ヅラが松陽先生の代わりをしようち無理しちゅうのは何との一分かる」

「…無理はしどらん」

この男、やはり侮れない。
何も考えていないようで何かしら考へてゐるのだ。

「しかも俺が先生の代わりになれるハズがなかつ」
なれるものなら、なりたい。
なりたくて、努力はしてゐるが。

「ん、まあそりゃが…とにかく無理はするなが、ゆうじじゅー。
難しいことは分からん…」

あつはつはつは！

と、豪快な笑い声は辺りに響き渡つた。

（……しかし、この髪だけは）

こりやつて伸ばし続けた長い髪は、確かに松陽先生のようになしたかつたためである。

松陽先生をいつ何時も忘れまいと云う願掛けのようなものだった。

確かに銀時と高杉は攘夷戦争のストレスからか、荒れていた。たまにハつ当たりもされたが、それも受け止めた。でも自分は松陽先生ではない。

心のどこかで、松陽先生に会いたがつてゐる、縋りたいと思つてゐる自分もいる。

まだまだ、彼らは20歳にも満たない青年だった。

桂は、3人の中でただ1人、家族の温かみを知つていた。
だからこそ、ハつ当たりされようと、耐えられたのかも知れない。
だって、今はその“温かみ”だった松陽先生がいなくなってしまった

たから。

(でも別に、俺一人が頑張つて いる訳ではない)

桂だつて、辛くなるときもある。戦争の最中、身に危険が及ぶのは日常茶飯事だ。

そんなとき、助けてくれるのは銀時と高杉だし、また坂本だ。

お互いに、補い合つて いるのかも知れない。

…松陽先生がいない寂しさを。

「……。」

「ん? 何じや、泣いとるんか?」

「泣くか。今はお前が泣け。」

「わしはもう泣いた。乙姉は、大丈夫じや、きつと

「ああ、大丈夫だ」

こつやつて励まし合える坂本は、もう3人の兄弟とも戻れるほどこの大きな存在なのである。

：ただ、この時の坂本と桂は、情報に誤差があったことなど、知る由もなかつた。

To be continue . . .

第一十八訓 遅いんじゃない、マイペースです（後書き）

最後までお読みいただき、
ありがとうございました！

次も陸奥・銀時・桂 side です（^○^）

第一十九訓 言わなきやいけなこと早めに言つとけ（前書き）

一気に更新します。

坂本の過去編、ちょっと

長いですがお付き合い願います！

そして、私事で申し訳ありませんが、
当分の間、感想を書けないように
設定する事にいたしました…

色々と理由はあるのですが…（^-^）
本当に申し訳ありません。

感想を頂かない分、

納得していただける小説になるよう、
今後も努力していきます！

…それでも、どうしても感想を書きたい！なんて思つてくださつた
方は（いるかは分かりませんが…）、追々私のＨＰのリンクを貼り
ますので、そちらへどうぞ。

ではお楽しみ下さい！

第一十九訓 言わなきやいけなこと早めに言つとけ

「……やつ。おまんが心配していた通り、わしらの故郷はちょうど
攘夷戦争の戦地となつちよつた。」

陸奥は表情一つ変えない。

「まさか……本当にそんなことになつていたとは……」
桂は額に汗を滲ませて、顔を少ししかめた。

「……でもよ……聞いたことねえぞ、辰馬からそんな話は……。親父が亡
くなつた話は聞いたけど」

銀時は頭をボリボリとかいている。

(…？何だこの違和感)

銀時は何故かこの時、可笑しな違和感みたいなものを感じた。

(何か、思い出さないといけねえ事を思い出せないみたいな……)

「頭の「じじや」…書つ必要なし、と思つたんじやねつ

「あ、ああ……」

銀時は少し困惑していた。

「まつたくアイツは……」

そんな銀時に気づかない桂はため息をつき、また別の意味で困惑していた。

「あの戦争が起つたんは……わしが15の時じや」

陸奥は、淡々と喋り出す。

ドオオオオン！！

パンッパンッパンッ！！！

ガキイイイン！！！！

（もう…死ぬんか…）

爆発音や金属音が絶えない。

寧ろ、先ほどよりも激しくなっている気がした。

陸奥は、虚ろな目をして戦場をさまよっていた。
田舎に向かつて歩いているものの、どこに行けば安全なのかもわからぬ。

（父上と母上は…無事じやうづか）

陸奥の家は由緒正しき武士の家だった。しかし彼女が8歳の折、陸奥の父は仕えていた大名家中の政争で敗北してからというもの、家は貧窮を極めていた。

土佐でも大田舎に住んでいる両親の口減らしに、遠く離れたこの一番の都会の街に出稼ぎに来たのが5年前。

出稼ぎ先の店主とははぐれてしまった。
それほど店主に良くしてもらっていたワケではないし、別に良いのだけれど。

(あ……)

「ひひひとしてこひひひ、見覚えのある非常に大きな店があった。

……いや、店だったもの、と言つた方が良いだひひ。

陸奥の出稼ぎ先の店の主人が巖原にしており、陸奥も出稼ぎに来た頃からおつかいに出されたりしていた、立派な面構えの酒店である。

…それが。

「…あ…あ…」

壊され、荒らされていた。

戦乱で壊されてしまった挙げ句、酒が持ち去られた形跡がある。

(『才谷屋』が…)

その店を才谷屋と云つた。陸奥は「」の主人と、そしてその娘と息子が好きだった。

息子は2、3年前に土佐を行つた。

主人が先日亡くなり、悲しみに暮れる暇も無く、今日に至る。

…そして、息子は帰つて来なかつた。

主人はずつとずつと待つていたのに。

そして、店の切り盛りは、息子の姉がすると聞いていたが…。

(奴も…こんな戦をしとるんか…?)

そつ思ひと、絶望的な気分はもつと深くなる。

才谷屋の息子は、国を変えたいなどと言つて出て行つたつさう、一度も帰つてこなかつた。

「辰馬…違つ…おまんは間違つちよる。こんなで国が変わるワケないわ…。」

辰馬。

そう、坂本辰馬である。
才谷屋の、息子。

彼は、国を変えたいと誓つて土佐を出て行った。

しかし、何だ、これは。

才谷屋は潰れ、荒らされ……

(辰馬さんか……！？)

辰馬の姉、乙子である。

陸奥はハツとして、まだ壊されていない隙間に身を滑り込ませた。

「乙子さん……！」

しかし、返事はない。

「あ……」

陸奥は、店の陳列用に置いてある荷台車が一つ無くなっているの
気がついた。

(逃げたんじやな……乙子さんか……)

心の底からホッとした。

「逃げないかん…」

ホッとすれば、また自分の身の危つさを認識した。

(田舎に逃げるしかない)

もう木谷屋にいるわけにはいかなかつた。

陸奥は実家の方向へ、ただ走つた。

近くや遠くで爆発音、悲鳴、そして夥しい数の金属音。

才谷屋の息子…辰馬の事を思ひつと、田の前がぼやけた。

「いんな…いんな戦場で…」

こんな恐ろしい所で。

彼は天人を斬つてゐるのか。

とにかく走つて、走つて、走つて。

早くこんなに恐ろしい所から出でていきたかつた。

そして。

「はあ…はあ…はあ…」

どれくらい走つただろうか。

もう、近くで爆発音も金属音も聞こえなくなつた。

ここから歩いて実家までの道を急いだ。

* * *

「そしてわしは生き延びた。頭が帰ってきたのは、それから1年程
経つてからじやつたな」

「陸奥殿は……大変な思いをしたのだな……」

沈痛な面持ちで桂は言った。

「別に……頭やおまんらに比べれば何のひきうちやないぜよ」

「……辰馬や俺たちの部隊は特に激しい戦地に行かされた。若くてよ
り抜きの部隊だつたのでな。陸奥殿が経験したその戦の数倍の激戦
地で奴は小隊を率いていたのだ」

坂本のすこし、みたいなを語る桂に、銀時は少し笑った。

「そげか」

それを聞いた陸奥は少しだけ視線を落とした。

「とにかく……頭が帰つて來た時、才谷屋は潰れて無くなつちよつた、
ゆうわけじや」

「あいつが戦争を途中で抜けた時」

銀時が陸奥をジッと見た。

「あいつはすぐに商売を始めたはずだ。あいつは俺との別れ際、そ
う言つてたぜ。」

「ああ。帰つて來た時、わしと共に起業したんじや。」

陸奥は無表情に答える。

「あの時……俺とあいつが別れた時……か。懐かしいねえ」

：銀時は何となく、あの時の事を思い出していた。

攘夷戦争が終わる直前だった。

体も、心もボロボロだった、あの頃。

To be continue . . .

第三十訓 漫画で伏線消化しきれず、最終回の奴アレめひや 気持ひ悪

「銀時。ほんまのほんまに、一緒に来てはくれんか?」

「残念だが、俺はまだここにいなきゃなりねえ理由がたくさんあるんでな」

攘夷戦争時代、末期。

「この頃は、本当に戦争が終わる直前と言えよつ。

攘夷軍の負けは、火を見るより明らかだつた。

20年程も続いた攘夷戦争が終わるのを誰もが予感していた。

「…ほがか。まあ、おまんがあれば、わしも安心してここを離れられるといつもんじや」

この時期にはもう攘夷軍側の勢いもなく、戦いを投げ出し逃げる兵士も少なくはなかつた。

しかし。ここに、違う理由で戦線離脱をする変わった若者がいる。

「辰馬…まあ、元氣でな」

「おまんこそ」

そしてまた、戦線離脱を誘われて断る変わった若者もいる。

「絶対に、死ぬな」

「あたりめえだ」

坂田銀時。

2人は陣営の出入り口付近にある岩に腰掛けていた。
最後の別れを楽しんでいるようにも見える。

「わしは土佐に帰つたらすぐに起業しようつひ思つちよ。従業員は追々集めていくつもりじや。世界を平和にするんは、戦争でもない。攘夷志士でも幕府でも天人でもない。人と人との繋がりじや。商売じや。わしはそれに気がついた」

坂本はあはは、と笑う。

「ああ。お前らしいやり方じやねえか」
銀時もつられて笑った。

「気づくのが遅かったが…気づかないよりは良い。そして、気づいたからにゃあわしは実行するぜよ。」

「ああ。」

坂本の夢みたいな話を、銀時だけは笑わずに眞面目に聞いてくれた。それがとても心地よかつた。

「銀時。正直に言つとな…情けない事に、おまんやヅリや齋助、玄雅やハ…と別れるのは辛いぜよ。まあ、何じや…心配しきよるんじや」

「ああ…」ひとう前えの事がよつぽど一番心配だよ。みんなで言つてんだよ？あのバカ本が会社立ち上げるとか（笑）、みたいな「ただの悪口じやねーか！」

…と突つ込みたいところだが、残念ながら突つ込み要員がない。

「うおおおお…おわかおまんらがそんなに心配してくれちよるとは…」

全身全霊で喜ぶ坂本。

「いや…」までも心配してないんですけど分かるだろバカ本

…と、おふわけは置いておいて。

「とにかくじや…みんなをよろしく頼む…」

「まあ俺がよろしくしなくてもアイツらは大丈夫だろ。つてか何も言わなくてもヅラがよろしくするつてーの」

銀時は面倒臭そうに鼻をほじつた。

「言われてみれば、そうじやな
坂本は頭を搔きながら笑つた。

「みんなきつと死なねえよ。アイシーリーは「んなくだらねえ戦争でく
たばるよつなタマ」じやねえ」

くだらない戦争、と銀時は言つた。

(銀時は、仲間を守るためにここに残るんじやな)

銀時にも、こんな戦争に意味がないことはわかつていた。
或いは坂本よりももつともつと早くに気づいていたかもしれない。
いつからなのか、坂本には分からなかつたが。

「じゃあ… そろそろ行くかの」

「うむ

坂本と銀時は立ち上がり、門まで歩いた。

「じゃあな、銀時。息災でな
「ああ、おまえも」

そつ短く言つて、笑い合つ。

坂本は行く方向を向いた。

「銀時…、晋助と、ハ二を…ちよこと云ひしておこひまつ
ぼやつ、と呑くよつて聞こえた言葉。

「…？」

「じゃあなー！」

坂本はそれ以降特に何も言わず、去つていった。

「じゃあな」

銀時も少し寂しいような、清々しいような気分だった。

…しかし。

（晋助と…ハ…？）

坂本の最後のあの言葉。

銀時が聞き逃すはずがなかつた。

銀時は桂や高杉に比べて、ずっと鋭い。
坂本よりも鋭いかもしれない。

しかし、そんな銀時にもこの時はよく分からなかつた。

（いや、高杉はわかる。高杉は分かるけどよ…）
高杉が最近おかしかつたのは見ていてわかつた。
しかし、ハ…がわからない。

（…いざれ…何か分かるのか？…なんでえ、辰馬の奴勿体ぶりやが
つて）

とつあえず氣に掛けておこうと心に留め、銀時は桂や高杉の待つ陣
當へ戻つた。

高杉の異変、八一の異変。

この本当の意味がわかるのは、まだまだ先の事である。

To
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
·
·
·

第三十一訓 だらだらするな、しつかり歩け

(…土佐…)

坂本は銀時たちと別れ、商売人となるため、一旦土佐に帰ってきた。

故郷に帰ってきたのは何年ぶりだろうか。

しかし。

「何じゃ…」これは

自分が知っている故郷とは大きく違つてこむことに気がつく。

坂本は実家への道のりを急いだ。
大きく胸騒ぎがした。

「こつちで…あつとるんか?」

変わりすぎて、道に迷う始末である。

走つて、走つて、…

見覚えのある山。

方向は間違つていないはずだ。

(あ……！あれは……)

見覚えのある店を見つけた。

この裏通りに自分の実家はあつたはずである。

全速力で道を駆け抜けた。そして角を曲がり、裏の通りまで来た。

(……！？)

ない。

そこに、あるはずのものがない。

ぽっかりと穴が開いたように、そこだけ空き地になっている。

「乙姉……？」

手紙で姉は、婚約者と店を継ぐと言っていた。辰馬はその婚約者と会つたことすらなかつたが。

しかし、どうしても、ない。

手紙は父親がなくなつたという手紙で途絶えていた。

いや、途絶えていたというよりは、届けることができなかつた。坂本が攘夷戦争に参加していた最後の1年ほどは各地を転々としていたため、手紙などを受け取れる状態ではなかつたのだ。

「乙姉……何で……おらんのじゅ……？」
少し坂本は混乱していた。

帰つてきてから、坂本は姉にたくさん謝つて、これからは姉孝行をするのだと宣言するつもりでいたのに。

父親の墓参りに行かなくてはいけないのに。

姉の婚約者……もとい、夫にだつて挨拶しなければならない。

攘夷戦争の最中で出会つた仲間の話もしなくてはならない。

姉に伝えねばならぬこと、しなければいけないことなど三のよう
にあるあるの。

「……乙姉！」

どこのにもいない姉に向かつて叫んでいた。

「おまんは、帰つてくるのが遅い」

「……」

突然後ろから聞こえた、低めの女の声。

「乙子さんと旦那さんは、行方知れずになっちゃうが。弟の癖に、
なあんも知らんのか」

そのキリッとした目に、薄茶色の髪。

……昔はあんなに小さい子どもだったのに。

「……陸奥、」

「久しぶりじゃな、辰馬」

身なりは女子になっていたが、陸奥は変わっていないようだった。
相変わらずの無表情である。

「辰馬……もう5年も会つとらんかったか……おまんはどうやら、変
わつてしまつたようじゃな。そりやあんな酷い戦の最前線で戦つと
つたんじゃ……変わりもするんかのう?」

(こんな顔は、初めて見た)

いつも、どんなときでも……悲しみさえ笑い飛ばしていた辰馬が、帰
つてきた途端、こんなに悲しい顔をする。

しかも陸奥の先入観からかはわからないが、辰馬からは血の臭いが
した。

腰に差しているその刀はいくつもの命を奪い、大量の血を吸つてき

たのだれい。

「血生臭い。それに何じゃ、その不幸な顔は」

「……。あつはつはー酷い言われようじや。まあそれ程の事をした自覚はある。……ただ、情けないことじ、まさか家が無くなっちゃることは思わんき。驚いてしまつての」

坂本は無理をして笑つてゐるよつにしか見えなかつた。

「……今から一年ほど前かのう。ちよつびこの街は攘夷戦争の戦場になつた。乙子さんは行方知れずじや。どこで生きとるのかも、もしくは……わからん。わしが気付いた時には、荷台びといなくなつちよつた」

そんな風に弱つてゐる坂本にお構いなく辛辣とも云ふ能を浴びせかける。

しかし、陸奥は辰馬を責めて責めて、追い詰めてやりたい気分だつたのだ。

5年も家を空けて。何をしていたとつのだ、この男は。

「……。

坂本の口元は微かに笑つていた。

そして、ゆつくつと俯く。

「辰馬？」

坂本はおもむろに風呂敷から何かを取り出した。

それはメガネのような形をしていて、レンズが茶色かった。

（……？）

当時の陸奥にはそれがなにかわからない。

坂本はそれをかけた。

「なんじゃ、その変てこなメガネは」

「サングラス、やつもんじや。いにしへに来る道中で買った。黒田のやんじい。日光を遮るのに使つんじや」と

坂本は穏やかに喋る。

「……涙を遮つてじつする」

何故か陸奥の胸にもじんわりと熱いものがこみ上げてきた。自分は辰馬を責めたくて仕方なかつたはずなのに。

「あつはつは！今のわしにはその用途の方がいい」
田はサングラスに隠れて見えない。

「おまん、何故帰つてきた？」

ふと、思つたことを聞く。

思えば、不思議なのである。まだ攘夷戦争が終わつたところ話は聞いていない。

「お、忘れる所じやつた」
急に腑抜けた声に変わる。

「よし、いこままで何となく、自分の想つままにしゃつしゃつたんじや。起業も、わし方式で行く！」

「は？」

「陸奥、おまんを一人田の従業員にするぜよー」

パツと明るい笑顔を向ける坂本。じつやつしていまで露骨に切り替えられるのか、陸奥には……いや、恐らく誰も理解できまじ。

「……は？」

いくら陸奥でも理解できるはずがなかつた。

「ワシはこれから貿易会社を立ち上げる。おまん、共に宇宙へ飛ばんか？」

「……。」

呆気にとられるしかなかつた。

「おまんはもしかすると、銀時より向いとるかもしれん」

陸奥は全く理解できない。といつか、全くついて行けない。聞きたいことや言いたいことが多すぎて、何から喋るのが迷つた。

「いや……あの、辰馬。ワシは、今も奉公中じゃやれ……」
こんくだらない事しか思い浮かばなかつた。

陸奥は戦渦の中辛うじて消失しなかつた奉公先で、未だ奉公中だつた。

「楽しそうないんじやろ?昔から変わらすのう。陸奥ももつ店に奉公する年でもないろ、辞めればいいぜよ」

「なつ……」

「最初は苦労するじやねつが、絶対に楽しこせん。」

「……。」

拍子抜けだ。かつてないほど、拍子抜けだ。じじよだ直感ひじが今までにあつただろうかと思ひせどである。

「そいで、全国を…宇宙中を駆け回れる会社にするぜよ。そしたら、乙姉も探せる。あの姉様が簡単に死ぬはずがないんじや。それに、何ちゅうたかな…旦那さんもおるはずじや」

「……。」

軽口に聞こえるが、そんなことはない。絶対にない。

（この男は…こんな男だったか？）

こんなにも人を惹きつけることのできる人間が、この世に何人いようか。

「ワシは、銀時の所にも、ジラの所にも、晋助の所にもすぐにいける船がほしい。そして、商売で国を変えるんじや」

この時の陸奥に、『銀時』『ジラ』『晋助』が誰なのか全くわからなかつたが、後々坂本にどうぞれほど大切な人間なのかを知ることになる。

* * *

「まあ、ワシは頭に流されて快援隊を結成してしまつた訳じや」
陸奥はふう、と満足したようにため息を吐いた。

「んで、辰馬は未だにその姉ちゃんを探してゐる訳か」
銀時はふーん、とでもつまらな顔つきで相づちを打つた。

「…………ひひ……ひひ……まさがあ……辰馬がぞんな……境遇だつだひは……
ひひく」

「てめえはどんだけ感情移入してやがんだボケえええ……きつた
ねえな、鼻水垂らしやがつて！ 何なんだ、シリアルモードぶち壊す
天才か……！」

「いや、ええ、分かつてくれたうええんじや
なんか若干類を染めてるみたいに見えるのは氣のせいだらうか。

「いやいやいや何なんかちょっと喜んでんの…? 何なのつまり…! ナニが言いたいのか全くわからないんだけど…」

「ああ…まあ、一番重要なことをひとつとらんからな」

「は? あんだけながーい話して何言つてないつんだけよ」
銀時は疲れたらしく、がっくりと肩を落とした。

「その辰馬の姉の旦那は、天人なんじゃ」

「……。」

「…」

その事実に、銀時は何の反応も見せなかつた。
しかし、桂が少し反応を見せたのは、彼が攘夷志士だからだろうか。

「だから何だだとこつのだ…」

桂が少しそむつとして聞いた。

「わかるじやろ? なんとなくは。…ワシとて高杉の性格はしつち
よる。超過激派攘夷志士…。天人が嫌い…どころではない、憎んど
る。憎みきつとる」

「つまりあなたが言いたいのは、高杉の『計画』のことか?」

「まだよくわからない、と言つたように銀時は頭を搔く。

「まあ… セウジヤ。何こせよ… 理由せ後からつこてへるせよ。高杉
がどんな計画を練つてこるかもわからん。何か大きな事を起じるの
なら、頭は止めに入るじや ろうが…」

銀時や桂にも、陸奥の言つたいことは何となく分かった。

「しかし… 心配し過ぎじやねーの？」

「ふつ、まあ確かにそつ言われるとそつなんじやが。ただ、せつき
も言つたよつに、理由は後からつこてへる。今は何となく覚えてい
てくれればそれでええき」

（ワシの胸騒ぎは… 当たるんじや）

陸奥は不意に胸に手を当てた。

「うむ…。まあ、わかつた。心には留めておく」

「それにまあ… あれじや、頭の、その… じとを、まあ… 知つて貰え
れば…ええ、や」

陸奥はしどもどり話す上に、語尾がどんどん小さくなる。

（つたく…。辰馬もつらやましに部下持つたもんだ）
銀時はあ、とため息をついてげんなりする。

「ふあ～あ…もう夜も遅いしお開きしようぜ～…
本当に眠そうである。

「貴様」ひで寝るなよー」というか家でリーダーが待ってるのではな
いのか。早く帰ってやれ
打って変わつて桂は非常に元気だ。

「あー、はいはい」

そして銀時は万事屋に、陸奥は快援隊へ帰つていった。

その夜は、月がとても美しかつた。

これから動き出す運命とは反比例していくかのように

。

第三十一訓 離れていても家族って元ネタわかるよね（笑）（前書き）

場面変わります。

銀さんのイメージが原作と
少し変わってしまったからめんなさい…
脳内補正でよろしく
お願い願います（^-^）

第二十一訓 離れていても家族って元ネタわかるよね（笑）

「はあ～…全く何だつづらんだみんなしてよお…」

銀時は非常に疲れていた。

色々な事がありすぎて頭が「じゅぢゅ」になるし、動き回り体力も削られた気がする。

やつと万事屋に着いた。

「金ももらえないのに深夜労働だよ…」

はあ、とため息を吐いて鍵を開けた。

「ただいま…って、寝てるか」
もう日付が変わりそうな頃である。新八は帰つただろうし、神楽は今ごろ押し入れの中で寝ているだろう。

銀時はまたため息を吐いて、奥へ入った。

「あ…銀さん…」

「…え、新八！？…と神楽…」

なんと、まだ新八が万事屋にいた。

そしてその側には神楽がソファで寝ている。

「おかえりなさい」

「何でいんの新ハくん」

銀時は少々焦っているらしい。

「いや何でひて待つてたんですけどあなたを一つてかどんだけ心配したと思つてゐるんですか！」

新ハはすじこ劍幕で銀時をまくし立てた。

しかし、神楽を起こさないようつに小声にするとほむことは忘れない。

「こやいぢこや出掛けるつて言つただろ！」アレ言つたっけ

「銀さん、買い物に行くつて朝に出でつたぢやないですか！買い物長すぎでしょ。つてか何も買つてすらないし…。神楽ちゃんも寝るの我慢して待つてたんですからね。寝ちゃいましたけど」

だからこの状況か。と理解する。

（あーあー…やつちまつたなあ）

「どこ行ってたんですか全く

「いやー…まあ、その、なんだ。色んなどこに行つてたのー！」

銀時ももつヤケだった。こんな失態、子ども達の前ではしたないと無かつたのに。

不覚だった。

「また誤魔化すんですか」

新八が拗ねたように口を尖らせる。

「…は？」

新八の意外な態度に銀時はポカンとしている。

もつとまくし立ててどこに行っていたのか聞いてくると黙ったのに。

「桂さんが来たりした時点でなんとなーく、本当になんとなーくですけど！ わかりますよ。別に話したくないんなら黙ってくださいねー。」

「…ヅラ…がじつたの？」

「い、いやまあ良いんでそれは、とにかく…ええと。僕は帰ります！」

「え」

そういうと新八はさつさと荷造りし始めた。

銀時には何がなんだかよくわからない。

「あ、そうだ。…銀さんに隠し事なんて後ろめたいから言っておきますけど。…僕と神楽ちゃん、見ちゃったんですよ。…その、陣羽織やら胸甲やら籠手やらを…」

新八は本当に後ろめたそうに話す。

「陣羽織？ 胸甲？」

(懐かしい響きだな)

なんて思つてしまつ自分で悲しくなる。

「銀さんが攘夷戦争時代に使つてたヤツですよ。あの棚の奥にしまつてありました。たまたま、見ちゃつて……」

新ハが氣まずそうに銀時を見た。

(なるほどね、モーサーーーーー)

「……いよ別に。見られて困るもんでもねえし。……ただまあ、アレだ。怖かつただろ。悪かつたな」

銀時は銀時で氣まずそうに答えた。

(何せ血まみれだからなあ……アレ)

「……銀さん」

瞬間、新ハはホッとしたように笑つ。

「新ハ、お前は早く帰れ。そしてお妙が俺に暴力しないように言つといてね100円あげるから」

「いや知りませんよあんたが悪いんでしょ僕が帰るの遅くなつたの」

ああ～「コリラ女に殺される～、なんて呻きながら頭を抱える銀時に、新ハは心から安心した。

(良かつた……いつもの銀さんだ)

何故だか、新ハは不安だった。銀時がここに帰つて来た時……いつも銀時じや無かつたら、と心のどこかで思つていた。

「じゃ、帰りますね

「おひ、またな

「はい、また明日
新ハは帰つていつた。

「ふう…」

（いらねえ心配を掛けちまつたな…）

銀時はすやすやと氣持ちよわせうに踊る神楽を見つめた。

こんな日常がずっと続くのだろうかと、ふと考える。
遠い昔、小さいながらに思つたことと同じ事を考えた。

あの頃の、小さかつた銀時のそんな囁かな願いは夢く砕け散り、
く傷ついた。

そして攘夷戦争が終わり、もつともつと傷ついた。

親…いや、それ以上とも云える人を奪われ、仲間を失い、そして…
仲間を傷つけ、… 捨てた。

「……うへん、……銀、ちやん……」

「……」

ハツとした。

神楽が身を揃らせ、寝返りを打つた。
ドサツ、と床に落ちる。

しかしそうがとうが、全く起きる気配はない。

(何考えてんだ俺は)

今更だ。

そんな事、ずっと昔に考へて考へて、辛くなつて考へるのは止めた。

それに坂本の話だつて。長馬は話したくなかったから話せなかつたのである。

鋭い銀時ですら気がつかなかつたのだから、仕方ないのでだ。

そして、戦争が終わつた時、もつ今後一切人との繋がりを深くは持たないと誓つた。

誓つたはずだつた。

「…悪かつたな」

新八への詫び同様、神楽への詫びなのか、…それとも他の誰かか、いやもしくはその両方か。

「あいつらは捨てられたなんてこれっぽっちも思つてねえ。それに俺は、間違いなく命がけで守つて来たはずだ。…結局は、守れなかつたけどな…」

銀時は神楽を抱き起こして、彼女の寝室とも云える押し入れに向かつた。

「お前らは…失いやしねえよ。」

そして押し入れを開け、神楽をそつと寝かせる。

「銀、ちゃん」

「！」

…寝言うらじい。

「…行か、ない…で…銀、ちゃん」
神楽は驚かれていた。

「…… つたくよ」

銀時は頭をガシガシと搔いて、ゆっくりと襖を閉めた。

もう、どこにも行かない。
子ども達の前から、絶対に消えない。

先生は自分の前から消えてしまった。
自分も…… 2人の幼なじみの前から消えた。

「寝るか」

銀時ははあー、と長いため息を吐き、苦笑いしてそのまま隠りこつ

いた。

To be continued . . .

第二十一訓 離れていても家族って元ネタわかるよね（笑）（後書き）

次からまた少し物語が動きます。

第二十三訓 悲しき事も嬉しき事も普通はいきなりやつてくるもんだ（前編）

今回、舞台は吉原です。

初登場のあの2人。

そして今回、これからのお話に繋がるヒントがたくさん出でてきます。

伏線。○ 伏線（笑）

「…………と、いつのじりひりこ」

薄い金髪の女は、煙草の煙を一気に吐き出した。

「…何なの…それ」

その後ろでは車椅子に乗った女がいる。

夜。吉原は月明かりに照らされていた。
しかし、月明かり以上に店の明かりが眩しい。

「今までほつたらかしだったのを…何でそんな急に忠告なんて」
はあ、と、形の整った眉を寄せ、女、もとい、口輪はため息を吐いた。

「自分の領地で面倒を起したくないのかもしれん。何にせよ…神威の氣まぐれじゃうづ。」

これまた形の整つた唇から煙を吐き出して、月詠は静かに目を閉じる。

一人は日輪の店の軒先にいた。

先日、吉原桃源郷の楼主である、宇宙海賊春雨第七師団隊長の神威…というか、その部下から吉原に連絡があつた。

「でも近々世が乱れる…なんて…意味が分からないわ。せっかく平和になつた吉原がまたそんな…」

日輪は沈痛な面もちで空を見上げる。

「ああ…。しかし、念には念を…百華には喚起しておく。もうすぐ、百華の者が来るであります。先ほど呼んでおいたのでな。」
月詠は表情を崩さない。

「そう…。でも、不思議な事が一つあるわ」

「なんじや？」

「その、春雨は『天人』の者は特に気をつけよ…って言つていたんでしょ？」

「ああ。わつちにも真意は全くわからんせん。しかし、あつちは吉原の楼主じや。無碍にする訳にもいかんし、『気』を張つておかねばならん」

はあ、と月詠もため息を吐く。

「だから、先ほど呼んだ百華も天人の者を呼んでおいたんじや」と、月詠が言つた瞬間。

「頭」

黒い陰が月詠と日輪の前に現れた。

「来たか保波^{ほなみ}」

「まあ、この子が」

「これは、日輪様」

保波、と呼ばれた彼女は日輪にも軽くお辞儀をした。

日輪は保波の姿を見て、少し驚いている。

…何故って、その容貌がほとんど人間のそれと変わらないのだ。

黒い布で顔の半分を覆つてはいるが、見目には分からぬ。

(まあでも神楽ちゃんも姿は人間だものね)

しかし、強いて言つなら違いはあつた。

保波の目と、髪である。

何より目立つのは、目の下の隅。寝不足ができるよつなかつすうとしたものではなく、化粧をしたよつに黒い。

そして瞳もこれまた黒々としており、大きい。更に髪まで、異常に黒い。普通、人間も髪は黒いが、透明感が全く無いほどに黒いのだ。

保波はその真つ黒な髪を下の方で一つに束ね、団子にしていた。

「天人の白華を集め、伝えておいてほしい事がありんす。…これを月詠は保波に手紙のような物を渡した。

「はい」

保波は綺麗に折り畳んであるそれを素早く開け、目を通す。

「…天人に對して氣をつけよとは…。攘夷志士ですか」
保波は目を伏せる。

「その可能性は高いが…わっちも詳しきは聞かされておりんせん。とにかく、氣をつけてほしい、とのことじゅ。」
月詠は少し眉をしかめた。

「わかりました。既に伝えておきます」

「ねえあなた」

突然日輪が保波に話しかける。

「はい」

「その右手…どうしたの？怪我でもしたのかしら…」

日輪は心配そうに保波の右手を見つめる。保波は右手に包帯をぐるぐると巻いていた。

「ああ…これは」

保波は包帯を解いていく。

すると、手の甲に入れ墨のような黒い印が現れた。

何か複雑な文字のよにも見える。

「入れ墨?かしら」

「はい、そのようなものです。これは、私たち黒曜族に伝わる印です。黒曜族はみんなこの印を右手の甲に持っています。生まれてすぐと一緒に伝わる特別な入れ墨を彫るんです」

保波は愛おしむようにその印を撫でた。

「そうだったの。天人にもそれの一族の風習があるのね」

田輪は穏やかに笑う。

「はい」

田輪のその名の通り太陽のような笑顔につられて、保波も笑った。

保波は思った。

（私は、幸せだ）

地球で生きた黒曜族の仲できつと一番に、幸せだ。

（ただあの子だけが心残りだけれど）

「保波?どうした?」

ボーッとしているように見えた保波に、月詠が話し掛ける。

「あー、いえ、申し訳ありません。では私はこれで失礼します」
保波はハツとして、焦ったように去つて行った。

「なんじや、あこつは…」

月詠は不思議そうに保波の後ろ姿を見つめた。

「ねえ月詠…」

田輪は呟くように月詠を呼ぶ。

「なんじや？」

「私、銀さんにも伝えておいた方が良い気がするの…」

「銀時に？」

月詠は首を傾げた。

「頼りっぱなしのようでいけない氣もするんだけど。…春雨は、吉原だけじゃなくて、『世が乱れる』って言つていたわ」

田輪は静かに俯く。

「銀時一人に伝えた所で…と言いたい所じやが、わっちも何故か伝えておいた方が良いのではないかと思つていた所であります」
月詠は苦笑した。

「銀さんだもの。誰だつてそう思つちやうわ。…じや、決まりね！」

月詠、明日銀さんの所に行つてきなさい」

先ほどと一転、日輪は二口二口として月詠の背中をポンと叩いた。

「別にわっかが行かんでも電話か使者を出せば……」

「何言つてゐの……」うつ大切な事は直接言つにいかないとダメよ

「やうか?」

「とにかく行つてくるの……」

「は、はあ……」

月詠は日輪の剣幕に推され、思わず頷いてしまつた。

そして次の日。

「いーなあ、月詠姉だけ銀さんの所に行くなんて。僕も行きたいよ
」

朝の吉原は、静まり返つてゐる。

そんな吉原の大通りに、3つの陰があつた。

無論、日輪と月詠、そして晴太である。

「別にわっちは良いのじゃが…」

駄々をこねる晴太を見て、月詠は口輪を見た。

「いいのよ。晴太はまた今度私と一緒に行きましょうね」

「ちえー」

日輪は晴太の頭に手をポンと乗せて、月詠に笑いかける。

「？ そうか。では、行つてくる。」

月詠は不思議そうにしながらも、吉原を出発した。

「銀さん達によろしくね！」

「あつ！ 僕もよろしく！」

「ああ。わかつた」

振り返り、手を振る。

こんな平和が、やつと手に入れた平和が、一体どうやって崩れる

と叫んだりつか。

月詠は小さくため息を吐いて、歩を速めた。

To be continued . . .

第二十二講 悲しき恋も恋しき恋も普通は一かなつやつてゐただ（後編）

もやもやした方は、
前の話を読み返していただけないと
分かると思います^ ^

次の話はすぐに更新いたします。

第三十四訓 世の中何でも上手くいくと思つたら大間違いだコノヤロー（前書き）

万事屋 + 。

長いです。

色々解説されていきます。

銀さんのキャラがまたもや原作と違つような…（^-^）
努力します…

第三十四話 世の中向でも上手べこべと思つたら大間違いだコノヤロー

「おはよー神楽ちゃん」

「新ハ～。おはよーアル」

翌朝。何とも清々しい朝である。新ハが万事屋に出勤してきた時、神楽はまだ寝間着のままだつた。

「さつき起きたの？」

「おひね」

（昨日遅かつたからなあ）

「銀ちゃん、帰つてきたアルよ」
神楽は田を擦りながら微笑んだ。

「ああ。神楽ちゃん寝ちゃつたもんね」

「銀ちゃん、まだメツチャ寝てるアル」

神楽は銀時が寝てゐるであらう寝室を指差した。

「まあ…銀さんも相当寝るの遅かつたしね。新ハはまつたくなあ、と呟いて苦笑いする。

「銀ちゃんの奴いつからあんな不良になつちまつたアルか…そんな風に育てた覚えはないネ…！」

「またお母さんかよ」

チツ、と舌打ちをする神楽に、新ハのツツコウ。…こつもの万事屋である。

『ピーンポーン』

「えつ嘘、お密さん！？」

新ハは大層驚いている。

こんなに朝早くから依頼が来るなんて、かなり珍しいのだ。しかも店主たる銀時は夢の中だ。

「早く出るアル新ハ。私は着替えてくるね。お密さん待たせんじやねーぞ…！」

神楽はそう言つとものすゞ、早さで奥に消えていった。

「全く銀さんも神楽ちゃんも…」

はあ、とため息を吐いた後、新ハは駆け足で玄関に向かった。

「はーい」

ガチャリ、と鍵を開け、戸を開ける。

「あ…え…？ 月詠さん…？」

「あ、ああ…いや、うん…びびりや…」

「あ…どうも」

(何この気まずい空気…)

「あ、上がつて下さい！ あ、えつと、何かの依頼ですか？」
新ハは何故かギクシャクしながら月詠を案内した。

「い、いや、今日は少々銀時に用事があります。銀時はいますか」
そして月詠は何故か敬語になりながら万事屋のソファに座った。

「あーつーしき キー！」

…と、急に奥から出てきたのはもちろん神楽である。

「あ、お邪魔している」

「どうしたアルか！」

「いや、えつと、銀時はいますか」

「イエッサアア…ぎーんぢやーんつ」

月詠に言われるなり、神楽は襖をスパンッと勢い良く開けた。

そしてそのまま、銀時の上にダイブする。

「ぐふふふふ…何…? 何…?」

「ひつやーり銀時は田を覚ましたらしこ。

「起きるアル不良息子おお…女の方が来てるわよこいつから彼女
なんて出来たの不良息子おお…?」

「ひつセーよ…何だよ…?」

銀時はガバツと布団と神楽をはねのけ、そのまま勢い良く立ち上が
った。

「あ、銀時」

「…あ?」

そして、田の前の田詠と田が合つた。

「お前は全くだらしがないー早く着替えてきなよー」

「こやこやこや何で月詠がいんの」

「良こから早く着替えてきなんじ」

「銀さん」

「銀ちゃん」

「……。」

ジー、と見つめられる。

「はいはいわかりました。着替えてきますよ、てか俺キャラちがくね?なんかさあ、もつとどうしつ構えてる感じじゃん余裕な銀さんが好きってファンは多いんだよマジで」

ブツブツと愚痴りながら銀時は奥の部屋へ消えた。

そして数分後、銀時はピシッといや、こつものよひだらーんとして現れた。

いつもの着物である。

「はいお待たせ。で~ど~したんだア月詠
銀時はドカツとソファに座る。

「今日は依頼でも何でもりんせん。ぬしに話をしこきたんじや
月詠は銀時と対照的に、凛とした雰囲気を保っている。

「話?」
銀時はいつもの氣だるさを纏いながらも、話は真剣に聞いてるよ
うだ。

「ああ。…まあ、率直に言つとだ。先日、宇田海賊春雨から吉原に
連絡が入つた。」

「春雨…?」

銀時達にとって、全く良じ響きではない。

「ツ、ツツキー、ちょっと待つアル…。吉原について事は…」

銀時の隣で月詠の話を聞いていた神楽が不安気な表情をする。新八もまた然りであった。

「ああ。連絡して来たのは、春雨と云つより、神威だと云つた方が良いじゃろ?」

月詠は小さくため息を吐いた。

「それで? 神威が何て?」

銀時は別段驚きもせず、問い返す。

「近々世が乱れる、と。吉原だけではありんせん。世が乱れるから氣をつけると言つてきよつた。しかも、天人を気にかけておけと言つておつたんじや。」

「世が…乱れる?」

新八は少し青ざめているように見える。

「…わつちも詳しい事はわかりんせん。何せ神威の気紛れじや」

「意味分かんないアル!! あんのバカ兄貴が…」

毒をはきながらも、神楽は複雑そうな表情だった。

「しかし。こんな事は初めてなんじや…。鳳仙が亡くなつて楼主が神威に変わつてからと云つもの、神威は全く吉原に手出しさしてきなんだ。それが初めて、ほんの少しじやが関与してきたんじや」

月詠は鋭く目を光らせた。

「春雨……か

ふと、銀時は高杉の顔を思い浮かべてしまった。

「ねえ銀さん……それ、前桂さんが言つてた事に関係あるんですかね……」

新八も銀時とその考えは変わらないうらし。

「ジラが言つてた事つて、高杉がビリとかつてめつマルか?」

「うふ……」

「まあ、可能性はあるんじやねえの?あにつら全体的に過激だし。銀時は見田には何の興味もなさそうだった。

「まあ、何じや……。何となくねじりこね話しておいた方が良いかと思つたんでな」

「他には何も聞いてないアルか?その……神威から
神楽はやはり氣になるじりしこ。

「ああ。他には何も。その、高杉……の事は何も言つておらんかった
月詠は少し目を伏せた。

彼女も、高杉晋助の名は知つていいようだ。

「やうか……」

銀時は上を向いた。

彼は天井を見つめたまま、動かない。

「銀さん？どうしたんですか」
新ハは心配そうに銀時を見やる。
(やつぱり…何か気になるのかな)

「いや」

銀時は短く答える。

腰の木刀を抜いた。

「え、！？」

新ハと神楽と月詠はギョッとした。

「てめえは何勝手に人ん家の屋根裏に上がり込んでやがんだボケエ
エエエ！……！」

ドシュウウウ！

と激しい音をたてながら銀時の木刀が天井に刺さった。

「銀さあああんつ！」

紫色の髪。赤い眼鏡。

「チツ、俺としたことが…」
(気づくのが遅れた)

「…やつちやんさん」

新八は非常に脱力した。

だるそつとしている銀時は、周りにハートを振り撒くやつちやんにまとわりつかれている。

「またストーカーかよメス豚があ
神楽も冷めた目でさつちやんを見た。

「…な、何じやぬし…」

初めての経験に、月詠はタジタジである。

「ちよつとシッキー。何あなた抜け駆けしてるのよ。空氣読みなさいよ銀時くんはあなたのものじゃないの！みんなのものなの！暗黙の了解つてヤツを知らないわけえ！？」

「いや別にそういうつもりは…」

「てめえは女子高生かああ…！」

銀時は纏わりつくやつちやんを振り落とした。

「うふふふふー！そんなことして私が喜ぶと思つてえー銀さんったら

「

「何なのマイシーフもに増してウザいんですけビ。捨ててきて良

？」

銀時は調子の良こやつちやんに対してげつそつとしている。

「私をいじめたい気持ちは分かるけれど……ちょっと良いのかしら？」

「…」

急に、わいつやんの声色が変わる。

そして、皿にも留まらぬスピードで銀時との距離を詰めた。

「何なんだてめえは…」

銀時はさすがと言おうか、全く驚いていない。

新ハや神楽は少し表情を固くする。

円詠はいつものわいつやんと違つ雰囲気に驚いているように見えた。

「銀さん。分かっているかもしないけれど…、気をつけた方が良いわ」

わいつやんは少しずれた眼鏡をスッと上げる。

「… つたくよお、みんなしてそれだよ。気をつけるつづつたてなあ、何に気をつけりゃ良いのかもわからねえのこ気をつけよつが無いつつ」

「つ」

銀時は面倒くさがりに頭をポリポリ搔いている。

「最近忍の動きが本当に異常なのよ。」んなことは今までなかつた

わ

「異常つて…何なんですか」

新八は眉をひそめた。

「依頼件数が尋常じやないの。しかも、依頼主はその殆どが攘夷志士。潜入先は幕府。…少し前まではね」

「少し前…？」

確かに、数が極端に増えたことを除けば、攘夷志士から幕府への隠密自体は珍しくないはずである。

「最近、また急激に依頼が増えた。その依頼つていうのが、攘夷志士からの依頼で、潜入先も攘夷志士、というものよ。」
さつちゃんの目が鋭くなる。

「攘夷志士から…攘夷志士だと？」

月詠も攘夷志士の事は一般知識程度には知っていた。

「意味分かんないアル！」

「そう、意味が分からぬの。だから、私自身で色々調べてみたのよ。そうしたら…、依頼主は過激派攘夷志士、潜入先は穩健派攘夷志士ばかりであることが分かつたわ。それに、潜入だけじゃなくて情報伝達の仕事も結構あつたのよ」

さつちゃんは軽くため息を吐く。

「過激派攘夷志士と…穩健派攘夷志士…？」

そう聞いて新八や神楽の頭に浮かんだのは、2人の人物。

「……」

銀時の瞳が微かに揺れた。

（いや、まだあいつら2人が絡んでいるかはわからねえ）
もちろん、銀時の頭に浮かぶのも攘夷志士の2大頭と呼ばれる幼な
じみ2人である。

「そして。その情報量もハンパじゃないわ。まあ私も忍だし、あん
まり詳しいことは言えないけれど……。ねえ銀さん……」
さつちゃんは珍しく深刻そうな表情をしていた。

「あんだよ」

銀時はそんなさつちゃんの表情に、しかめつ面をしている。

「私も銀さんの詳しい過去まで知らなかつたから驚いたんだけれど。
……あなたの昔の二つ名と、最近は本名まで……攘夷志士たちの間で出
回り始めてるみたいよ」

「「「「……」」」

一同は耳を疑つた。

「何だつづうんだ一体……。つうかジラと高杉は何してやがる

初めて銀時が感情らしい感情を表に出した。

「貴公子、修羅、龍虎、そして夜叉……」

「……」

銀時の目が一瞬、ギラリと光った。

「…何じゃそれは」

はつきり言つて、月詠はあまり状況を認識仕切っていない。しかし、さすが月詠である。何とか話についてきていた。

（銀時が、攘夷に関係がある、ということか？）

「銀さんなら、わかるでしょう？」この4つの単語、隠密や情報交換の際の隠語として使われているの」

眼鏡を光らせるさつちゃんの表情はよく見えない。

「……。」

銀時の表情からも、何を考えているのかはわからなかつた。

「貴公子…とは。狂乱の貴公子、桂小太郎か？」

高杉と桂は攘夷志士の中でも有名どころなのだ。

「正解よツツキー」

「もしかして修羅は高杉さん？」

（ただのイメージだけど）

新八は思いついたように言つた。

「正解よメガネ」

「いやあんたに言われたくないんですけど」

「修羅に生ける獣。そんな風に言われていたそつね
新八のツツキーは全く無視である。

「りゅうり…？って何アルか？」

「辰馬だ、辰馬」

銀時が面倒くさそうに答える。

「伯仲の一神。ね」

この一神、とは龍虎のことである。

「え、…あの馬鹿が何でそんな格好いい感じで呼ばれてるアルか…」
神楽は胡散臭そうに眉を寄せた。

「じゃあ夜叉つて」

新八は銀時を見た。

「やつこつこと。4人合わせて武神四侍！…だつたかしら」

「5人合わせてゴンジャー！みたいなノリで言つのやめてくんない！？つたく：何でそんな昔の中2な辛氣くせえ名前を今更聞かされなきやなんねえんだ…」

銀時はあーあ、と深いため息を吐く。

「とにかくー私がここまで知っていること自体がもう異常なのよ！…
銀さんに何か起こるのは明白でしょ。後は銀さんに任せると。まあ
銀さんの隠れた人間関係なんて知らないけどねつ」

さつちゃんは何故か頬を染めている。

「何で赤くなつてんですか」

そんなさつちゃんを見て新八は半笑いである。

「だつて格好いいじゃなーい！—そんな銀さんも素敵あ、つーーー！」

わいわいさんはわいわいさんで半笑いになりながら銀時にぶつ飛ばされる。

「てめえは今わいも役目が終わつた。ギャグパートっぽくなる前に今すぐ帰れ」

銀時イライラしながらわいさんと木刀の切つ先を向けた。

「もう銀さん！—あなたがそつやつて冷たくすればするほど私が燃え上がるとわかつての所業ね！—」

身悶えるわいさんに對し、銀時はどんどん彼女を玄関の方へ追いやつていぐ。

「つづせえええーー！」

そして、最後の一発。

ピシャンッ

と扉を閉め、わいさんは外に追い出した。

カラカラカラ…

それから銀時は扉を少しだけ開けて、顔だけを覗かせる。

「銀さん？」

外に追いやられたわいさんは不思議そつて首を傾げた。

「礼は言つとかねえとな。ありがとよ。まあ不本意じゃねえけど…超悔しいんだけどーーあ、後一生くんなよ」

ピシャンチ
と扉が閉められた後、さつちやんが身悶えに悶えたのは言つまでも
ない。

「わっちも、もつ帰るよ」

さつちやんを見送った月詠はフツと笑つた。

「月詠さん？」

新八は月詠の方を振り返つた。

「話を深追いする気も、これ以上長居する気もありません」

「…おう。早くけえれ、けえれ」

銀時は耳をはじくしながら手をひりひりと降る。

「ツッキー…」

神楽は眉じりを垂れて月詠を見上げた。

「何じや？」

「気にならないアルか？」

「「……。」「

銀時にも、神楽の言葉ははつきりと聞こえた。銀時に聞こえないよう¹に小さな声で言つたつもりだったらしいが、確かに聞こえたのだ。

月詠は、何について“気にならない”のか、すぐに察した。
月詠も神楽同様、小さな声で神楽に言つ。

「全く気にならないと言えば嘘になるのう。しかし、銀時が聞かれたくないと思つてているのはわかる。人には踏み込んでいいけない一線というものがありんす」

月詠は優しく微笑んだ。

「…私はツツキーみたいに大人にはなれないネ」
神楽はムスッと膨れる。

「まあ、ぬしらと銀時は家族のようなものじや。確かに知りたいと思つじやろう。しかしな、銀時はきっとぬしら2人の事をよく考えてくれていると思うぞ。」「

「そうアルか?銀ちゃん、話してくれるアルか?」
神楽の目が少し輝いた。

「ああ。銀時はぬしらを大切に思つていてるからな。話すべき時に、話してくれるじやろう」

月詠は神楽の頭にポン、と手を置いた。

「わかつたアル!ありがとツツキー!」
神楽は満面の笑みである。

「ああ。じゃあなた3人とも
月詠はブーツを履いた。

「お前えにも礼を言わねえとなア。ありがとよ」

「別に礼などいらん。ただ、わっちらは今までぬしらに助けてもらつてばかりじや。ぬしに何があつたのか詳しぐは知りんせんが、何かあつたらいつでも頼ることの出来る存在があると云うことは忘れんぐれ」

月詠は穏やかに笑う。

「頼もしいじやねえか」

銀時も少し笑つた。

「ありがとうござります、月詠さん。あ、日輪さんや晴太くんにも
よろしくお伝え下さいね」

新八もにっこりと笑い返した。

「あ、忘れておつた、日輪と晴太にもぬしらによろしく云ふてくれ
と言われておつたんじや」

「あはは。」
「解です」

しつかりじでいるようで、少し天然な月詠らしかつた。

そして、月詠も万事屋を出て行つた。

「はああ…朝つぱりから騒がしそぎて頭が痛えよ…」

銀時はドカツと社長席に座る。

「「……」」

そして、新八と神楽は静かにソファに座つた。

……

気まずい沈黙が続く。

そりやあ、あれだけ情報を貰えば、2人が戸惑つのも当たり前だろ
う。

(そろそろ、限界か)

自分の綺麗とはとても言い難い過去を、子ども達に話すことに全く躊躇いが無い訳ではない。
しかし今まで話さなかつたのは、話す必要が無かつたから、という理由のみである。

今は、果たしてどうだらう?

さつちゃんが、自分の過去を知っている。月詠も何となくは理解しただろう。

さつちゃんの話からして、攘夷志士が不穏な動きを見せているのは明白。

更に自分たち4人の名前が隱語で出回っている。

しかも、穩健派と過激派の間で何かしらの交流があるのだ。異常も異常。

（さすがに…高杉とジラに交流があるってのは、ナイ。それはナイ！）

あつたら困る。

そんなこと、あの桂に限つてあるはずが無いと自分にただ言い聞かす。

（さつちゃんの情報つてジラに知らせた方がいいのか、悪いのか）何だかワケが分からなくなつてくる。

（つか、ジラと高杉が密通するんなら、まだ俺と高杉が密通する方が自然だつつうの）

桂と高杉は仲が悪い。小さい頃から、ずっと喧嘩しかしていなかつたし、それに攘夷戦争が終わりに近づくにつれ、本格的に仲違いし始めたのを強く覚えている。

（…あれ、でも村塾にいた頃は何だかんだ仲良かつたようなポン、と浮かぶ、楽しそうに笑い合う小さい2人の子供も。一人とも上質な着物を着ていたなあ、と思い出す。

（わっかんねえ。なんかドツボにハマつちまた…）

銀時ははあ、とため息を吐く。

「あのー…銀さん?」

「…あ、悪い、珍しく考え」としゃべった

「銀ちゃん…」

神楽がブスツとして銀時を横目で見る。

「……。」

それを見た新八も、銀時を複雑そうな顔で見る。

「…まあ、お前えらも俺の昔話が綺麗なもんじやねえ事くらいはわかつてゐるだろ」

銀時は、吹つ切れたような表情をしている。

「そんなの屁でもないネ!」

「何だつて受け止める覚悟、とつこの昔からできてますよー…」

2人は必死だつた。

「話さなきやならねえみたいだな。状況が状況だし?」

銀時はただ面倒くさそうに頭を搔いた。

「銀さん…」

「銀ちゃん…」

2人は安心したように笑った。

「まあ、良いだろ。ヅラも、辰馬も、お前らになら何とも適當である。

が、確かに桂と坂本なら問題あるまい。

これから何かが起こるのは確からしい。
話す必要性も銀時には感じられた。

(後で…ヅラの所にも行った方が良いな)

「…とりあえず。出かけるぞ」

「え? どこに! ?

新ハと神楽はいきなりの事に驚いた。

「良いから。ついて来い」

まさか2日連続での場所に行く事になるなんて。

あの人は、喜んでくれるだろうか。

To be continued . . .

第三十四講 世の中向でも上手べこべと想ひたら大間違いだローハヤロー（後書き）

ありがとうございました！

ツッキー もやいちゃんも銀さんガ心配なんですよね（笑）

しかしあいつやんを書くのは

苦労します……

次からは、遂に、とこう感じです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4101i/>

銀魂 摂夷篇

2011年11月17日21時03分発行